

前略、神を殺した世界
最強の魔術師が営む冒
険者パーティはいかが
ですか

ネコわさびRPG

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術を極め、ついには神様すら殺した世界最強の魔術師アーサー。しかし強くなり過ぎた彼は、もはや誰の手にも負えない危険人物と化していた。

それゆえに、世界中の冒険者パーティーからは追放され、あらゆる街や国からも追放され、森や山やダンジョンからも追放され、拳句に世界中の猛者から命を狙われる始末。この世の全てから追放されたアーサーは、孤独になってしまう。

それでも懲りずに、彼は世界中を歩き回り、勝手気ままに暴れ回る。

アーサーの目的は『自分以外の世界最強を見つける事』。

そして見つけた世界最強を集めて、『自分だけの冒険者パーティーを作る事』。

世界最強の魔術師による、世界最強探しの旅が始まる。

目次

エピソード1

序章【追放された世界最強】—— 1

0 1【下らないほどの幸せを】

19

0 2【理由があつたわけじゃない】

32

0 3【裁きの鉄槌】—— 39

0 4【魔術という文明を丸ごと呑み込

んでしまいかねない程の】—— 54

0 5【ターンエンド】—— 70

0 6【この世で最も恐ろしい攻撃】

87

0 7【空の色】—— 116

0 8【全ての始まり】—— 151

0 9【決着】—— 193

1 0【世界を愛した者達へ】—— 202

1 1【普通の幸せ】—— 239

1 2【最強になつた者達へ】—— 256

1 3【世界の楽しみ方】—— 278

終章【前略、神を殺した世界最強の魔術

師が営む冒険者パーティはいかがです

か】—— 306

エピソード2

序章【新天地へようこそ】—— 330

0 1【ごくごく普通の、どこにでもいる

よ
う
な
】

02 【旅は道連れ世は情け】

03 【判決】

383 360 336

エピソード1

序章【追放された世界最強】

その日、一つの『招待状』が全世界にばら撒かれた。

全ての大陸、全ての国、全ての街、全ての村、全ての地上に住む人々へ。

全人類の頭上から。

全人類に向けた『招待状』が。

羊皮紙という形で、ハラリハラリと降り注いだ。

誰もがその『招待状』を手にとって、誰もがその『招待状』に目を通した。
反応は千差万別だった。

恐怖する者。

絶望する者。

歓喜する者。

憤慨する者。

悲壮に暮れる者。

不安に駆られる者。

溢れる興奮に身を任せる者。

熱い闘争心を燃やす者。

その『招待状』を握り潰す者。

その『招待状』を胸に抱く者。

その『招待状』を、恐ろしさのあまり破り捨ててしまう者。

その『招待状』にさしたる興味も示さず、すぐに放り投げてしまう者。

人々がそれぞれの反応を示した『招待状』。

しかしその羊皮紙に書かれていたのは、全て同じ内容だったという。

その『招待状』は、こんな書き出しで始まっていた。

前略、
神を殺した世界最強の魔術師が営む冒険者パーティはいかがですか

「もう我慢の限界だ！ お前みたいな奴は俺のパーティにはいらん！」

——俺の名前はアーサー。

——俺自身、その名をととも気に入っている。

「あなたを招待した私が馬鹿みたいだわ。私の言う事も聞けない人なんかいらん
のよ」

——誰も名前を知らねえような片田舎に産まれ、農民の子として育ち、そこそこ幸せに暮らしていた事だけは記憶している。

「ふざけんじやねえ！ 勝手な行動すんなって何度行ったら分かんた！ ……もうお前、いらねえよ。別の有能な奴を用意してんだ。明日からお前、来なくていい」

——ある日、魔術の才能を見出され、流されるまま魔術の修行を積む羽目になり。

「陽動も真面にできねえのかよ！ 勝手に動き回りやがって！」

——とにかく過酷な修行を必死に乗り越えて、いつのまにか本当に魔術師になっていて。

「てめえホンツトにいらねえよ。くそ、俺より目立ちやがって……。気に食わないんだよそのツラが！ 自分が正しいみたいない顔しやがって！」

——せっかくだから魔術を極めて、あらゆる猛者を薙ぎ倒して。

「あなたのような存在はもはや悪魔と同義、この教会に置いておくことはできません。汚らわしい、今すぐ浄化しなければ……！」

——神様も殺して、『世界最強』の座も手に入れて。

「貴様のせいで！ 私か英雄になるチャンスがすべて水の泡だ！ 何年準備したと思ってる!? ようやくここまで来たというのに……！ 貴様のせいで台無しだ！ どう責任を取るつもりだ！ この化物が!!」

——念願だった冒険者になったはずなのだが。

「見て下さい皆さん！ あいつです！ この世界を災いをもたらす化物は！ この平和な世界に化物など不要！ 今すぐにでも排除しなければ！」

——こうして見る限り。

「あの化物を今すぐ殺せ！ あんな奴がいるから全部上手くいかないんだ！ 世界も、善良な民衆も、この国も俺たちも！ 全部あいつが狂わせたんだ!!」

——この世界は、俺が期待したものは、どうやら少し違うらしい。

*
*
*

「失敗だ」

荒れ果てた大地に、声が響く。

破壊の限りを尽くされ、更地同然となってしまった大都市跡。そんな跡地の中央に巨大な階段と玉座があつた。

瓦礫の玉座だ。

粉々に砕いた建築物や石畳の残骸を、五〇個でも一〇〇個でも積み重ねた瓦礫の山。声の主は、その頂点に腰を下ろしていた。

「……下ンねえ、全部」

後ろに靡く刺々しい頭髮。見る者全てを燃やし尽くすような赤い瞳。そして何より特徴的な、その凶悪なまでに禍々しい存在感。

そんな『少年』が一人、玉座の上で己の掌をため息まじりに眺めていた。グチャグチャの血にまみれた、己の掌を。

自分の血ではない。

顔も名前も知らない誰かの血だ。

「はああああああああああああああああああ……失敗した」というわけで、どうやら失敗してしまったらしい。

アーサーはぼんやりとそう察して、適当に辺りを見渡した。

もはや失敗なんていつもの事と言えbaumいつもの事だったが、しかし今回に関しては、いつもより派手に失敗したようだった。

なぜなら——彼の視界に映るのは、無数の『死体』だったからだ。

潰れた頭部が。こじ開けられた胴体が。雑巾みたいに搾られた腹が。皮膚も肉も爆ぜた手足が。

原型も留めないほどバラバラの肉片が。元の形が分らないほど小さく圧縮された肉塊が。グチャグチャに混ざり合った死肉が。一人で勝手に腐った血肉が。綺麗に引き裂かれて断面が輝いて見える遺骸が。なぜか爆発的に体積が膨らんで岩石のように歪な形になって息の根を止めている死骸が。

何十、何百……千にも及ぶ数の死体が、大地を埋め尽くさんばかりに転がっていた。全て、アーサーが作った死体だ。

彼が殺した人達だ。

「うわあああああああ!! ああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ!?!」

「あ?..」

その時だった。どこからともなく、壮絶な絶叫が響いて来た。

瓦礫の山に腰を下ろすアーサーの目の前に、尻餅をついて喚き散らす男がいた。

……確か、『勇者』と名乗る雑魚共の一人だったはずだ。

それ以外にも崇高で長ったらしい肩書をペラペラ名乗っていたような気もするが、そんなもの、アーサーはとつくに忘れてる。

「はっ!」

アーサーは、その男を見て。

気紛れでなんとなく生かしておいた、有象無象の男の絶叫を聞いて。

「いいぜ、最高だ」

思わず笑っていた。

絶叫……いいじゃないか。自分の心を偽らず、素直に恐怖を吐き出そうとするその姿

勢は、何にも増して美しいとアーサーは思う。

やっぱり我慢というのはダメだ。体に悪いし、心の健康にも悪い。

何より我慢は、つまらない。

「おーおーおーおー、どおーしたお前、急に盛り上がりやがって。だがいいぜ。盛り上が

ンなら一人よりも、二人の方が面白え」

アーサーの赤い瞳が、凶悪に光る。

その両眼に見据えられ、『勇者』の男は「ひっ」と短く悲鳴を上げる。

「で？ 盛り上がってンものになンで座ってンだよお前。立て。地べたから空を見上げる

より、高いとつかから世界を見渡した方が何倍も楽しいぞ」

「ひii!?! な、なんつ、どうしてえ

ええええええええええええええええええええええええ!!」

「どうして？ それは何に対しての質問だ？」

「どうし……なん、でつ、生きてえ……!?!」

「そんなに不思議か? 俺が生きてんのが。たかだか『勇者』だの『賢者』だの『劍聖』だの『大祭司』だの『聖者』だの『戦闘王』だの『錬金術師』だの『魔導士』だの『呪術師』だの『半神』だの『英雄』だのが一〇〇〇人程度つかかって来ただけだろ」

楽勝だ、と簡単に吐き捨てるアーサーに、男はなおも恐怖の声を上げ、

「ア、ア、ア……ころつ、殺してえええええええ!?!」

「なんで全員殺したのかつて? あー……それは言い訳できねえ。いや、マジで悪いと思ってる。すまん。こんな簡単に死ンじまうとは思ってなくてよ」

不気味なほど素直な謝罪の言葉があつた。

しかし、その直後——

「まあでも大丈夫だろ。これで人類が滅ぶわけでもあんめえし」

——その。

あまりに呆気の無い、切り捨てるような発言に。

「は……はああ?!」

『勇者』の男は思わず呻いていた。

しかし、そんな呻きもアーサーの耳には入らない。

少年は一人で勝手に「うんうん」と、腕を組んで頷きながら、

「反省つてのあ大事だな。うん、俺も反省した。やっぱ人を殺しちゃうのあ良くねえよ、弱い者いじめみてえで最悪な気分になる。今日学んだ。おし、これからは二度と人は殺さねえ。神に誓つてもいいぜ？ ……神は俺が殺したんだが」

大事なおもちゃを壊してしまつてごめんなさい。

もはや、その程度の感覚で。

「つーかまさかだつたな。俺の知らねえ所で、まさか俺が『世界を滅ぼす大災害』つて呼ばれてたとは。暴れ過ぎたかなあ……はああああああああ……失敗した」

一体どこで失敗したのだろう？

とびつきり熱い朝風呂に入りたくて、無理やり火山を噴火させて街一つを蒸発させてしまったのがマズかったのだろうか。

もしくはあの時か？

地盤ごと叩き割つて巨大地震を止めた時？ 森から攻めて来た五〇〇〇体の魔獣を一足で蹴散らした時？ 海の幸を食べたくて海を丸ごと干上がらせた時？

いいや、やっぱり。

神様を殺してしまつたあの瞬間が、決定的だったのかもしれない。

「ま、どうでもいい」

何であろうともう過ぎた事だ。今さら過去は変えられない。

それに、どうであつたところで、結局のところ、自分には何も不都合は無い。

自分に不都合が無いのなら、何もかも、どうでもいい。

「それで？」

「ひいつ!？」

「強くなり過ぎた俺を、危険だつって殺しに来たわけだ。世界中から『最強』を集めて、徒党を組んで軍隊作って、寄つてたかつて俺一人を殺しに来たわけだ」

目の前で尻餅をついたまま、呻くばかりの自称『勇者』を見て。

アーサーは、

「いい、最高だ」

自分の心を、馬鹿正直に言葉にする。

「世辞じゃねえ、心から感激した。確実な方法、確実な力で、確実に相手を討ち取ろうつ
つうその気概……燃えるねえ。盛り上げてくれんじゃねえの」

そう言いながらアーサーは、瓦礫の玉座から立ち上がり、ゆつくりと歩き出す。

死体の上を、堂々と歩く。

血肉を避けるような真似はしない。しつかり、敬意をこめて踏みつける。

避けて歩くだなんて、そんな汚いゴミを扱うような振る舞いは、殺した相手に失礼と
いうものだろう。

「俺がもつちよい弱けりや確実に死ンでた。あつぶねー、ワクワクすんなあオイ」

「うあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ!! く、来るなっ、来るなあああああああああああああああああああ!!」

泣きじやくり、丸めた紙屑みたいに顔を歪め、『勇者』の男は装備していた鎧も、手に
持つていた剣も全て投げ捨て、ついには額を地面に擦り付け始めた。

「ごめんなさい! ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごべんなさい
いいいいいいいい!! ゆ、許しっ! 許してっ、くださあ……っ!!」

「あ? ……ンだよ、褒めてるだけだろ」

「なんでも! 何でもします!! なんでも! あっ、あげます! お金! と、土地

もっ、あげるから!! だから許してください! お願いします! お願いします! お
願います!!」

目も当てられないほどに無様だった。

誉ある『勇者』として、祭り上げられていたはずの男がだ。強敵に立ち向かう事も、奮
起する事もせず、突如叩き付けられた『圧倒的な力の差』を前にして、完全に心が砕け、
何度も何度も地面に頭を打ち付け、許しを乞うだなんて。

自分の心を素直に曝け出すその潔さは、いつそ美しくもあるのだが……ここまでヒドイとむしろ、『憐れ』という感情が湧いてしまう。

「……………ンー……………」

アーサーは、少し考えるみたいに首をひねり、

「……………お前いま、なんでもしてくれるつつつた?」

「はいっ、はい!! 何でもします!! 何でも言うこと聞きます!!」

「へえ、じゃあなに。俺のお願い、聞いてくれたりするわけ?」

「します! じまず!! しますしますします!!」

「マジで? ははっ、太っ腹だね。じゃあ丁度いい、一つお前に頼みがあるんだわ。それ聞いてくれたら許してやる」

アーサーがそう言った途端だった。『勇者』の男はこの上なく幸せそうな顔をして、涙を拭いながら「ありがとう、ありがとう」と何度も感謝を口にする。

直後だった。

「じゃあさっそくだ。俺ともう一戦付き合ってくれよ」

アーサーの言葉を。

は絶望の声を炸裂させていた。

目の焦点が定まらない。

現状の把握が正しく行えない。逃げる力も出ない。

己を保つ事も、理性を保つ事も呆気なく放棄して、『勇者』であるはずの男は心の底から後悔した。その後悔のままに、叫ぶ。嘆く。喚く。狂う。

しかし、アーサーはそんな事情をくみ取らない。

彼は大きく、一步を踏み出した。

「さて、ゲームスタートだ最強」

勘違いでつけ上がっただけの『力持つ者』達に。

真の世界最強が、無邪気な鉄槌を振りかざす。

01【下らないほどの幸せを】

——世界最強になっただくらいで幸せになれるわけがねえ……だと？

いいや妥当だろ。

むしろ幸せになるべきだと、声高らかに主張したい。

世界最強、天下無敵……いいいやねえか、カツコ良くて。

強敵達をバツバツサと薙ぎ払い、歩みを邪魔する障害物を一撃で吹っ飛ばし。

世界の頂点に足をつけ、つけ上がった連中を思いつ切り見下して。

ンで、自分は両手いっぱいにはっぴん抱えて、ハーレムこさえて高笑い。……いい
じゃねえか、夢がある。

夢も見れねえ人生とか、面白くともなンともねえ。

——非現実的だったか？

確かにそれも一理ある。

一度でも現実なンてもンを見ちまった奴からすりやあ、俺の言ってる事なンて馬鹿で幼稚で非現実的だろうぜ。

けど、だからどうだつてンだ？

なにせ『世界最強』だぜ？ 現実がどうか知らねえよ。

そこに夢とロマンがあるからこそ、皆が惹き付けられるンだろ。

——あ？ 俺？ ……俺か？

参つたな。そう問われると、全く返す言葉がねえ。

果たして俺は、幸せと言えるのか？

この世界で最強になって、この世界で頂点に君臨して、俺は幸せになれたのか？

もしかしたら、そんな下ンねえ事を考えちまつてる時点で、とつくに俺は幸せになれてねえのかもしれないと……そう思つちまうわけだ。

ホント、下らねえことに。

「貴様が『災厄の王』アーサーだな!?
気付いたところでもう遅い!
我々『騎士連合』

*
*
*

はすでに貴様を包囲している！ 逃げ場は無い！ 貴様のその汚らわしき命、ここで散らすがいい!!」

なぜか街を散歩していただけで災厄認定をぶちかまされてしまった。

『騎士連合』と言えば、魔力を武器の形にして戦う『魔装騎士』を国中から集めて結成した、この国最大規模の戦闘部隊だつたはずだ。……多分。

いまいち覚えていないけど。

「災厄の王！ 討ち取つたりいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

なんだかよく分からなかったので、とりあえず襲い掛かつて来た騎士達を一人残らず空の彼方へぶつ飛ばした。

——アーサー。一八歳。男。魔術師。甘いお菓子が好き。

「私達は『聖女の集い』！ 下界に混乱をもたらす大悪魔とは、アーサー、アナタの事ですぬ!! 無辜の民を惑わせるその罪深さ、慈悲の御使いである私達とて見逃せません！

さあ！ 我らが『聖導魔法』の前にひれ伏し、その魂を浄化させなさい！」

もう街には住めないという事が発覚したので、とりあえず近くの森の中に捨て置かれていた古い教会に寝泊まりしていただけなのに、いつの間にか大悪魔判定を喰らっていた。

純白の衣装に身を包む、見るからに清らかな印象を持つ女性の集団。

しかしその実、『聖女の集い』は超武闘派の信仰宗教として巷では有名だ……という話を、風の噂で耳にした記憶がある。

詳しくは知らないけど。

「それでは行きます……お覚悟!!」

せっかくのハーレム状態なので、とにかく目に付いた聖女様を片っ端から襲って脱がして食い散らかして骨抜きにしてやった。

——『世界最強』『天下無双』『神殺し』『究極生命体』……異名は多数。

「立ち上がるのだ皆の者よ! 魔王に負けるな! 守るべき者のため、愛する者のため! その身を犠牲にして立ち向かうのだ! 見よ、あれが敵の姿だ! 魔王アーサー!

我ら『勇者一行』が必ず、お前を討ち取ってみせる!!」

森からも追い出され、苦肉の策で『ダンジョン』の最深部に居座っていただけなのに、いつの間にか魔王扱いされていた。

聖剣を掲げる少年を筆頭に、杖を持った女や、毒の付着したナイフを握る男で構成された意味不明な四人組のパーティが、愛と勇気の力でダンジョン内の魔獣達を蹴散らしながら迫って来る。

「立ち止まるな！ 突き進め！ この世界のために!!」

どうやらこの世界のために突き進んでいるらしい『勇者一行』を、コチラは昼寝のために一人ずつダンジョンの天井に突き刺してやった。

—— 『悪魔』『特級災害』『狂人』『世界の天敵』……悪名も数多く。

『貴様が侵入者か。強者の気配を察し出向いてみれば……下らん、取るに足らぬ人間風情ではないか。我が棲み処へ土足で踏み込むその所業、よほど命が惜しくないと見える。この「グレイブルドラゴン」の怒りを買った者がどうなるか、矮小な身でとくと思

い知れ!』

街も森もダンジョンも駄目なら、いつそ山に籠ってやろうと思っていたら、なんと先住種族がいらっしやった。

伝説の存在と名高い神龍・グレイブルドラゴン。

文明よりも先に生まれ、文明が滅びた後も生き続けると言われる伝説そのもの。それが今、目の前に堂々と立ちはだかっている。

二つの国をまたぐ大山脈の頂上。

少年のやる気はもう、そこで尽きてしまった。

魔術を極め、世界最強となり、この世の頂点に立ったはいいものの、夢にまで見た冒険者パーティからは追放され、あらゆる街や国からも追放され、森にもダンジョンにも住み付けず、ようやく見つけた山の奥地でさえ、このザマか。

下らない。

心の底から、つまらない。

『覚悟するがいい人間!! 我が伝説の力を前に朽ち果てるがいい!!』

ゴッ!!!
!!! という閃光が、グレイブルドラゴンの口から炸裂した。

都市を丸ごと消し飛ばすほどの破壊の奔流が、一切の容赦もなく襲い掛かる。それを真正面に見据えながら、少年は、

「まーた失敗だ」

緊張感など微塵もなく、そんな風に呟いた。

「まったく……いつになったら成功できるだよ、俺あーよ」

直後だった。

伝説など霞んでしまうような猛威が吹き荒れる。

——というわけで。

「……下んな」

いつものようにそう呟いて、少年は血と肉にまみれた自分の体を見下ろしていた。

いつものように、それは自分の血肉じゃない。

いつものようにその少年は、どこか誰とも分からない奴の体液と肉片にまみれなが

おかげで大山脈を丸ごと全て削り取る羽目になったが、別にいいだろう。人様の家を壊したわけじゃないし。

ただ、困った事が一つ。

「せっかく見つけた寝床だつてのに、自分で壊しちまうとか……ダサ過ぎンだろ」
本末転倒もいいところ。

なにせ二つの国をまたぐほどの大山脈。『相当な事』でもない限り誰も近寄らないし、『結構な事情』でもない限り追放される事はないだろうと思っていたが。

皮肉にも、『相当な事』も『結構な事情』も、まさに自分の事だった。

「……どおーすっかなあ」

そして、ようやく見つけた新たな寝床も、自分で消し飛ばしてしまったわけだ。

そりゃあやろうと思えば死体の上だろうが瓦礫の上だろうがどこでだって眠れるが、生憎そこまで無神経をこじらせちゃいない。

この世のどこかに寝床があるのなら、自分だつてそこで寝たい。しっかりとしたベッドと、しっかりとした布団で、しっかりと熟睡を味わいたい。

人間として、それぐらいの欲は許されるだろう。

そんな欲も許されないというのなら、この世界はあまりにも、救いようが無さ過ぎる。

「……街に戻るか」

何はともあれ行動しよう。ここに残っていても意味が無い。

いや、残っていた方がむしろ厄介だ。騒ぎを聞きつけた『騎士』やら『聖女』やら『勇者』やらが、変な勘違いを起こして攻めて来ないとも限らない。

「つまんねえ……どこもかしこも」

全てを手に入れ、全てを極めて、全ての頂点に立つてなお、寢床一つも確保できないというのなら、本当にこの世界は救いようが無い。

……いや、もしかしたら。

「はあーあ……全部、全部、失敗だ」

救いようが無いのは世界の方ではなく、自分の方かも、なんて。

そんな下らない事を考えながら、アーサーは今日も一人、自分が作り上げた惨状からのんびりゆつくり立ち去って行く。

……街へ戻る途中、案の定、騒ぎを聞きつけた『召喚士』達が召喚獣を侍らせて襲い掛かって来たので、とりあえず近くの森ごと吹き飛ばした。

02【理由があつたわけじゃない】

——別に、何か理由があつたわけじゃない。

「寝床だ寝床、ベッドがありや何でもいい」

きっかけがあつたわけでもないし、欲望や信念があつたわけでもない。

ただ進み続けただけだった。

「酒と肉も欲しい。極上のだ。そこにマブい女でもいりやあ文句なしだ。両脇に女あ抱えて、肉を喰らつて酒飲ンで……そそるねえ」

何を間違えてこうなったのか。もしくは何も間違えなかつたからこうなったのか。どちらにせよ、『あの日』がすべての分岐点であつた事だけは間違いない。

魔術の才能を見出された、あの日。

『師匠』と出会つたあの日。

自分は貧しい田舎農家の生まれだった。そして農民として生まれた以上、農民として一生を終えるのが普通だった。

普通の生活を、普通に享受し、普通に死んでいく——それもそれで普通の幸せだった。そんな普通で、本当は満足するべきだったのだ。

だが生憎、幼かった自分は、『普通』程度では満足できなかつた。

そんな時に提示された魔術師への道……掴まずにはいられなかつた。言つてしまえば、それだけだった。

「水浴びは飽きたなあ……やっぱ風呂だ。酒、肉、女、風呂、そしてベッド。……女以外ならどーにかなつかなあ」

魔術の才能だけはあつた。

農家出身で学も教養も無かつたが、暴力の才能にだけは恵まれていた。

そして暴力の才能があれば全てが手に入った。寝床も、食い物も、女も、地位も、栄光も、何もかも全てが。

だから苦勞はしなかつた。しかし苦勞しなかつた分、退屈はしていた。だから進み続けた。退屈を紛らわせるために。退屈から抜け出すために。

——気付けば『世界最強』になっていた。

「女、女……奴隷でも買うか？ それもだりいしなあ」

魔術師としてだけじゃない。勇者も剣聖も賢者も騎士も聖人も戦士も神様も、もはやアーサーの敵ではない。

たった一人の頂点。

真正正銘の世界最強。

「胸はデケエのが良いな。ケツは小さめ、でも肉付きは良く」

それが、これだ。

見晴らしのいい街道をボンヤリ歩き、頭上に広がる快晴の空を見上げつつ、下らない妄想に耽つた少年が、神すら殺した世界最強の魔術師の姿だ。

我ながらなんて下らないジョークだろうと、アーサーは思う。

「酒は最高級。良い樽で作つた良いブドウの酒。肉は……やっぱズウィールのもも肉。歯ごたえだな歯ごたえ。柔らかい肉なんか食べるかよ」

頭の中はさつきからずつと、街に着いてからのお楽しみでいっぱい。

酒、肉、女、風呂、ベッド……なんて心地良い言葉の並びだろう。

この世にあまねく全ての幸せが、一挙に凝縮されているじゃないか。

「風呂は熱め。ベッドは低反発。そこに女がいりやあ上等……あー！ あの聖女共から三人ぐらい搔つ攫つてくればよかったじゃねえか！ はあーあ……また失敗だ」

実現できるかどうかなんて大した問題じゃない。妄想できる事が重要なのだ。

思い描く事をやめたら、現実しか見えなくなったら、もうおしまいだ。

世界最強ですら、終わってしまう。

「ま、どおーでもいい」

のんびり歩く街道の先には、行く手を阻むように、巨大な壁が立ちはだかつていた。

要塞都市『カルドキア』。

大都市一つを丸ごと全部、高さ七〇メートルの外壁で覆ったその巨大要塞は、もとはと言えばアーサーを受け入れてくれた唯一の街だった。

それこそ本当に余計な事。『騎士連合』の起こした騒ぎが、なぜか『アーサーが原因』と決め付けられ、カルドキアを追い出されたのだ。

……いや、彼を力づくで追い出せる者などこの世にはいない。変に騒ぎが大きくなり、居心地を悪くしたアーサーが『自分から出た』のだ。

それが約一週間前の話。

それから色々な場所を転々とし、どこもかしこも追放され、もしくは自ら台無しにして……他に頼れる場所と言えば、もうここしか残っていないかった。

「あー疲れた、長旅はこれつきりにしてえな。……まあこれならグツスリ寝れんだろ」

今度こそ邪魔が入る心配はない。『騎士連合』なら喧嘩を売られた際に、本部ごと叩き潰してやった。そのせいで都市全体の防衛力が四〇パーセントほど落ちたらしいが、それこそアーサーの知ったことじゃない。世界最強の彼にとっては、何も不都合は無い。そして。

自分に不都合さえ無ければ、何もかもどうでもいい。

「さあーてとお。帰って来たぜー、愛しの我が家」

他人様の都合などお構いなし。

アーサーは鼻歌でも歌うような気分で、都市の外壁に近付いて行く。

……この時、アーサーは三つ、大きな間違いを犯していた。

一つ目。

そもそも自分がカルドキアから追い出されたのは、『騎士連合』が余計な騒ぎを起こしたからだと誤解していた事。

二つ目。

カルドキアを追い出された理由が、本当に自分にあると気付かなかつた事。そして三つ目。

なんだかんだで、自分は最強なのだと思っていた事。

世界最強の彼からすれば、自分以外の森羅万象は飛ばすような有象無象。どんな魔獣だろうが魔術師だろうが、自分の前では塵にも等しい。傷一つ付けられまい。本気でそう思っていた。事実、これまで本当にそうだった。

だから、見逃していた。

要塞都市カルドキアを囲う外壁の一点で、チカツ、という謎の白い光が瞬いたのを、アーサーは完全に見ていなかった。

仮に見ていたとしても、気にも留めなかつただろう。

それが根本的に間違えていた。

「あ〜？」

次の瞬間だった。

五〇〇メートル!!!!!!
カツツツツ という凄まじい閃光が一直線に襲い掛かり、アーサーを中心とした半径
ルの大地が丸ごと蒸発した。

03【裁きの鉄槌】

——曰く、それは世界随一の硬度をもつ金属類で建設された。

——曰く、それは国一つを丸ごと買収できる程の資金をかけて造られた。

——曰く、それはどんな兵器を用いても傷一つ付けられなかった。

要塞都市カルドキア。

その周囲を覆う高さ七〇メートルの外壁。

「第一波、着弾！ 対象・アーサーへの着弾を確認しました！」

「油断するな！ 第二波と第三波、同時に用意！」

部下からの報告に、白衣を着た老人が声を張り上げて命令する。その指示に従うように、バタバタと忙しなく行き交う兵士達の足音があつた。

壁の内側に広がる巨大都市……からではない。

壁の『中』からだ。

一体、誰が思うだろう。

「カルドキアを守る巨大な外壁の中に、実は人が行き来できる段層構造の空洞が存在し、そこに大量の『兵器』がズラリと並び、外からやって来る脅威に目を光らせていた……なんて。

壁の中にしつらえた壁内防衛施設。

そこを埋め尽くす兵士達と、『殲滅兵器』の姿。

「二号および三号、充填を始めます！」

そんな報告の直後、またしてもカルドキアの外壁に白熱した光が帯び始める。

……それは、巨大な『鏡』に似た兵器だった。

人の背丈ほどの大きさ。楕円形の姿見のような外見。しかし実情は違う。それは数百もの特殊な結晶を加工する事で作り上げた『光学兵器』だった。

太陽の光を一カ所に集束し、結晶内で数千数万と反射させ、それを一点に凝集して放出し、熱で対象を焼き払う破壊兵器。

そしてその威力はたった今、どれほど強力かを示してみせた。

カルドキアの外壁の目の前に、直径一キロメートルのクレーターがあった。

そのクレーターは、隕石の落下のような『質量』による破壊痕ではない。『熱』によって地面が融解させられた痕だ。

「もう一度言う！ 決して油断するな！」

白衣の老人の声が響く。

「相手は世界最強だ！ 塵すら残さぬ覚悟で臨め！ 第二波と第三波、用意は？」

「二号および三号、充填を完了しました！ いつでも撃てます！」

「よし！ 発射準備！」

壁内に備え付けられた、合計二〇個もの鏡に似た光学兵器。そのうち一つは最初の一撃で沈黙している。充填までにはばらく掛かるだろう。

だが、残りの一九個で十分だ。

「放て!!」

白衣の老人の声と同時だった。

外壁に、円形にくり抜かれた穴がある。遠くから見れば点にしか見えないほどの直径。そこに嵌め込まれた鏡に似た光学兵器が、チカツ、と白く瞬いた。

直後だった。

光そのものが、地上に突き刺さる。

一つだけでも悪魔的な閃光が、二つ合わせて一点に凝集して放たれた。

まさに天から地を引き裂くような一撃。それが大地に突き刺さった瞬間、直径一キロメートルが文字通り消失した。

熱波が着弾点を中心にして同心円状に広がり、大地は融解したマグマとなって吹き飛んだ。最初に消滅した一キロ範囲だけに留まらず、さらに広範囲にまで熱波の猛威が拡散していく。

「アーサーへの着弾を確認！　さらに一号の充填、完了しました！」

「一瞬も隙を作るな！　第四波、発射!!」

本当に一瞬の時間差も無かった。

第二波と第三波が止まると同時、入れ替わるように一発の閃光が突っ込む。

またしても、アーサーが立っていた地点へと。

猛烈な光。爆発的な熱。消える大地。蒸発する地上。焼けていく地面。

壮絶極まりない熱量だった。

世界一の鉄壁の内部にいる兵士達でさえ、自分らもその熱の餌食になるのではないかと不安に思うほどの。

「だ、第四波！ 直撃を確認しました！」

「よし！ 続いて四号から一〇号！ 発射準備！」

白衣の老人の指示と共に、今度は七つの光学兵器が同時に動く。

矛先はやはり、

「終わりだ世界最強。この街に戻って来たのが間違いだったな」

老人が、凶悪な笑みを浮かべながら右手を上げる。

「放て!!」

振り下ろす。

そして、七つの閃光が放たれた。

今度は一点に集中せず、七つの光は円を描くように着弾する。それでも効果は絶大だ。直撃はしなくとも、同心円状に拡散する熱がアーサーを取り囲むように押し寄せて行く。

一斉照射は、一〇秒にも及んでいた。

やがて充填した光を全て出し切り、徐々に閃光は弱まっていく。

「まだまだ!!」

老人の声が響いた。

まだ終わらない。終わってはならない。十分やったなどと満足しない。

油断も、慢心も、希望的観測も、根拠の無い自信も、全て捨てる。

「事前のシミュレーションを思い出せ！ 光学兵器『天の梯子』あまはしこの攻撃から奴が逃走を試みた場合の、想定される逃走方角と距離を算出！ その方角と距離に合わせて、一一号から二〇号まで一斉に放て！」

残り一〇個の光学兵器『天の梯子』が、チカツ、と白く瞬く。

直後、眩し過ぎる悪魔の閃光が四方八方に放たれた。

ある光は西の方角五キロ先へ。

ある光は北北東の方角三キロ先へ。

ある光は上空二キロメートル先へ。

一〇本の光線がそれぞれの方角・距離を駆け抜ける。

終末の光だった。燃える事も、炭化する暇も無い。絵に描いたような『消失』が見渡す限りの景色を丸ごと消し飛ばしていた。

その攻撃が及ぼす環境的な悪影響など考えない。

カルドキアの周辺が、この先何百年と不毛の大地になるうが知った事じゃない。

奴が生きている間に撒き散らす災害の予測被害規模と比べれば、そんなものミジンコ

ほどにも満たない。

そうして、総攻撃時間一五分に渡る全ての照射が終わった。

壁の中にいる兵士達は『望遠器具』を使い、壁ごしに外の様子を伺った。

絶句した。

そこにあつたのは、もはや草木の生い茂る自然豊かな街道ではなかった。

地獄。

閃光の着弾点は地底深くまで届き、ポツカリ黒い大穴が出来てしまっている。周囲はクレーターのようにつらられ、さらにその周りも赤く熱され、今なお地上は、光学兵器の余熱で蒸気と化しつつある。

黒く焼け焦げた地上。

そこからも濛々と立ち昇る灼熱の煙。

分厚い壁の中にまで染み込んで来るほどの、地面が焼ける異様な匂い。

そんな世界が。そんな地獄が。

向こう数キロメートルまで、見渡す限りに広がっている。

「……………」

光学兵器を操作していた当の兵士達ですら、息を飲むような光景。

それを、自ら生み出すよう指示しておいて、

しかしそれは歓喜というより、怒りに近い声だった。

「科学は魔術に及ばぬだの、進歩の遅れた子供騙しだの、旧世代の遺物だの、ふざけた事ばかりぬかすカス共が！ 魔の術に酔い痴れただけの猿共が！ 理論を、計算を、仮説と実験の反復を！ そこから導かれる推論と結論の美しさを馬鹿にしおつて！ ……しかしこれで証明された。わたしの！ 正しさが！ 全て！！ 証明されたのだ！！」
笑う。

「そうだ猿だ！ 何が魔術だ下らん！ 貴様らなんぞ自慰を覚えた猿と同じだ！」
笑いが止まらない。

「これでようやく今まで自分を馬鹿にしてきた奴らに吠え面をかかせられるかと思うと、おかしくてたまらない。」

「まずは貴様が礎だ！ 魔術師アーサー！ わたしの正しさの踏み台だ！！」

「あの……先生……」

「愚者共の王である貴様を殺せば、魔術協会もわたしを無視できなくなる！ これは宣戦布告ではない！ 勝利の凱旋だ魔術師共！ 神秘なんぞに頼らずとも絶大な力を振るえる事、これからたっぷり思い知るがいい！」

「先生、あれを……」

「素晴らしい事を思い付いたぞ！ 奴の次は貴様らだ魔術協会！ 次は貴様らを焼いて

やる！ 塵すら残らん！ 馬鹿の一つ覚えのように選ばれただけの選ばれぬだの差別を繰り返す貴様ら異常者もろとも！ 魔術という文明全てこのわたしが裁きの鉄槌を」

「あの、先生……」

「なんだア!? さつきからボソボソと!!」

老人は恐ろしい剣幕で怒鳴りながら振り向く。見るとすぐ背後に、怯えた様子で体をビクつかせるヒョロ長の痩せた部下が立っていた。

しかし、老人はその部下を見て「？」と眉をひそめる。

話しかけて来た部下は、先程からずっと……壁の外を指差していたからだ。

「先生……あ、あれ……見て下さい……」

怯えた部下の言葉に、なぜか老人は素直に従っていた。

バツ！ と部下の男から望遠器具を奪い取り、それを覗き込む。

そこから見えるのは、煙が濛々と立ち昇る焼け野原。最初にアーサーが立っていた場所だ。もつともこれだけの光学兵器を一斉照射したのだ。奴の体などつくに蒸発し、塵一つ残っていないだろう。

そう思った次の瞬間だった。

チカツ、と。

「は？」

壁の外で。

焼け野原のど真ん中で。

正確には、最初にアーサーの姿を観測した地点で。

謎の白い光が、瞬い——

*
*
*

要塞都市カルドキア。

その周囲を囲む、高さ七〇メートルもの巨大な外壁。

あらゆる外敵から都市を守る鉄壁の盾であり、どんな魔術や兵器ですら傷一つ付かないとされる世界最強の鎧。

それが真正面から消し飛んだ。

轟音も衝撃波も無い。ただ強烈な『熱波』があつた。

その正体は『光』。壁の外から放たれた閃光がカルドキアの外壁に直撃し、そこを中心に外壁はオレンジ色の粘着質な液体と化し、瞬く間に吹き散らされた。

カルドキアが『要塞都市』と称される所以でもあつた、巨大かつ頑丈な外壁が、根こ

そぎ消え去っていく。

先程の光学兵器を彷彿とさせる現象。

その、発生源は。

「はあーあ、また失敗だ」

神を殺した世界最強の魔術師が、焼けた大地のど真ん中に無傷で立っていた。

彼の立っていたのは、最初の一撃を喰らった位置。

そもそも彼は光学兵器を受けた瞬間から、一步もその場を動いていなかった。

「完全再現はできねえか。光を集めるところは上手くいったんだがなあ」

五指を開閉しながらアーサーは、「反射回数が足りねえのか？ 原理が違い？」首を傾

げながら黙々と思考に耽る。

彼のやった事は至極単純。

自身の喰らった謎の光学攻撃を解析し、それを完全再現しようとした。

しかし本当に再現できたのなら、もつと広範囲に渡って壁が消えるはずだ。こうして見る限り、破壊できたのは精々、幅四〇〇メートル分くらいしかない。

だからこれは、立派な『失敗』だ。

「はんつ、俺もまだまだ未熟で下らねえ」

最初から、光学兵器の攻撃なんて全く効いていなかった。

あの閃光を「なんか面白え事やってんな」程度にしか認識していなかった。攻撃になっていなかった。傷一つ付けられなかった。

それどころか、「面白えから真似してみるか」と思われるような有様だった。

「あ……………ンで？」

アーサーの赤く燃える悪魔の瞳が、ゴツソリ消えた外壁の方へと動く。

「どこのどいつか知ンねえが、ド派手な馬鹿もいやがる。俺を街に入れさせねえつもりか？ はっ！ そりゃ一度追い出されてンだもんなあ！ 簡単に帰れるわけがねえつてか！ つくづく失敗だ！」

しかし、これは『良い失敗』だ。

いつもの失敗とは違う……次の成長に繋がる失敗だ。

「こおも失敗ばつかじや世界最強も返上か？ 上等だコラ、最強なンギやめてやらあ。今はお前らが最強だ！」

純粹に、豪快に、心の底から大いに笑う。

「けど俺は帰るぜ！ 俺の街の、俺の家に！ 止めてえなら気合い入れろや！」

足を進める。

一度は止まったはずの進行が、再び開始される。

「さあ！ ゲームスタートだ最強共!!」

邪魔するものを全て破壊しながら。

世界最強の、地獄の帰宅が始まる。

04【魔術という文明を丸ごと呑み込んでしまいかねない程の】

男は科学者だった。

しかし魔術が台頭してからというもの、科学とは魔術学中心の『魔導科学』を指すようになり、『自然科学』は旧世代の烙印を押される事になる。

男はそれが許せなかった。

だから男は説いて回った。魔術の絡まぬ自然科学が——純粋な物理学が、自然に基づいた生物学が、ありのままの化学が、ただの数学が、素朴な地球科学が、どれほどの可能性に満ちているのかを。

その結果は、

「魔術の基礎すらできない人間に教鞭をとる事は許されていません。よつて、お前は我が校から追放処分とします」

「魔術師でもない奴の話など聞く気にもならないな」

「くだらん。『神秘の力』を操る魔術の前には、自然科学など児童にも満たん」

「いつまで旧世代の遺物にしがみついているのかね？ 時代の流れに付いて行けない人間はこれだから……」

「で？ 魔術は使えないの？」

「自然科学は所詮、魔術の踏み台だ。いつまでも執着するなど馬鹿のする事だな」

「そういう意味のない事に拘るのやめたらどうです？ 自然科学とか古すぎて誰も興味

ないんですよ」

「生き物の体の仕組みとか調べて何になるんだよ。魔術でいくらでも操れんじゃんそんなの」

「魔術があれば自然科学とかいらなくない？」

「クビだ。主のように社会の役に立たん研究ばかりをしている人間など置いておけん」

「魔術も使えん無能に費やす時間などない！ 今すぐ出ていけ！」

「目障りだ。消えたまえ」

『要塞都市カルドキアに、魔術師アーサーの住居がある』

男がそれを知ったのは、今から二週間も前の事。

普段から魔術師に一泡吹かせてやる事ばかりを考えていた彼にとって、それは願ってもみない絶好のチャンスだった。

魔術師アーサー。魔術という文明の頂点。

自然科学の力を誇示する相手として、これ以上の獲物はいない。

男はさっそくカルドキアに足を運び、さらなる情報を探ってみた。すると案の定、カルドキアの方もアーサーを持って余している事が分かった。

一度はカルドキアに受け入れたものの、その存在の大きさや、何をしでかすか分からない恐怖、そして一度何かをしでかせば神話的な被害になりかねない事に、街の住民はもちろん、カルドキアの重鎮達も頭を悩ませているようだった。

元はと言えば、カルドキアを管理する政府の連中が、自分らの都市の名を売るためにアーサーに居住の契約を持ちかけたのが発端らしかったのだが、今ではそれが重荷となつて困り果てるとは、なんと自分勝手な奴らだろうか。

そう思わなくもないが、しかし男にとってはどうでもいい事だった。

さつそく彼はカルドキアの重鎮達に、一つの話を持ち掛けた。

「魔術の頂点であるアーサーに、魔術で挑むのは無謀過ぎる。ここはどうでしょう、わたしの自然科学を用いてみては。もしもアーサーの抹殺に成功すれば、その研究結果をあなた方に献上いたしましたでしょう。仮に失敗に終わったのなら、わたしを『旧世代の遺物』と切り捨てればよろしい。どちらにせよ、あなた方には一切損のない話だ」

馬鹿を言いくるめるのは容易かった。

当たり前のように許可を得た。

壁の中に存在する壁内防衛施設の事も、この時初めて知った。

利用できるものは何でも利用する。

まずは『騎士連合』に虚偽の通告をし、アーサーを襲わせ、そこで起きた騒ぎを奴の責任にしてカルドキアから追い出すところから計画がスタートした。奴に悟られずに科学兵器を準備する時間が欲しかったのだ。

正直ここが一番難しいと思っていたが……案外、あつさりと成功した。

そして、アーサーが再びこの都市に戻って来る事も予想できていた。

奴が本当に世界を自由に渡り歩ける世界最強ならば、わざわざカルドキアに特定の住

居など置く必要はない。仮に一度はカルドキアの誘致に乗ったとしても、気紛れで火山を沸かせ、海を干上がらせ、街を更地に変えるような気分屋が、いつまでも一カ所に留まっているとは思えなかった。

これはすなわち、奴が『一定の住所に執着がある』事の証明でもあった。

カルドキアを追い出されたアーサーは、しばらくあちこちを放浪するだろう。

しかし、いつかはどこにも住めないと確信し、一度は自分を受け入れたこの街に再び戻って来るはずだ。

……別に、この予想が外れても構わなかった。作戦など他にいくらでも用意している。この作戦が失敗したところで、別の作戦に移行すれば済むだけの話だった。

が、愚かにもアーサーは、本当にノコノコと戻って来た。

その時点で、運命は決した。

「貴様がわたしの踏み台だ、猿アーサーの王」

こうして。

男が今まで培ってきた科学者人生の集大成が、今、壮絶な産声を上げた。

*
*
*

雲一つない青空。いわゆる快晴。

実は空そのものに色は無い。太陽光に含まれる複数の光のうち、青の光が大気中の微粒子によって激しく散乱された結果、人の目に空が青く染まっているように見えるだけ

だ。

言ってしまうえばそれだけの事なのに……なんて美しいのだろう。単なる物理現象が、こうも精美な色彩を再現してみせようとは。

だから自然科学に魅せられた。

この世界が初めから持っている純粋な自然の理。すなわち自然科学。

目の前に広がる青い空は、自然がもたらした奇跡なのだ。男は心の底から信じていた。

そんな青い空が、黒く染まっていく。

ただの曇天じゃない。まるで黒の絵具でキャンバスを端から端まで塗りたくるような、まさしく絵に描いたような『闇』が、氣象学的にもあり得ない速度で空を埋め尽くしていったのだ。

一体、何が起きている？

自然科学を極めた男だけは、その現象を理解できていた。

「……日食だと……？」

あり得ない。信じられない。

否定しようとしても、頭の中の知識が男の意思とは無関係に正解を導き出す。そうこうしているうちに太陽の光はどんどんと遮られ、ついには半分以上も漆黒に呑み込まれてしまった。

突如、世界に夜が訪れて、漆黒の空に白い三日月が昇る。

本物の三日月じゃない。

あれは、三日月型に抉れた太陽だ。

「馬鹿な……そんな馬鹿な！」

異常過ぎる現象に、男は思わず叫んでいた。

「日食が最後に観測されたのが五年前！ 次にこの国から観測できる日食は、計算上どれだけ早くとも三一年後になるはずだ！ そもそも昨夜に観測した月の位置から鑑みれば、こんな現象……惑星そのものが意思を持つて動いたとしか——」

そこまで叫んだ時、ようやく科学者の男の脳裏に『当たり前前の疑問』が湧いた。

……なぜ自分は、空など見上げている？

「*Yes.*」

その疑問が頭を過った瞬間、男は初めて、自分が地面に倒れている事を自覚した。

思考が止まった。

日食の原理すら理解している男は、自分が倒れている理由も解明できなかった。

何が起きた？

最後に覚えているのは確か、壁内施設から望遠器具で壁の外を確認したところまでだ。それから壁の外で、白い光が瞬いたのが見えて——見えて……。

そして？

「っ!？」

何かを思い出し、男は弾かれるように上半身を起こす。

直後、ドオオオオオオツ!! という圧力が男の全身を叩いた。

最初に目に入ったのは、津波の如く押し寄せる『人の波』だった。

男も女も子供も老人も、とにかく数え切れないほど大量の人間が、絶叫にも似た悲鳴を上げながら逃げ惑っていた。

地面の上で、上半身だけ起こして呆然とする自分。

そんな自分を避けるように、左右に割れて自分を走って通り過ぎて行く住人達。

もはや意味が分からなかった。

そして、ようやくだ。『自分はカルドキアの街の中に倒れていて、この逃げ惑う人々は「何か」から逃げようとしているカルドキアの住民達だ』と気付いた頃には、カルドキアの街の中にはポツンと一人、科学者の男だけが取り残されていた。

無音の街並みがあった。

あれだけ繁栄していたカルドキアから、人の声が、音が、気配が、消える。

……その時、科学者の男は三つ、信じられない光景を目撃した。

一つ目。カルドキアを覆う外壁の正面が、綺麗に消滅していた。

直径四〇〇メートルが半月状に抉れている。……ちようど男が部下達と共に『天の梯子』を設置した範囲を真つすぐ狙ったかのように。

二つ目。消えた外壁の断面が、オレンジ色に赤熱していた。

あれは紛れもなく、自分が造った『天の梯子』の破壊痕だ。しかしそんなわけがない。あの兵器を、自分以外の誰かが作れるはずがない。

そして、三つ目を見た瞬間、

「……………」
男は言葉を失った。

消滅してしまったカルドキアの外壁。その向こう側から、ゆっくりと近付いて来る『誰か』の姿があった。

……日食は、太陽をほぼ完全に覆い隠した状態のまま静止していた。

闇一色の世界。

にも拘わらず『ソイツ』は、闇の中でも鮮明に浮き出ていた。

まるで世界の全てを包み込まんばかりに、大きく左右に開かれた両腕。

まるで世界の全てを視線だけで焼き尽くさんばかりに、赤く燃える両眼。

まるで世界の全てを食い尽くさんばかりに、耳すら引き裂くほど巨大な笑み。

まるで世界の全てを叩き伏せんばかりに立ちはだかる、一人の『少年』が。

「……………うそだ……………」

結局、男は最後まで、この異常な日食の原因に気付く事ができなかつた。

まさか、天体規模の魔術でも存在するということのか？

いや違う。これはただの自然現象だ。

しかし、一体誰が肯定できただろう。

全力を出しつつあるアーサーの『存在力』だけで自然の摂理が一斉に狂い、結果として周囲の天体の軌道がメチャクチャに乱れ、異常な日食が起きてしまった……………なんて。

「ああ」

遠くから。

世界最強の魔術師の、小さな声が。

「俺の街だ」

聞こえた瞬間だった。

ドツ!!! と、男の顔から滝のような汗が溢れ出した。

!!!
——— なんて生きている？ なぜ無傷で立っている？

——— 『天の梯子』が直撃しておいて、なぜ笑っていられる!?

危うく現実逃避したくなるが、男の頭脳がそれを許さない。科学を極めるほどに鍛え上げた自らの計算力と理解力は、非情な現実を自分自身に突き付けていた。

己の集大成『天の梯子』が、微塵も届かなかった事。

挙句、アーサーにあっさりその技術を奪われたどころか、返す刀で自分も光学攻撃を浴びた事。

そしてもう一つ、こうして自分が地面に倒れている理由。

模倣とはいえ、『天の梯子』に匹敵する光を浴びたのならば、こうして生きているのは

まずおかしい。カルドキアの外壁を焼き尽くすほどの威力だ。壁の内部にいた人間など一瞬で蒸発してしまうはずなのに。

手加減された？ いや違う。壁を蒸発させておいて手加減もクソも無い。

だから――

「わたしを……わたし『達』を……」

自分だけを生かす理由はない。おそらくは部下達も同様に……いやそれだけじゃない。『天の梯子』を製造した男本人だからこそ分かる。あの外壁を消滅させ得る威力なら本来、カルドキアの街の中まで焼き尽くされているはずだ。

しかし見渡す限りにおいて、カルドキアの街並みに被害が及んだ形跡は無い。

だから。

まさか。

「守ったと言うのか!? 自分の攻撃から! この街全てを!」

死なせないように。殺してしまわぬように。

まるで小さい虫を間違って踏み潰してしまわぬよう虫籠の中に放り込んで、甲斐甲斐しく世話をするような感覚で。

……これは、科学者の男の知る由もない事だが。

かつてアーサーは、大勢の人間を殺してしまった際、こう誓っていた。

『やっぱ人を殺しちゃうのあ良くねえよ、弱い者いじめみてえで最悪な気分になる。今日学んだ。おし、これからは二度と人は殺さねえ。神に誓ってもいいぜ?』

アーサーからすれば、自分が自分に課した約束を、忘れず決行したに過ぎない。

ただ、生かされた側からしてみれば。

特に、魔術に対する憎悪を燃やす男からしてみれば。

「……魔術師が……」

のそり、と。

男は呟きながら起き上がる。

「どこまでもそうやって、わたしを、科学を、侮辱する……!」

さつきまで地面に転がっていた男が。

本当ならとつくに殺されているはずの男が。

これだけ圧倒的な力を見せつけられて、なお。

「ふいけるな……」

怨嗟、怨恨、怨念。

あるいはそれは、魔術という文明を丸ごと呑み込んでしまいかねない程の。

05【ターンエンド】

天も地も叩き割るような絶叫が迸る。

直後だった。

光があった。

太陽の光じゃない。この時間、本来なら地上を照らしているはずの巨大恒星は今、異常な日食によって遮られている。

だからこれは、『人工的な光』だった。

ガカアツ!!!! と。破壊から免れたカルドキアの外壁から、数十もの『照明装置』が一斉に飛び出し、爆発的な光を放出したのだ。

むしろ日中よりも眩い光が、カルドキアを埋め尽くした。

もちろん自然現象じゃない。科学者の男が魔術協会にも秘密にしていた『科学兵器』による現象だった。

地殻兵器『地獄の窯』。

街全体の地中深くに埋め込んだ微小なナノマシン。それを超音波を利用して活発化させ、地殻からマントルまでの活動を強引に操作し、人為的に地殻変動を引き起こす。

神秘の力を振るう魔術とは対極に位置する自然科学——その真骨頂。

たとえこの世界が魔術ではなく自然科学を信仰していたとしても、到達するまでに何百年かかるか分からない領域。

そんな大都市規模の猛威を、たった一人の少年に向けて。

「奈落に落ちて悔い改めろオオ!!」

轟音と共に引き裂かれた大地は、一瞬のうちにアーサーの足元を左右にかつ開いた。

地面が消失する。

代わりに、地底深くまで続く漆黒の奈落が現れた。

だから少年は真つ逆さま、一直線に落ち

「はんっ!!」

直後だった。

「甘えぞお前!!」

ドン!!!!!! という爆音が炸裂した。

アーサーが思い切り『足元』を蹴った音響だ。

しかし地面はとつくに割れている。あるのは底無しの奈落だけ。蹴れるような『足元』など存在しないはずだ。……と思う事すら早計なのだ。

そこには確かにある。
空気が。

「俺の足は道が無くても突き進むぜ!!」

目に見えず、触れられず、人間の知覚では存在すら感じ取れない空気。

しかし空気だって物質の集合体だ。抵抗もあるし、摩擦もある。ただ、だからって。

当然のように空気を蹴ってそのまま突っ走って来るなんて、誰が想像できた？

恐るべき突撃があった。

万有引力を無視し、アーサーは驚異的な速度で宙を駆け抜ける。自分を邪魔する科学

者の男を、直接その手で粉碎するため。

そんな世界最強を目の当たりにして、

「自然を、科学を……」

科学者の男は怯みもなかった。

「この期に及んで侮辱するか!! 化物が!!」

何かの号令を下すように、勢い良く右手を振り上げる。

それが合図だった。

ズツツツウン……ツツツツ と、要塞都市カルドキアが潰れた。

!!!!!!

科学者の男を中心に、半径約二〇〇〇メートル圏内にある街並みが一瞬にして地面の染みと化し、そのまま地上が一〇メートルほど沈む。

重力兵器『神の雷』。

遙か上空に、自律飛行する六八機もの金属の円盤があった。それから放たれる人工重力が、通常の重力の約一〇〇倍というあり得ない圧力を地上に叩き込んだのだ。

轟音と共に、大地が上下にズレる。

押し込まれた地上の体積が周囲に溢れ、さらに広範囲の地面が地殻ごと持ち上がっ

た。

それほどの破壊力が、少年一人を地割れの底に叩き落すためだけに放たれる。しかし。

なのに。

「ふんっつっ!!」

少年は両手を左右に広げ、何かを掴むような動作をする。

瞬間、圧倒的な重力に叩き落とされるはずの少年の体は、ガグンツ!! とその場に固定されて動かなくなる。

何を掴んだ?

空気? いや、この重力の中では空気すらも押し潰されている。

では、まさか——

「あり得ん……」

この時ほど、男は呪った事がないだろう。

目の前で起きている不可思議な現象を、一瞬で理解できてしまう己の頭脳を。

「あり得て堪るか、そんな事……空間を掴むなどツツツ!!」

「見た事をそのまんま信じろ」

アーサーの声が真つすぐ届いた。

こんな、声すら歪むような超重力の世界の中で。

「両手の指を丁度良く、良い感じに、思った通りの握力で、最適な掴み方すりゃあ、空間なんて簡単に掴めンだろ」

ぐぐぐぐぐぐぐぐ……と。空中に固定された少年の体が、柔らかくしなる。まるで、今にも矢を解き放とうとしている弓のように。

「あり得ねえとか、信じられねえとか、つまんねえ戯言吐くなや。退屈すンぞ」
アーサーの瞳が凶悪に光る。燃え盛る灼熱の如く、赤く染まったその両眼が。狙いはもちろん真つすぐ正面。

自分を邪魔する科学者の男。

「そんな調子じゃお前、」

快活に笑って、豪快に笑って、顔を真つ二つに裂くように笑って、

「トンだ期待外れだ!!」

漲る力が、炸裂する。

一〇〇倍の重力などお構いなしに、アーサーという弾丸が突っ込んで来る。

その瞬間だった。

「ぬかすな猿が」

それまでの様子からは想像もできないほど低く落ち着いた声だが、男の口からこぼれた。

しかし、そこに含まれる悪意は今まで以上に膨大だった。

声の直後だった。男は静かに右手を上げて……それを勢い良く振り下ろす。

簡単な合図だった。

世界が揺れた。

重力が、一〇〇〇〇倍に膨れ上がる。

『神の雷』——最大出力。

強大過ぎる重力は、ブラックホールを生み出す危険性を孕む。そうなってしまえば行き着く果ては惑星そのものの崩壊だ。だからむやみに出力を引き上げようとはしなかった。

けど、もうどうでもいい。

魔術がどうした。惑星がどうした。世界がどうした。

科学を侮辱するこの化物を殺せるなら、森羅万象全てを破壊しても構わない。

た。

体幹が揺さ振られるような激震と共に、引き裂かれた大地が再び動き出した。より大きく亀裂を開くためじゃない。

逆に、閉じるために。

ズズウウウウウン!!! という激震が終わりの合図だった。空気を足場にしようが、空間を掴もうが、こうなってしまうのと同じように。

パタンと本を閉じてしまうのと同じように。

割れた大地が、完璧に閉じた。

「……こんなものだ、偽りの神秘を極めた者の末路など」

荒れ果てた大地の上。指先一つで地形を変えた科学者の男は、今なお冷めやまぬ憎悪を燃え滾らせながら低く呟く。

こうしている間も周囲では、地殻変動の影響で巨大地震が多発していた。

地盤がズレる衝撃。地上を上下左右に揺さ振る激震。何かが崩れていく轟音。

……栄華を極めたはずの大都市は、見る影もなくなっていた。

「苦しめ。苦しんで死ぬ。わたしが味わった絶望も、苦痛も、嘆きも全て！ 闇の中でゆっくり味わってそして死ぬ！ これがわたしだ!! 自然科学の力だ!! 下らん神秘なぞに縋りついた己の身を恥じるがいい!! 後悔と懺悔の念に押し潰されるゴミ虫が

!!

男は地面に向かって吼える。

もはや自分が撒き散らした被害など意識にも入らなかつた。

胸の中に渦巻く憎悪を、吐き出す事しか意識にない。

「壊してやる!! 貴様ら魔術師が積み上げたもの、一つ残らず何もかも!!」

別にどうなつてもいい。こんな街も、こんな世界も、そこに住まう人間共も。魔術を信仰するこの世など、消えてなくなつてしまえばいい。

——復讐は、ここからようやく始まるのだ。

燃え上がるような決意を胸に、科学者の男は荒れた街の方へと視線を向ける。

と、その時だつた。

ぐらり……と足元が揺れ、危うく転びそうになる。

やはり無理に大地を操つた影響は大きかつたか。

地殻兵器、ともすれば光や重力の操作以上に慎重さが求められる技術かもしれない。

……そう考えた男だつたが、

「……………? なんだ……………」

遅れて気付いた。いや、科学者の男だからこそ気付けた。

これは単なる揺れじゃない。

「……まさか……」

呆然と呟いて、足元を見る。

ただの地殻変動とは全く異なる振動パターンを、男は全身で察知していた。

その揺れには、『明確な意思』が感じられた。

「まさか……そんな馬鹿な?!」

真に絶望する事になるのは。

果たして、どちらか。

直後に、ゴツ!!!!!! と。

要塞都市カルドキアの大地全体が、真上に射出された。

最初、男は地面に叩き付けられた事にも自覚が無かった。

凄まじい重力が降って来たように錯覚したが、実際は違う。逆だ。自分の立っていた

日食が終わる。

白い光は徐々に量を増やし、月の隙間から漏れ出して地上へ降り注ぐ。今まで止まっていた時間が動き出したみたいに、世界から暗闇が消えていく。

要塞都市カルドキアが、雲の上に浮かんでいた。

呆然とする他なかった。想像を絶する光景を叩き付けられた男は、立ち上がる事も忘れて雲の彼方をぼんやり眺めていた。

理解できないというよりも、理解する事を心が拒絶していた。

こんなにも、母なる太陽に近付けたというのに。

一切の喜びが無い。

「これで終わりか!! あぁん!?!」

いきなり声が飛んだ。

と思つた次の瞬間、ボゴアツ!! と目の前の地面がいきなり下から爆発した。まるで花でも咲いたみたいに吹き散らされる地中から、一人の少年が現れた。

アーサー。

赤い瞳を燃え上がらせる、世界最強の魔術師。

「んんんんんんんんんんんふふふふふははははははははははははあああああ!!」
 いいいいいいいいいぜ!! 効いたあああああああああああああああ!!」

甘ったるくて激しい恍惚があつた。

両手で髪を掻き耒り、肉汁のような涎を垂らし、少年は快感に打ち震えるみたく天高くに向かつて叫ぶ。

「今のあ最高だ!! 俺好みじゃねえか!! 空にぶっ飛ばさた事あ何度もあるが地面に埋められたのは初めてだ!!」
 「そそるねえ!! 初めてつてのは何でもワクワクしちまうよ!!」

当たり前のようは無傷。

それどころか、着ている衣服に汚れ一つ付いていない。

「な……なん……」

「どうした。笑え」

あれだけの破壊と猛攻を、その身に受けておいて。

これだけあり得ない現象を、引き起こしておいて。

「見てみる、いい景色だろ? 俺からお前へ、ささやかなプレゼントだ。……ああ、やつ

「ぱ世界つてのは地べたに這いつくばって見るよりも、上から見渡した方が何千倍も面白い」

自分を殺そうとした男を前にして、それでも少年は堂々と笑う。
瞳を輝かせ。

太陽の光すらも霞んでしまうほどの存在感で。

「もっかい訊く。——これで終わりか？」

その赤い瞳を間近で向けられて。

科学者の男は初めて、真面な恐怖が湧いた。

「ンだよ、ターンエンドならさっさとそう言えや。宣言つてのは大事だぜ？ 宣言。」

カツコつケンならもってこいだろおが」

ふわり……と。

男の体はその瞬間、重力の知覚を忘れた。

地盤ごと天空に持ち上げられた要塞都市カルドキア。しかし万有引力は常に働く。

物体が惑星の至近にある限り、何者もそれからは逃れられない。

「それじゃあゲームを続けようぜ、最強」

アーサーの『宣言』と同時だった。

「次は俺のターンだ」

落下が、始まる。

06【この世で最も恐ろしい攻撃】

——この世で最も恐ろしい攻撃とは何か。

手数が膨大な攻撃？ 威力が絶大な攻撃？ 距離が長大な攻撃？ 範囲が広大な攻撃？

剣のように鋭い攻撃？ 大砲のように目にも留まらぬ速度でやって来る攻撃？ 拳法のように人の意思が絡んだ複雑な攻撃？

しかし、言われて分かる程度の『恐ろしい攻撃』というのは、実はそれほど怖くはない。どこが恐ろしいのが判明しているからだ。

攻撃の『長所』が判明しているなら、その『長所』に対する適切な策を講じればいい。ゆえに、規模や特徴が割れている攻撃はそれほど脅威ではない。対策できるのでから。

——では、この世で最も恐ろしい攻撃とは何か。

手数でも、威力でも、距離でも、範囲でも、鋭さでも、速度でも、複雑性でもなく、何

も対策できない攻撃とは、一体どんな攻撃なのか。

その答えは、

「次は俺のターンだ」

案外、すぐにやって来た。

次の瞬間、『何か』が起きた。

上空一万メートルに浮かぶカルドキアが、三分の二ほど綺麗に消し飛んだ。

ドツ!!!!!! という壁のような厚みを持った衝撃波が炸裂していた。

それは爆心地を中心に全方位へ強烈極まる爆風を撒き散らし、空に連なる白い雲を遥か遠くまで真つ二つに引き裂いていく。

本当に『何か』だった。

正体不明の攻撃だった。

説明できない現象が起こり、地盤ごと上空に浮かんでいたカルドキアがあつという間に崩壊していく。バラバラになった大地が地上へ降り注ぐ。

その謎めいた攻撃が炸裂した直後、科学者の男はどうする事もできなかった。

防御も対処もできず、衝撃波に呆気なく薙ぎ払われるしかなかった。

「ぐ!? おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああああ
あああ
あああああああ!?!」

男は凄まじい突風に吹き飛ばされ、そのまま高度一万メートルの世界に放り出されて
いた。

視界がグチャグチャに回る。平衡感覚が消失する。

手足が千切れ飛ぶ勢いで縦に横に体を回転させながら、気付けば男は突風吹き荒ぶ大
空を自由落下していた。

足の裏が地面と接していないという『未経験』が、男の心を恐怖で蝕んでいく。

「ぬううううううううう!! くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!」

全力で叫んでその恐怖を誤魔化した。

凄まじい速度で落下しながらも、男はバツ! と右手を真横に振るう。

ザアアアアアア!! と、鳥の群集のような影が雲の下からやって来た。

重力兵器『神の雷』。超常的な重力を引き起こす科学兵器——その『機体』。

六八個の自律飛行する金属の円盤が、男の指示を受け、隊列を成して飛んで来た。円盤の群れは落下する男の体をグルリと取り囲むと、その空間にだけ『限定的な重力場』を形成する。

男の落下速度が徐々に低下していき、最終的に時速一〇キロ……人間が走る程度の速度にまで安定してくる。

墜落の恐怖からなんとか免れ、ようやく真面な思考が保てる状況になつて。

科学者の男は、

(な……)

やっと当たり前の思考を始める。

(何が、起きた……)

まるで分からなかった。

男の頭脳は間違いなく『天才』の域に達している。この世界の、この時代において、数百年どころか千年近く先を行く科学力を実現させている事からも明らかだ。

そんな頭脳をもつてしても、アーサーが起こした現象を解析できなかつた。

(何をした! …どんな魔術を用いた!?)

これまで、あらゆる魔術の教本を読み漁ってきた。

恥を忍んで、吐き気を抑えてでも、憎き魔術を学び尽くした。

魔術を心得るためではない。その『弱点』を知るために。

(全て把握している！ 魔術の基礎も仕組みも！ 全てわたしの頭にある!!)

アーサーだって所詮は魔術師だ。たとえ達人の領域に達していようが、その攻撃が魔術に基づくものなら、魔術の知識から攻撃の正体を逆算できないはずがない。

正体が分かれば弱点が分かる。弱点が分かれば対策ができる。

だというのに。

(何も、分からんだと……!?)

天才である男は知らない。もしも常人が同じ状況に立たされていたら、そもそも「何も分からない」という事実ですら気付かなかったであろう事を。

それに気付けたというだけでも、男の頭脳はある種の極致に達している。

そんな男が、

「っ!?!」

『重大な事実』に遅れて気付いた。

男は即座に思考する事をやめ、周囲の光景を慌てて見渡す。

……アーサーの姿が見えない。

(なん……!?!? 奴はどこだ!!)

失念していた。自分の身を守る事に精一杯で、肝心の敵の姿を視界から外してしまっていた。

それが間違いだった。

一瞬たりとも奴から意識を逸らすべきではなかったのだ。

ポン、と男の肩を何かが叩いた。

何も考えず、男は叩かれた肩の方を急いで振り向く。

そこに、

「やつほー」

アーサーが、一〇センチ隣で笑っていた。

思考に空白が生じた。

直後に全てを悟った。

「うおおおおあああああああああああああああああああああああああああああああ

「ぼっ……あが……っ？」

視界が点滅する。意識が乱れる。

そんな状況でも、頭だけでは分析を行っていた。

(物理的な衝撃波!?! 空気の流れすら観測できなかったというのに!?!)

隕石のような速度で落下しながらも、彼は考える事をやめなかった。

(魔術とは、次元の異なる別世界から『神秘の力』を強引に抽出し、そのエネルギーでもってあらゆる現象を起こす技術だ! エネルギーがある以上そこには物理的な何かがある! あるはずなのに……なんだ!?! 分からん! 分からねば!!)

そこまで考えて、男は右手を振るい、再び重力兵器を己の周囲に呼び戻す。

鳥の群れ、もしくは蜂の群れを想起させる動きで六八の円盤が降下して来る。そしてグルリと男を取り囲んで、その空間の重力だけを最適化する。

「はあ、はあ……げぼっ……く、そオ……!!」

血を拭い、息を吐き、科学者の男は絞り出すように声を上げた。

咄嗟に頭上を見上げた。

遙か上空に、アーサーの姿があった。

そして、奴の視線が未だに自分をロックオンしている事に気付いた。

「つつつ!？」

男は咄嗟に右手を振るっていた。奴の攻撃を回避しようとしたのだ。

しかし無意味だった。

音も無く『何か』が炸裂した。

認識できない『何か』は、距離を無視して男の体に直接叩き込まれる。脳が揺さ振られるような衝撃と共に、男の体は再び限定的な重力場から弾き出された。

恐怖と混乱が先にあつた。

それから数秒後、ようやく真面な痛覚が機能した。

「ぼばああ!？」

胸の奥からせり上がる血を吐き出して、男は荒い呼吸を繰り返す。「ぜひゅーぜひゅー」と、明らかに肺の調子がおかしい呼吸音だと自己診断する。

それでも科学者の男はギロリと目を剥いた。

体を強引に捻じって頭上を見上げる。

(分析は後だ！ 奴が何を操っているかが今はどうでもいい!!)

回避は何の意味もない。そう察した男は、正確に右手を振り上げる。

六八個の円盤は、男の目の前に壁のように並ぶ。そのままアーサーに向けて、重力の

奔流を放出する。

ドツ!!! と空間が圧搾された。

どんな攻撃も通さない『重力の壁』を構築した。

回避が無理なら防御する。……当然の思考だ。

そんなもの関係なかった。

重力の壁をぶち抜いて、得体の知れない『何か』が男の体に叩き込まれた。

今度こそ、男の全身から力が抜けた。

説明のできない『何か』は、肉体の表面から芯まで均等に染み渡る。

「う……………ぐっ!!」

襲い掛かる激痛を。

押し寄せる恐怖を。

「がああああああああああああああああああああああああああああああああああ

!!」

叫ぶ事で追い払おうとした。

しかし頭の中は絶望で埋め尽くされていた。

回避できない。防御もできない。そんな攻撃に対して、どうする事もできない。

男はまたもや重力兵器を操作し、自分の周りに侍らせる。

今度は空中に留まるためじゃない。

……奴の視界から逃れるために。

ボツ!!! という衝撃波が放たれる。

科学者の男が音速の五倍で空中を駆け抜けるソニックブームだ。周囲の円盤から発生する人工重力の向きを調節しながら、男は上空を突っ切る音速の星と化する。

そうやって、超高速で飛行しながら、

「クソオオオ

オオオ

オオオオオオオオ!!」

いつそ泣き喚きたいほどの叫びがあつた。

（逃がっている……!）

その事実が、

（このわたしが、魔術師を相手に！ 尻尾を巻いて逃げているだも!）

何より彼の心を食い荒らす。

しかし攻撃の正体分からない。分からないなら分析するしかないが、分析している

間にも次の攻撃がやって来る。ただでさえ威力が絶大だ。何度も直撃したら死んでしまう。

今とはとにかく、奴の射程内から逃れるのだ。

少なくともアーサーの視界に捉えられているうちは、いつでもどこからでも攻撃がやって来る。

そして、やって来たら防げない。

(あれは！　あれは何なのだ！　一体何の魔術だ!?)
思考する。

魔術の知識を一つ残らず引きずり出す。

(自然現象を操る『魔法』、文明社会に漂う負のエネルギーを用いる『呪術』、原子配列を変化させる『錬金術』、純粋な魔力を放つ『聖導魔法』、魔力を物理的な形にして身に纏う『魔装術』……あらゆる魔術を見てきたが、起こる現象には必ず『過程』がある！)

魔力の練成、魔法式の構築、霊装や素材の準備、エネルギー変換による熱や光の発生！
知識と知恵を最大限に振り絞り、あり得る可能性をひたすら模索する。

起きた現象から、思考し、想像し、仮説を立て、理論を組み上げ実証する。

自然科学を扱う上での大前提。

なのに。

（だが奴の魔術からは何も観測できない！ 正体不明どころじゃない！ 奴の魔術は根本的な『魔術の法則』にすら当てはまっていない!!）

攻撃が当たったという『結果』だけを与えるような現象が、そもそも魔術という技術体系と合致しない。

じゃあなんだ？ 奴は何を操っている？

先程から自分が受けている攻撃はなんだ？

分からない。何も分からない。

その時だった。

突然、男の体が背中側にくの字に折れ曲がった。

「お」

もう真面な声すら出なかった。

音速の五倍という速度で逃げていたはずの男に、またしても『何か』が叩き付けられた。実際には『叩き付けられた』という分かりやすい現象だったのかさえ不明だった。

まるで駄々をこねる子供が手足を振り回すような幼稚な暴挙。ただ、振るわれる猛威は地獄に等しい。

それ一つで都市を真つ平にする数百倍の重力が、あらゆる角度からアーサーに殺到する。真正面から、真横から、真上から、真下から、全方位から。

その押し迫る重力を。

アーサーは、簡単に振り払いながら一直線に突っ込んで来る。

ゴンツツツ!!!!!! と。

真正面から来る五〇〇倍の重力を、右手の裏拳で空間ごと吹き飛ばす。

ギユオツツツ!!!!!! と。

真横から来る七〇〇倍の重力を、左手で空間を捻じ曲げて回避する。

ドンツツツ!!!!!! と。

真上から潰しに来る一〇〇〇倍の重力を、空間を踏みしめる事で耐える。

ダンツツツ!!!!!! と。

全方位から迫る二〇〇〇倍の重力を、一気に宙を駆け抜けてやり過ごす。

そして、

——この世で最も恐ろしい攻撃とは何か。

思えば最初から理解不能だった。

地面のない空中を、空気を蹴って駆け抜けるというのなら、まだ魔術として理解がで
きる。

だが……空間を掴む？ 都市そのものを上空に持ち上げる？

一体何を極めればそんな事ができるんだ。

「はあ、また失敗だ。自宅まで消し飛ばしてどおすんだよ。……ま、今さらどうでもいい
が」

声が近付いて来る。

「おーい、何してんだお前。燃え尽きたか？ ン？」

それがアーサーの声である事は、科学者の男もすっかり分かっていた。

「いいねえ。心も体も燃える尽きるほど楽しむつてのあ、何にも増して素晴らしい事だ。俺も温まっちゃまった、久しぶりに」

その世間話をするような声音が、恐怖を上乗せしていた。

どうしてそんなに気楽にいられるのだ。

あの地獄にも等しい猛威の中を、潜り抜けておいて。

「ゴッしばらくのうちじやあ最高に楽しかったぜ。らしくもなくハシヤいじまったよ。どおしてくれんだお前、ああん？」

そうして彼は立ち止まる。

「さ、俺はターンエンドだぜ？」

立ち止まって、見下ろす。

地面に倒れる『それ』を。

「で？ ——もう終わりか？」

地面に倒れた血まみれの男を見下ろして、アーサーは顔を真っ二つに裂くように笑っ

ていた。

この世で最も恐ろしい攻撃とは。

詳しい手数も、正確な威力も、具体的な距離も、目に見える範囲も分からない。

剣のように鋭いのか、大砲のように速いのか、拳法のように複雑なのかどうかさえ分からない。

一切の説明もできず、何一つ理論を組み立てられないような。

何も分からない、『正体不明の攻撃』。

07 【空の色】

「ね、どうして空って青いのかな？」

あれは、誰の言葉だったか。

鉄のような味が口の中を埋め尽くしていた。

別に鉄が口の中にあるわけではない。血中のヘモグロビンを構成するタンパク質の一つに鉄分が含まれているという、ただそれだけの単純な話。

……理屈では分かっているけど、その味に生理的な吐き気が収まらない。

「お、ぼ……っ」

仰向けに倒れたまま、男はせり上がって来る血液を吐き出していく。

このままじゃ血の塊が気道を塞いで窒息してしまうかもしれない。せめて体を横にしなれば。

……頭では理解しているのに、体が全く言う事を聞かなかった。

「げほっ……げほっ……」

理論が、理屈が、理想が、一切通用しない。

正体不明の攻撃が、理解不能の現象が、己の全てを否定していく。

——何年かけたと思っている。

これだけの技術を開発するのに、これだけの準備を整えるのに、一体どれだけの時間と労力と信念を注ぎ込んだと思っている。

それをあろう事か、こんなにもあつさりど。

「ぐっ……！」

必死に体を動かそうとしても、全身に力が入らない。何度も地面に手をつくが、背中が地面から離れない。立てない。起き上がれない。何もできない。

もはやそこにいたのは、偉大な科学者でも、魔術の敵でもなかった。ただ好き放題に痛めつけられ、血を流してうずくまっているだけの憐れな老人だった。

そんな奴に向かつて、

「お」

全身血まみれで、立ち上がる事もままならない相手に向かつて、

「立て、やつと燃えてきたんだろおが。こんなところで終わるとか、マジで気分下がンぞお前」

——— どうしてそんな事が言えるんだ。

仰向けになって倒れる男を、上から覗き込むように一つの顔が現れた。

魔術師アーサー。

神を殺した世界最強の少年が、血まみれの男を見下ろしていた。

彼は、笑っていた。

心から楽しそうに。

「おら起きろ。おーい」

彼はしやがんで、倒れる男の頬のペチペチ叩く。

しかし科学者の男の反応は芳しくない。アーサーの姿が見えているのかいないのか、目蓋をピクピク痙攣させながら息を荒げるだけだった。

その様子を見て。

すっかりと、相手がどんな状況か見ておいて。

「まだだろ、なに寝てんだ、遊ンでンのか？」

そんなもの関係ないとばかりに言葉を叩き付ける。

「まだあんだろ。太陽ぶつけて、地面割って、次はどうする。ん？ 海にぶち込むか？ マグマに叩き込むか？ 魔獣の群れに放り投げてみるか？」

頭がおかしいのか？ 狂っているのか？

相手が今どんな状況なのか、認識できていないのか？

あるいは、認識してなお「その程度なんて事ない」と本気で思っているのか。

「もっかい地面の中に埋まるのも悪くねえが……何度もやると飽きるしなー。いつそ凍らせてみるとか？ ……ピンと来ねえなー。重力はもう飽きたな」

アーサーは、しばし唸って考えて、

「あ、重力。そうだ、次は無重力がいいな。それはまだ味わった事ねえ。おし、それでいこう。無重力。できるだろ？ やってみろよ。やれ」

最初から、相手の返事など待っていない。

自分だけで物事を完結させて、それを相手に強要する。相手が拒絶する可能性すら考慮しない。たとえ拒絶しても、力づくで実現させる。それだけの實力を持っている。

何者からも影響を受けず。

逆に自分は、自分以外の全てを思い通りに突き動かす。

徹底的な『個の力』——その極致。

「立てよ。なに苦しんでんだ。笑え、喜べ、楽しめ。そして笑わせろ、喜ばせろ、楽しま

せろ。それができねえってんならお前……とんだ期待外れだ」

「……………つつつ!!」

——ふざけるなア!!!!!!

——何が期待外れだ猿如きが!!!!!!

本当なら感情が爆発するままに叫びたいくらいなのに、無理やり声を出そうとする
と、血の塊が喉に詰まって言葉が出ない。

心の中は、こんなに暴れているのに。

この世を焼き尽くさんばかりに燃えているというのに。

体も、口も、喉も……動かない。

「……………」
そんな男を、アーサーはぼんやりと見下ろしていた。

あれだけ楽しそうに笑っていた表情は、いつの間にかすっきり無表情だった。面白そ
うでも悲しそうでもなく、なんとなく暇潰しにアリの行列でも見ているような表情で。

そういう表情で、男を見て。

倒れる科学者の男から、自分の望む反応が返って来ない事を知って。

「……………はああああああ……………」

アーサーは、ため息を吐いて立ち上がった。

あれだけ昂っていた感情はどこへ行ったのか、アーサーは呆気なく科学者の男に背を向けた。

見逃すとか、そつとしておくとか、そういう動きではない。

これは……相手への興味を失った動き。

「……ンだそれ、俺だけかよ盛り上がりつつのは。……下ンね。下ンねえし……カッコ悪い」

言いながら、アーサーは歩き出す。

つまらなそうに吐き捨てられる独り言が、どんどん遠くへ離れていく。

世界最強が、その場から立ち去っていく。

「ぐっ……！」

血を吐いてでも、

「く………そ、があ………ッ!!」

科学者の男は体を動かそうとした。

そこにあるのはただの意地だった。心も体も動かせなくなつてなお、男は自分の負けを認める事ができなかつた。

負けた事実を受け入れてしまえば、己の中の決定的な『何か』が終わる。そういう確信がある。

具体性も何も無い、不明瞭極まる感情のはずなのに、論理の追求を主とする科学者の男は、なぜかその『何か』を無視できなかつた。

消えてしまう。

自分の中で大事にしていた『何か』が。

だから男は全力で目を開ける。うっすらしか開かない目蓋の隙間から、去っていく少年の背中を睨み付ける。

つまらなそうな声が聞こえる。

「何やってんだー俺。まーた成功できねえでやんの」

自分から離れていくその化物に、何か言うつもりだったのか——科学者の男は無意識に唇を震わせていた。

あれだけ馬鹿にしていた魔術師が、その頂点が、自分に背を向けている。

その事実が何より気に食わない。

恨み言でも、怨嗟の言葉でもいい。とにかく体が動かない代わりに、何かを叫んでい

ないと気が済まなかった。

だから、血でいっぱいのを、大きく開きかけて。
次の瞬間。

「はあーあ……今日も『失敗』だ」

アーサーのその言葉を聞いた瞬間。
男の中の『何か』が、唐突に沸騰した。

ザリ、と。

「お？」

地面を擦るような音。

アーサーもそれに気付いたようだった。彼はさっさと立ち去るつもりだった足を止め、興味を吹き返したみたいに振り向く。

見れば科学者の男が、懸命に、生まれたての子鹿のような危うい動きで立ち上がろうとしているところだった。

しかし、やはり体が言う事を聞かないらしい。立ち上がろうとしてもすぐに膝を折ってしまう。

でも、倒れる事だけはしなかった。

「ふうっ……ふう……!!」

ほとんど膝立ちの状態だが、別に倒れてさえないなければそれでよかった。

自分がこれまで築き上げてきたものを『失敗』の一言で片づけるあの化物を前にして、倒れる事だけは自分自身が許さなかった。

息も絶え絶えになりながら、男はボロボロの白衣の懐に手を伸ばす。

衣服の中から、黒一色のキューブを取り出す。

地殻兵器『地獄の窯』。

大地を割り、一度はアーサーを奈落の底に叩き落した地殻変動誘発兵器。
だが。

「……くそ……くそ……っ!!」

スイッチを何回押しても、うんともすんとも言わなかった。

カチカチカチカチと、スイッチを押す虚しい音だけが響く。

大地は、一ミリも動かない。

「くそー!!」

思わず叫んだ。その勢いのままスイッチを放り捨てた。

地殻兵器を諦めた科学者の男は、体から血を撒き散らしながら、バツ！ と右腕を振り上げた。

重力兵器『神の雷』。

その起動を指示する合図。

しかし、やはり何も起こらない。アーサーの頭上から重力の鉄槌が降って来る事も、男の周囲に金属の円盤が飛んで来る事もなかった。

代わりに、バキンッ!! という硬い音が、遙か上空で鳴り響いた。

しばらくして、小さい物体が次々と空から降って来る。

毒ガスでも吸い込んだ羽虫のように、その物体はボトボトと地面の上に落ちて、バラバラに砕けて転がって行く。

男の周りに残骸となって散らばる、六八個の金属塊。

……壊れた重力兵器の機体だった。

「つつつ!!」

頭に血が昇り過ぎて、今度は頭頂部から血が噴き出すんじゃないかと思った。

男は落ちて来た機体に見向きもせず、即座に衣服のポケットに手を突っ込んで、中から掌サイズの『紫の球体』を取り出した。

まだ見ぬ最先端。

究極に達した科学技術から、破壊的な側面だけを抽出した悪魔の代物。

化学兵器『最後の晚餐』。

男はそれを、無造作にアーサーへ投げつけた。

少年の足元に転がった『紫の球体』は次の瞬間、バフンツと爆発させ、辺り一面を『紫の霧』で覆い尽くしていく。!!!!!! と恐ろしい勢いで体積

簡潔に言えば『毒』。

それも、魔術師のみに絶大な効果を発揮する神経毒。

魔術師は魔術を扱う際、自分の体内に構築した『魔力回路』に魔力を通す事であらゆる現象を引き起こす。この毒物は『魔力回路』だけをスタスタに引き裂き、魔力の暴走を誘発させ、毒を吸い込んだ魔術師をピンポイントで殺害する。

毒の調合過程が極めて難しく、今日の作戦までにこの一個しか作れなかった。そのせいで実用実験も行っておらず、効果があるかどうかはまだ確かめていない。だが、もはや勿体ぶっている場合ではなかった。

いくら世界最強と言えど、アーサーとて一人の魔術師。

そして、相手が魔術師なら確実に殺せる毒物の猛威が、静かに盛大に放たれた。

勝負の結果なんて、最初から分かり切っていた。

直後に『何か』が起きた。

空気中に蔓延する毒の煙もろとも、周囲の空間が直径二ミリ程度の小さな球体型に圧縮された。

圧縮された空間は——そしてそれに巻き込まれた『最後の晚餐』は、男が『紫の球体』として投げた時よりも小さく収縮され、少年の足元にコロコロと転がる。

「……はん」

アーサーには、

「いーぜ」

毒薬一滴すら届かなかった。

「毒、毒かあ……あー失敗した、浴びときやよかつたぜ。俺とした事が盲点だった。太陽、地面、重力と来て……そっか毒か、そう来たか！ かーっ！ マジで勿体ねえ事した！ 毒浴びンのあ初めてだったもンだからさあ！ 『魔力回路』なんざ弄られた事もねえ！ ビビッて潰しちまった！ クソ！ 初めてだったらすっかり味わつておくべきだろおが！ あーあ！ カッコ悪いなあオイ！ 下らねえなんて話じゃねえぞ！ ああん!？」

何から何までどうしようもなかった。

そもそも化学兵器が届いていなかった事も。

届いていなかったはずなのに、それが『魔力回路』にダメージを与える毒物だと見抜かれていた事も。

挙句の果てに、それを「浴びてみよう」だなんて思われていた事も。

そして何より。

おそらくアーサーには通用しないだろうと、心のどこかで確信していた自分自身も。

「俺もまだまだ未熟つてか。よし決めた、次の目標は『毒にもビビらねえ精神力』だ。小さな事からコツコツとだな」

アーサーはもう、自分の足元に転がる球体に見向きもしない。

それは数秒前、彼自身が脅威を感じて即座に叩き潰した科学技術の真骨頂だと言うのに。まるでそんな事も忘れてしまったみたい、少年は一人、新たな目標が出来た喜びを噛み締めていた。

科学兵器の脅威なんて、とつづくに記憶から消えている。

「……………」

愕然とした。

一人で舞い上がっているアーサーの姿に、科学者の男は言葉を失った。

——その程度？

——その程度の反応しか得られないのか？

この毒薬を作るだけでも何年要したと思っっている？ 魔術師だけを殺す薬物の調査、それがどれほど困難を極めたと思っっている？

ゆうに三年はかかった。

そもそも最初の発見は偶然で、その偶然を再現可能な理論と化学式に落とし込むまで一年半は要した。そこから実験と失敗の連続で同じ時間を使い、ようやく出来たものが

……。

その末路が……今、アーサーの足元に転がる二ミリ程度の球体だ。

『最後の晚餐』だけじゃない。『天の梯子』も、『地獄の窯』も、『神の雷』も、全て長い時間をかけてようやく形に出来た、血と汗の滲んだ奇跡の産物なのだ。

にも拘らず……これだけ？

長年の研究を、長年の信念を、己の人生を余すところなくぶつけて、浴びせて、それが……これだけなのか？

発展途上？ 次の目標？ なんだそれは？

それじゃあまるで——

科学わたしたちが、魔術きよまらの踏み台みたいじゃないか。

「……あ……な」

「あ？」

科学者の男が、何かをボソリと口にする。

するなあ!!」

自分を否定する奴が許せない。自分を拒絶する奴が許せない。自分を認めない奴が許せない。自分を理解しない奴が許せない。自分を見下す奴が許せない。自分を踏みつける奴が許せない。自分を嘲笑う奴が許せない。自分を馬鹿にする奴らが許せない。

「貴様らが最初にこの世に生まれ落ちた時! 初めてその肺に取り込んだものはなんだ!?! 初めて見た光景は! その瞳に取り込んだ光は! その耳が捉えた音は! その肌を感じた空気は! 両親の手は! 全てこの世界のものだ!! そもそも! 貴様らが生まれる前にいた場所はどこだ!?! 母親の胎内だ! 生物の内側だ! この世界で、長い長い、長い長い長い長い長い年月をかけて進化を果たし! 適応と絶滅を繰り返し! そうして生き残ってきた生命体! 自然が生み出した奇跡の結晶体! その内側で生まれ! 育ったはずの体で! どの口が! どの手が! この世界に異物を持ち込んだ!?! この世界に異物を撒き散らした!?! 自分自身の世界を自分自身の手で穢しておいて!! 何様のつもりで自然科学を侮辱するのだ!?!」

目の前の少年が許せなかった。

自分を否定する魔術、その頂点に立つアーサーが許せなかった。

そして、そんな奴に対して手も足も出ない自分も許せなかった。

「神秘など! 最初からあったのだ! この世界そのものが巨大な神秘なのだ!! それ

を！ 貴様らはああああああああああああああああ！！」

泣き喚く子供のような、悲痛というよりも憐れな絶叫だった。

だつて……誰が聞くんだ、そんな叫び。

魔術が台頭する時代。魔術が常識として成り立つ世界。そんな中で、誰がこの男の言葉を真摯に聞き、頷いて、賛同してくれるのだ。結局は多数派が行き先を決める世界で、一人孤独な人間の言葉など、誰がわざわざ聞くといいのだ。

この叫びを。

この嘆きを。

一体、誰が。

「貴様らが常に肺に取り込んでいるものはなんだ!? 酸素だ！ この世界のものだ！ 貴様らが常に食べているものは!? 肉は、野菜は、水は!? 全てこの世界のものだ！ 貴様らが常日頃！ 魔獣や肉食獣に襲われないのは何故だ！ 生態系の輪が！ 奇跡のような美しさで回っているからだ!! 神秘とはこの世界の事だ!! 散々この世界の神秘に頼り、縋りつき、恩恵を受けている身で！ よくも馬鹿にできたものだ!!」

意味なんて、あつたのだろうか。

誰にも聞き入れられず、誰にも受け入れられず、誰にも認められない心の言葉。そんな言葉を、吐き出す意味なんて――

「自分が何に生かされているのかも分からん頭で！ クソを詰め込んだその頭で！ わたしを馬鹿にするな!! この世界を侮辱するなあああああああああああああああああああああああああ!!」

意味なんて無くてもよかった。とにかく己の中にくすぶり続ける憎悪を言葉にして吐き出さなければ、今度こそ心が死んでしまおうと思った。

もう自分でも自分の感情を止められない。一度溢れ出したものは止まらない。

叫ぶ。とにかく叫ぶ。

その叫びを、

「……………」
アーサーは、笑顔で聞いていた。

「魔術にうつつを抜かし！ 自分の住む世界への理解を諦めた猿が！ 最も身近にある美に気付けぬクズ共が!! よくもわたしを嘲笑っ」

「なに苦しんでんだ？ お前」

刺し込むように放たれたその言葉に。

男の言葉が、詰まる。

「……なんだと……？」

「なに苦しんでんだつつつてんだよ」

アーサーは、やつぱり笑っていた。

「何やってんだよ、そうじゃねえだろ。苦しんでどおすんだよ。意味ねえだろ」

男の姿を真正面に捉えながら、そんな風にアーサーは言う。

「笑え」

言う。

「喜べ」

謂う。

「楽しめ」

云う。

「そして俺を笑わせろ、喜ばせろ、楽しませろ。そうじゃなきゃ意味がねえだろ」

言つて、謂つて、云つて……そして少年は両手を大きく広げた。

自分の存在を、見せびらかすみたいに。

「俺の名前はアーサー、神を殺した魔術師だ」

今さらするまでもない自己紹介。

知らない人間などいないほど、知られ尽くしたその名前。

「で？ お前は誰だ？」

今度は、問う。

「お前はなんだ？」

小さく肩を竦めながら、彼は笑ったままで男に問う。

男の名を。男の存在を。

もしもそれを尋ねたのがアーサーでさえなければ、ただ互いに自己紹介をするだけの、なんでもない日常の一コマに見えただろう。

だけど、科学者の男には……、

「……ふざけているのか？」

奴の一挙手一投足が、自分を馬鹿にしているような気がしてならなかった。

なに苦しんでいるのか、だと？ 誰のせいだと思っている。

笑え？ 喜べ？ 楽しめ？

笑わせろ？ 喜ばせろ？ 楽しませろ？ ……何を言ってるんだ？

——わたしの言葉を聞いておいて!!

——意味がないだど!?

「馬鹿にするのも大概にしろ！ わたしの名など聞いて！ 一体何が」

「お前の名前なんざ聞いてねえし興味ねえ」

アーサーはあつさり切り捨てる。

自分から尋ねていたにも拘らず。

「笑え、やってみい。幸せな気分になるぞ。偉そうに苦しんでんじやねえよ、下らねえ」

「下らない……!？」

「お前、何やってんだ。何してんだ。何しに来てんだ、ああん？」

口が大きく、横に開く。

「苦しんでんのに……なんでそんな事やってんだよ、お前」

笑う。

「楽しいんだよ!!」

アーサーは笑っていた。

「楽しくなつちまつてさあ!! しゃーねえんだよ!!」

今度は少年が叫ぶ番だった。

まるで科学者の男の真似をするみたいに、アーサーが絶叫を放つ。

「クソみてえにつまんねえしクソみてえに下らねえ！ クソだ！ 見渡す限りクソまみれだ！ 世界がどうしたよ！ どこもかしこも下らねえじゃねえかよ！！ でも笑えちまつて仕方ねえ！ なあ!? なんて苦しんでられんだよお前!!」

男のように叫びながらも、しかし男とは対照的に、アーサーは笑っていた。

心から、楽しんでいた。

「求めても！ 手に入れても！ 極めても！ 手放しても！ それでも前に進まねえと気が済まねえ！ 進む道がねえと気が済まねえ！ 邪魔するもんがねえと気が収まんねえ！ 邪魔するもん全部ぶっ潰してねえと気持ちを抑えらんねえ!! 見ろよ！ 失敗だ！ 失敗ばっかだ！ 成功!? 知らねえよバーカ!! バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! どこにあんだよそんなもん！ でも楽しくて！ 楽しくて!! しゃあねえんだよお!!」

理解ができなかった。

「教えろよ！ どおやったらそんな苦しめんだよ！ 見ろよ！ 見ろ!! 俺を見ろ!! 俺は、こんなに！ 楽しんでのにさあ!!」

こいつはさつきから何を言っているんだ。

理解のできない価値観だった。意味の分からない価値観だった。

訳が分からな過ぎて……男の思考は止まっていた。

「——で、どうだ？」

「……は？」

「こんな感じか？ 俺もあんま慣れてねえけどさあ……聞いたろ？ お前はお前の気持ちを叫んだ。じゃあ次は俺だ。今のが俺の気持ちだ。正直な心だ。分かったか？

ターンエンドだ。ほら、次はお前だ」

その言葉で男は理解する。アーサーが何をしようとしていたのかを。

いや、何をしようとしていたわけでもなかった。

奴のしている事は、最初から、何も変わっちゃいなかった。

「いいぜ、言葉の殴り合い、心の殴り合いか。燃えるじゃねえの！ そう来るとは思ってた。拳ばっかじゃ飽きるよなあ！ 次は心で殴り合おうってか!? 好都合だ！ 丁度精神力を鍛えとこおと思ってたところだよお！」

結局、ずっと、戦おうとしていたのか。

男の叫びなんか、最初からアーサーの心に響いていなかった。

奴の目には、奴の耳には、あの絶叫すら戦闘行為か何かとしか認識されていなかった。

ターンエンド。

つまり……ずっとずっと最初から。

アーサーにとってこれは、ただの『ゲーム』。

「ははっ!! 最高だぜお前!! 今まで会った中じゃあぶつちぎりの天才だ!! ぜえンゼン飽きねえ!! こうも俺の楽しませるってンなら文句もねえ!! ほら次だ、次をよこせよ! こつちは昂つちまってしやーねえンだよ! 焦らすな! 次はなんだ!? 笑わせろ! 喜ばせろ! 楽しませろよ!! 俺を!!」

科学者の男は、アーサーの言葉を黙って聞いていた。

口が動かなかったし、何も言い返せなかった。

あれだけ激流のように溢れ出していた『怒り』は、いつの間にか消えていた。

代わりに男を支配していたのは、妙な感情だった。

彼自身、その感情の名前をよく知らない。喜怒哀楽のどれに分類されるかも分からない。でも確実に、男は自分の胸の内で、得体の知れない『何か』が大きく膨れ上がっていくを感じていた。

悲しみに似ているような。でも悲しみじゃない。

絶望に似ているような。でも絶望じゃない。

これは、なんだ。

今の自分を突き動かそうとしている感情は……なんだ。

「……空が」

ポツリと。

男の口から、言葉が漏れる。

「空がなぜ青いか……知ってるか？」

「あ？」

アーサーが楽しそうに目を輝かせ、男の言葉に聞き入る。

そんな姿さえ、ひどく虚しく見える。

「どうして太陽があんなにも美しいのか、貴様は知ってるか……」

「は？　なんだ？　次は知識勝負か？　いいねえ、予想外だ」

「森の草木が、なにゆえああも鮮やかなのか知っているか……！」

アーサーの言葉も無視して、男は言葉を紡ぐ。

自分でも、もう、言葉を止められない。

「鳥の聲がなぜあれほど耳に心地よいか知ってるか？　夜闇に浮かぶ月がどうしてあんなに人の心を揺さ振るのか知ってるか!?　人の手で書く文字はどうしてあれほど忠実にその者の性格や感情を映し出せるのか知ってるか!?　動物の肉がどうして美味に感じるのか！　大いなる海にどうして人は心を打たれるのか！　貴様は知ってるか!?　貴様の着ているその服は！　どんな物質で出来ているのかを知ってるか!!」

叫ぶ。心から。

しかし先程までの憤怒とは全く違う感情がそこにはあった。

「全てが奇跡なのだ！ 全てが奇跡の連続で成り立った偶然の産物なのだ！ だからこそ美しく！ だからこそ煌めき！ だからこそ心打たれるのだ！ この世界の全てが！ 愛すべき奇跡なのだ！ なのに……だというのに！ 何なのだお前はあ!!？」

もう駄目だ。心がグチャグチャだ。

メチャクチャになって、自分でも分からなくなってしまった。

「どうして生まれて来たのだ！ どうして存在しているのだ！ お前のような奴が！

この奇跡に溢れた世界に、美しい世界に、どうしてお前のような邪悪が！ 異物があ!!？」

悔しかった。

「なぜ……なぜなんだ……!!」

こんな奴がこの世界にいる事が、自分が負けた事実など霞んで見えるほどに悔しかった。

美しくあつて欲しかった。心打たれるものであつて欲しかった。この世界には、そうあつて欲しかった。なのに、なぜなんだ。なぜ世界はこんな奴を生み出したんだ？ どうして……。

終わりのない問いを、男は延々と続けていた。

その時だった。

「ンだよ、お前もしっかり楽しんでんじやねえか」

邪悪の声が、聞こえた。

「自分の心を隠すな。ンギ最悪中の最悪だぞ。楽しんでんなら最初からそう言えや。隠すな」

「……何が楽しいのだ」

「だから強がんな。ン。お前も楽しいンだろ？」

「貴様と同じにするなあ!!」

虫唾が走る。

こんな奇跡を塗り潰す漆黒の悪と、同じと言われるだけで。

「何もかもが違う!! 貴様と! わたしとでは!!」

「違わねえよ。楽しんでっからお前はそこにいんだろおが」

「違う!!」

「嘘つくな。嘘つきつてのはあれだぞ? ……あー……何の始まりだっけ?」

まあどうでもいいか、とアーサーは適当に笑いながら、男を見る。

赤く燃える瞳で、見つめる。

「そうだ、お前さつき言ったな——『どうして空が青いのか』。少しだけ興味が湧いた」とても興味が湧いたようには思えないほど、軽い声でアーサーは言う。

「そんなに言うなら教えろよ。どおして空は青いんだ？」

「貴様に言ったところで理解などできまい……！」

「んなのあ分かンねえ。やってもねえのに決め付けんなや。お前が分かってんだ、俺が分からねえ道理はねえ」

「馬鹿にしているのか!? 貴様とわたしとは理解力も知能も違う! 天と地の差だ! 分かるものか! 貴様も……誰も彼も! この世界の誰にも! 空の青さの美しさが分かるものか!!」

「あ? 訳分かンねえ奴だな。じゃあお前はどおやって知ったんだよ」

「そんなもの——」

「ね、
どうして空って青いのかな」

男の言葉が、止まった。

08【全ての始まり】

「ね、どうして空って青いのかな」

別に、大して意味のある質問じゃなかった。

暇で暇で仕方なくて、気持ちを紛らわせるためだけに口をついた質問だった。

「……ねー、聞いているのー？　ねーえー！」

椅子に座り、足をブラブラさせ、退屈ですと言わんばかりに顔をしかめてみせる少女。
そんな彼女に、

「モデルは動くな」

全身を黒一色の服で包んだ少年が、ぴしやりと言い据える。

その視線は少女の方ではなく、目の前に掲げられたキャンバスへ。

片手には絵筆。もう片方の手には、絵具を乗せた木の板。体の線は細く、外見だけは華奢な少女にも思えてしまう少年。

しかし顔が特徴的だ。その万物を射抜くような……というか、視線一つで相手を射殺

すようにつり上がった目。若いクセに眉間に刻み付けられた彫刻のようなシワ。口は不機嫌そうに曲がり、表情は曇りっぱなし。喜怒哀楽の喜と楽だけ綺麗に抜き取ったようにネガティブな印象。

何にしても、幸せそうな顔には見えなかった。

「貴様はただ黙ってそこに座っている。それがモデルの仕事だ。自分の絵を描けと申し込んで来たのは貴様だろ。違うか」

「そーですけどー!」

「ならば口を閉ざせ。そして動くな。気が散る」

「あーあー! 止められるもんなら止めてみろーい! あふおーい!」

「……………」

動かないどころか、少女は椅子の上に乗ってついに踊り出した。

狭い足場でなんとも器用、どこの民族舞踊かと思うほど独特なダンスを披露しつつ、
「あそーれほーい! ぶえーい!」……それは何の掛け声だ?

しかし少年は我関せず。動くなど言っておきながら、動く少女などお構いなしに彼は黙々と絵を描き続ける。

「……………」

「……………」

「……ねー、ボク踊っちゃってるんですけど」

「それがどうした」

「いやツツコめよ!」

少女は軽い動きで椅子から飛び降りながら、

「つまんねー! なんだいキミは! 石か! そんな不愛想なツラしちやってさー!」

少年の許にタタタタと駆け寄って……あろうことか、描画の最中だというのに少年の顔を両手で掴んでムニムニ揉みしだく。

「うわ! かった! 顔! うそでしょ! キミこれ大丈夫!? 顔凍っちゃってない!?!」

「……黙れ」

「えー、ボクと同年の男の子とは思えないよこれ! カッチカチじゃん!」

「……黙ってる」

「……えい!」

後から聞けば、どれだけ表情が固いか気になったらしい。

しかし、それを確かめるにしたって手段があるだろう、色々。

よりにもよって……殴らなくても。

ゴンツツツ!! と、グーで殴られた少年の顔からとんでもない音が鳴った。

その瞬間、少女は小さな声で「あ、ヤバ」と。そんな声など掻き消すような大きな音を立てて、少年は椅子もキャンバスも吹き飛ばしながら地面を転がって行った。入れ過ぎなのだ。力を。

しん……と静寂。

地面に薙ぎ倒されたまま動かなくなる少年。

「あわわ……あわわわわわ……」

それを見た少女は震え出した。

やっちゃった、本気で殴っちゃった。……いくら後悔しても時間は戻らない。

「……………」

何も言わず、少年はスクッと立ち上がる。

痛みを感じてるとは思えない動きで滑らかに、少年は倒れた椅子を起こし、キャンバスを乗せていた台を丁寧に元の配置に戻していく。

「……………ほっ……………」

それを見て少女は一安心。

なーんだ、大丈夫か。そんな風に思いかけた瞬間。

バガアアアンツツツと。

!!!!!!

少女の殴打とは比喩物にならないくらいの爆音が鳴り響いた。

相手が女の子だろうが容赦なし。少年は手に持ったキャンバスを、そのまま全力フルスイングで少女の顔面に叩き付けていた。

呆気ない結末だった。

少女の体は二メートルくらい後方に吹っ飛んで、力なく地面を転がって行った。そのまま少女は、うんともすんとも言わなくなる。

「ふんっ」

気が晴れたのか、荒い鼻息と共に少年はドカツと椅子に座る。さっさと絵に戻ろうとして……これは自業自得、さつき少女を殴ったせいでキャンバスに大穴が空いてしまった。

仕方ない。今日はやめよう。

そう思い、椅子から立ち上がろうとしたところで、

「ちよいやさー！ー！」

「びっ！！」

少女のスライディングが見事に決まり、少年はすごい勢いで真横に倒れた。地面に側頭部を強打する。

「な……何するのさー!!」

「それはこちらのセリフだ愚か者が!!」

痛む顔を押さえながら叫ぶ少女と、揺れる頭を抑えながら叫ぶ少年が全力で睨み合
う。

「どーかしてるよ! 女の子の顔を殴るなんて! サイトーだよ! バーカ! ボクお
嫁に行けなくなっちゃったらどーすんだ! 責任取れんのキミ!」

「貴様こそなんのつもりだ! なにゆえだ! 座れと言えば座らず! 動くと言え
ば動き! 挙句の果てにこの暴虐か!? 一度死んで生まれ直したらどうだ!」

「それが弱い美少女に言うセリフ!? あんな思い切り殴つといて!!」

「もとはと言えば貴様が元凶だ! それになんだ!? か弱い美少女!? ふん! 今まで
幼馴染の縁と思い、美化して描いた貴様の肖像画が仇となったようだ!」

「なっ!」

「いいだろう! これからはより忠実に、貴様の顔面をそのまま不細工に描いてやる!」
「言つたなこのヤロー!!」

「何か文句でもあるのか猿が!!」

互いに胸倉を掴み合い、幼い頃から知り合う仲だからこそ容赦ない殴り合いが始まっ
てしまう。

雲一つない、鮮やかな青が冴え渡る快晴の日。
少女の家の裏庭での出来事だった。

「ねーねー知ってる知ってる知ってる!? 『錬金術』だって! 最近発見された魔術の系統らしいんだけどね! げんそはいれっ? を変えて金属とか創るんだって! よく知らないけど! 素晴らしい発見だよこれは!」

「……動くな」

「なんだよー! せっかくボクが話題を振ってあげてるのに! キミ、少しは相手に話を合わせる事を覚えたらどーかな! そんなんじゃモテないよ!」

「……………」

さすがに限界が来た。

絵を描く手を止めて、少年は目頭を押さえて「ふう……」と。怒りを抑えるみたいに、深く息を吐く。

「……学び舎へ入れば少しは慎ましさを学ぶだろうとあり得ん希望を抱いたわたしが愚かだった」

「えー!? 何さそれー!」

椅子の上でいつものように足をブラブラさせてた少女が、怒ったみたいに立ち上がった少年に詰め寄った。

……魔術学校、だったか。

全く興味のない少年にはよく分からなかったが、なんでも少女の家は代々伝わる魔術の名門らしく、彼女は父親のツテで、この国では一番の成績を誇る魔術学校に入学する事になったのだった。

実際に入校したのが約三ヶ月前。

キャンバスを少女に叩き付けてデッサンを台無しにしたあの日の、その次の日だった。

「心からのわたしの感想だ。そして予想もできた。貴様は今後、何一つ学ぶ事なく魔術の道を断念するだろう」

「なっ! なんてそんなひどい事言うの!?!」

「魔術の道とて研究の道だ。貴様のような落ち着きを知らん奴に務まるとは思えん」

「たあ!」

「ぐ!？」

ついでに言うなら、そうやってすぐに短気を起こし、何かあれば迷う事なく暴力に頼るような奴も、絶対研究には向かない。

キャンバス越しに、少女のチョップが少年の脳天へ落ちた。

「なにさ! ちよつとぐらい気を遣ってくれてもいいじゃないか! ボクだってそーゆーの言われると傷付くんだぞ!」

「傷付けられたのはわたしの方だ!」

「ボクだって傷付いたよ! もっと優しくしてくれてもいいだろ!」

「その言葉! そっくりそのまま返してやる!」

とまあそんな感じで、いつも通り喧嘩になる二人。

しかし今日は用事が用事なもので、殴り合いだけはせず、散々口汚く互いに罵り合った挙句、

「……………」

「……………」

最後は二人して沈黙だった。

少女はムスツとしかめっ面でそっぽを向き、大人しく椅子に座る。

少年は元から気難しそうだった顔をさらに難しくさせ、今回は無事だったキャンバス

に少女の絵を描いていく。

……そもそもは三ヶ月前、少女が「これからは頻繁に会えなくなるから」と言って、画家を目指していた幼馴染の少年に自分の絵を描いて欲しいと頼んだのが始まりだった。

で、三ヶ月前はものの見事に失敗し、少女は魔術学校に行ってしまった。

一年に数回だけ取れる休みを使い、こうして彼女が来て、あの日描けなかつた絵をもう一度描いて欲しいと依頼しに来たのが、今日だ。

「……ぶすー……」

「ブス？　なんだ？　貴様の事か？」

「んだとこの……あ……」

咄嗟に言い返しそうになったのを抑え、少女は何も言わずに椅子に座る。

そのいつもとは違う様子に少年は「？」と少女の方を覗き見る。

「……今、ボクはキミを無視しています……」

「無視をしている人間はそんな宣言などするまい」

「……謝ってくれるまで何もしゃべりません……」

「貴様ほど喋るモデルもいなかろう」

「っ！」

ムカついたのか何なのか、少女は椅子の上に立ち、無言で踊り始めた。

黙々と絵を描く少年と、しかめつ面で黙ったまま派手に踊る少女。

実にシニールな絵面が出来上がる。

「……はあ……」

気が散る。これでは描画に身が入らん。

しかし謝るのは気が引けたから、少年は、

「……空気中の粒子が、」

「？」

「太陽の光を散乱させているらしい」

突然何事かを語りだした少年に、思わず少女は踊りを止め、振り向いていた。

「そもそも太陽の光というのが曲者で、あれは複数の色を合わせた光のようだ。白一色ではなく、赤、橙、黄、緑、青、紫など多岐に渡る。色の三原色と似たような原理だな。

それが人間の目には捉え切れんという話らしい。その中でも青の光が特に——」

「え？　ちよ、ちよつと……？」

「……？　なんだ、貴様を知りたがっていた事だろう」

「知りたが……え？　ボク、なんにも言っていないけど……空気の何が、とか。……待つて、キミなんの話してるの？」

「何を言っている？　貴様が尋ねたのだろう。三ヶ月前、なぜ空は青いのかと」

「……さんかげつまえ……?」

「どうだ、教えてやったぞ。少しは感謝をしたらどうだ。……ちなみに言うが、この事実ほどの教本にも載っていない。わたし個人が、わたしの手法で知り得た事実だ。その労力を考えれば、貴様がわたしにどれだけ感謝してもし足りない」

「いや、ていうか」

少女は少年の言葉を遮って、

「そんな三ヶ月前の話とか、ボク、覚えてないんだけど……」

「……は?」

「え、てことはキミ、ボクがずーっと前に、なんとなーく言った言葉を、ずーっと覚えて調べてくれてたって、こと……?」

その瞬間、少年は自分の犯した最大の過ちに気付いたらしい。

気難しそうな顔を真っ赤に膨れ上がらせ、今にも弾け飛ばんばかりの恥を無視やり抑え込み、キャンバスの壁に己の顔を隠す。そこで黙々と絵を描くフリをする。

「……ええええええええええええ!」

それと反対に、少女の顔は満面の笑みだった。

「うそ、そうなの? そうなの!? え、え、え!」 キミ、ボクが言った事をずっと覚えて、しかもボクのために、ボ、ク、の、た、め、に! 色々頑張ってくれてたって事! う

そー！」

「——っ！——っ!!」

「なっはっはー！ なんだーい少年、嬉しいことしてくれんじゃーん！ あはははははは！ ボクのために！ なんとボクのために！ おっほー！ どうしたんだーい？ ボクと会えないからってそんなに寂しがらなくてもいーんだよー？」

「だ、黙れ!!」

「ねーねー、もう一回聞かせてよ！ 空が青い理由！ 自分で調べたってホントに!? すっげーじゃん！ 天才だよキミ！」

「黙らんか貴様！ 口を封じられたいか！」

怒った椅子から立ち上がる少年だったが、一度調子に乗った少女はもう止められない。
い。

「恥ずかしがなんないでよー！ ボク今すっごく嬉しいんだ！ んはは、そっかー。ボクってばキミにそんなに想われてたのかー」

「ええいクソ！」

「うわ!?!」

いっそ力づくで口を塞いでやろうと襲い掛かる少年から、少女はひらりと身をかわす。

「なになに追いかけてっ!! 捕まえられるもんなら捕まえてみんしゃーい!」

「貴様あ……! わたしを馬鹿にするのも大概にしろ!」

「やーだねー! いい話のネタゲット! 学校の友達に言っちゃおー!」

「この……っ!!」

その日は珍しく、殴り合いではなく逃走劇が繰り広げられた。

草花が咲き乱れる爽やかな夏の日。

少年の家の裏庭での出来事だった。

「……なんだそれは」

「いやー、ドジっちゃって」

顔に包帯を巻いた状態でやって来た少女に、少年は面食らっていた。

額と、片目と、それと首にもびっしり、白い布が肌を覆っているのが見える。

「やっぱキミの言った通りだわ、ボクって研究に向かないみたい。演習室でね……なに

間違ったんだろ、今でもよく分かってないけど……魔術の実験でちよつとミスって、そのままボン！ って」

ボン！ のタイミングで手を広げ、少女は爆発のジェスチャー。

つまり、魔術の実験が研究の最中に何かミスをやらかして、爆発に巻き込まれて怪我をしたという事だった。

「……ふん、だから言ったのだ。魔術の道を諦めるとな」

「ちよつとー、まだ諦めてないんですけどー」

「そのうち諦める事になる」

諦めた方がいい、そんな怪我をするくらいなら。……とは、さすがに言えなかった。

少年はそのまま何も言わず、地面に置いた画材一式を再び肩にかけ直し、少女に背を向ける。

「ちよつとちよつと！ どこ行くのさ!?!」

「帰るのだ」

「なんでー!? 来たばっかじゃん!」

「……一年ぶりに帰省し、また絵を描いて欲しいと手紙をよこしたのは貴様だ。わたしはこれでも忙しい。だが馴染の知り合いの頼みだからと思っただけで来てみれば……なんだそれは。その包帯まみれのツラを、わたしがわざわざキャンバスに描き写せ

と？ その無様な姿を？」

「うっ……いつにもまして辛辣……」

「馬鹿にするのもいい加減にしろ。これでもわたしは画家として大成したばかりだ。妙な絵を描いて気概を損なったらどうする」

自分でも、なぜこんなにきつい言葉が出て来るのか分からなかった。

ただ、怒っていた事は確かだ。

何に怒っていたのかは分からないが。

「ふん、つまらん事に時間を使った」

「あ、待つて待つて待つて！ せっかく来たんだから話そうよ！ 今度は何年後になる

か分からないんだからさー！」

「何を話せばいい。貴様のような凡愚に」

「ぐっ。……ホント、しばらく見ない内にちよー口が悪くなったよね、キミ」

ぐぬぬぬ、と唸り、らしくもなく真剣な表情で腕を組み、考える仕草の少女。

せめてどんな言葉が出て来るのかだけは聞いてやろうと、少年は怒りの顔のまま、彼女の顔を睨み付ける。

その、包帯まみれの顔を。

包帯の内側に、どんな傷が広がっているのかを嫌に想像しながら。

「あー！ じゃあこうしよう！」

彼女は閃いたみたいに、

「ボクはこの一年、キミがどういう風に過ごしてたのか聞きたいな！」

「……は？」

「だってー！ ボクは何通もキミに手紙を送ってるのに、キミからはぜんぜんくれないじゃないか！ 恥ずかしいから言うのやだっただけど、すっかり寂しかったんだぞ！」

「貴様と違い、わたしは手紙を書く間もないほどに多忙だったのだ！」

「ボクだって忙しかった！ でも頑張つて書いた！ だからほら！ ボクにも聞かせてよ！ キミの話！」

「……ふん」

どうせ、今から戻ったところで都市への馬車はなくなっている。

ならば実家に戻るしかないが、あの家にはもう一年近く戻っていない。虫でも湧いているかもしれないと思うと、どうにも戻る気が失せる。

仕方なしに、少年は椅子を広げ、そこに腰を下ろす。

お、やった！ 少女もそう言っていると、持ってきた椅子に座る。

「何から聞きたい。答えてやる」

「うわー、何も聞きたくなくなる……。でも、今日はお言葉に甘えさせていただきますよ

う

その日は珍しく、絵を描かずに、二人は話し合っていた。

話し合ったとは言っても、少年が勝手に一人で喋り、少女はそれを聞いているだけだった。

少年の語っていた話は実に難解だった。

太陽の光がどうか、屈折がどうか。水の成分だの、薬品の化学式だの。

星の動きの規則性。動物と植物の相互作用。質量を持つものなら誰もが持つ万有引力。地面の内側の話。地球の内側の話。数式がどうか。魔術を使わずに空を飛ぶ方法に至っては、少女は最初から最後まで何一つ理解できなかった。

理解できなかったけれど……ずっと、嬉しそうだった。

少年が語る自然科学の知識は、少女には一つも分からなかったが、それでも楽しそうだった。

「そういう研究者になつたら？」——少女は言った。

「絵を描く気が起きない時の暇潰しだ」——少年は答えた。

しかし、不思議な事が一つ。

少年が話した内容の中には、ただの一つも、絵についての話は無かった。

「つまりこの式はだな」

何分……。

いや、もしかしたら一時間は話し続けていたか。

「確実に解が0になるのだ。凡俗共には理解の及ばぬ話だが、この等式はこれまで見てきたどの数列よりも美しく、小さい世界に収まった無限の大宇宙のように」

「あはは」

「……？ どうした。感激こそすれ、笑うような話ではないはずだが」

「ううん、違うの。なんかちよつと……久しぶりに楽しかったから」

「……………」

少女の、おそらく無意識に言ってしまったであろうその言葉に、少年は何も言えなかった。

久しぶりに楽しかった？ なんだその言い方は。

その言い方やあ、まるで。

まるで——

「おい」

「え？」

魔術学校の方は大丈夫なんだろうな？

……その簡単な言葉が、どうしても言えない。

言えないのは、そこに巨大な闇が広がっているような予感がしたからだ。言つてしまつたら最後、見なければよかつたものを見てしまいそうで。

「……なんでもない。この一年で間抜け面がさらに際立ったなと思つただけだ」
「えー！ なにそれー！」

だから、何も言わなかつたし、何も訊けなかつた。

でも、どうだったのだろう。

仮に訊いていたとして、自分に何ができたのだろう。

——何ができた？

空を青さを解明できる程度の知識で。

自然の摂理を理解する程度の頭脳で。

一体、何が。

「やだ！ やめてよ！ お願いだから！」

「黙れ！ 貴様は黙って座っていればいいのだ!!」

取っ組み合い、なんて言葉が似合わないほど一方的だった。

青年にもなれば、やはり男なのだ。純粋な力で女に負けるはずがない。

「やだ!! やだあ!!」

「大人しくしている!」

青年は、少女の服を思い切り引つ張り、無理やり脱がせようとする。少女は叫びながら、脱がされそうになる服を必死に押さえる。

一見すれば、暴漢に襲われている少女の凶だ。

だけど、違う。

違うのだ。

「二年前! 貴様が顔に包帯を巻いて帰って来た時! 何かは察していた! そして今だ!」

「っ!」

「何年貴様に付き合わされたと思ってる! 何年貴様と共に過ごして来たと思ってる! 騙せると思ったか! 隠し通せると本気で思ったのか!」

ついに青年の方が力で押し切った。

少女の手を払い除け、彼女の衣服を力任せに引き千切る。

その。

中から現れたのは。

「やだああああああああああああああああああ!!」

少女の細い腕のどこにそんな力があつたのか、青年の体は壁際まで一気に吹き飛ばされる。

でも、もう遅い。

見てしまった。視界に入れてしまった。

少女の衣服の内側の光景を。

本来そこには、健全な女性の裸体があるはずの場所に、代わりにあつたものを。

「いや、嫌っ、嫌……!……! 見ないで……!」

何年も誰も住んでおらず、ボロボロに寂れてしまった少女の家の中での出来事だった。

彼女は露になつてしまった体を抱いて、壁の隅に丸まって、「ごめんなさい、ごめんなさい」と意味も分からず謝つて、泣いていた。

青年は、ゆっくり立ち上がる。

壁の隅で泣き喚く少女に近寄る。

そこにあつたのは、

「……貴様……」

そこにいたのは、

「……なんだそれは……」

明らかに他人の体、明らかに人間じゃない生物の体を、何十、何百、何千、何万、何億と、もはや肉片単位で継ぎ接ぎされて、歪に、グチャグチャに、もはや人体の形を保てないほどに歪んでしまった体の少女だった。

いいや、それだけじゃない。

見るからに生物とは思えないものまで捻じ込まれている。

あれは結晶か？　ゴツゴツした表面を持つ透き通った何かが、少女の胸に、腹に、脇腹に、青年からは見ええないがもしかしたら背中にも、ガラスの破片のように突き刺さっていた。

グジュジュジュジュ!!　と、何かが脈動する音が聞こえる。

少女の体からだ。

幾億もの肉で継ぎ接ぎされ、もはや首から下の元の肉体など微塵も残っていない少女の体が、正確にはその肉片それぞれが、別個に脈動していた。

一人の体の、一つの体の動きではなく。

肉片それぞれが動く。

その時だった。

「な！」

「ひっ!?!」

少女の腹から、腹の内側から、肉片と肉片の間をこじ開けるようにして何かが這い出て来た。

見た事も無い魔獣だった。

小さい身体に何百という眼を敷き詰めた、嫌悪感を催す化物が。

「いやー！ いやー！ やだ!!」

狂ったように喚く少女は、手に持ったナイフで、這い出て来た気色の悪い化物を突き刺した。瞬間、「ギィ！」と情けない声を上げて、腹から出て来た魔獣が即座に息絶える。

そのままズルリと少女の腹から零れ落ちて、血を撒き散らしながらドチャ!! と床に落ちる。

「……………貴様……………」

動けなかった。

何も言えなかった。

恐ろしくて、足が竦んで、どうしようもなかった。

「……誰、が」

だが、そんな恐怖はすぐに塗り潰された。

もつと強大な感情が青年の頭まで埋め尽くした。

凶悪極まる、『怒り』が。

「誰がそんな事をしたあ!!!」

歯の根が噛み合わなくなるほどの怒りを自覚して、青年は家を震わすような声量で叫んだ。

でも、少女は顔を隠して泣いているだけだった。

「言えー！ 言え!! 誰だ!! 誰にやられた!! 何をされた!?! なんだこれは!?! なんて

……こんなつ、馬鹿な事があり得るか!! あの学校で!! 魔術の学び舎で!! 何が!!」

言いながら、青年の頭は青年本人の意思とは無関係に回り出していった。

今の少女の体、数年前の少女の姿、魔術学校、彼女の身に起きた事、こうなってしまう理由、経緯、可能性……それら全てが一瞬のうちに青年の脳裏を過る。

その時、青年はふと気付く。

ある可能性に。

「……父親は……」

「っ」

言った瞬間、少女の肩が跳ねた。

もう、それで決定したようなものだった。

「貴様の父親は……何をしている……。貴様を魔術の学び舎に送った、あの父親は……」

「……………」

少女は無言だった。

その無言が全ての答えだった。

もともと常人とは桁違いに天才的だった青年の頭脳が、彼自身の意思とは無関係に全ての辻褄を合わせていく。

そして……結論が出てしまった。

理解してしまった。

理解したくもない事を。

「…………どこにいる……貴様の、父親は、今……」

少女は首を横に振るばかりで、何も応えない。

吐瀉物でも吐くように泣きながら、少女はもう、何も言わない。

ただ、一言。

一言だけ。

ゆっくり、両腕で覆い隠していた顔を覗かせて、涙で塗れた顔を曝け出して。

そして、一言だけ。

「……………たすけて……………」

その瞬間から、青年の記憶はない。

ただ気が付いた頃には。

青年の目の前には、まるで壁に投げつけたトマトのように全身を液化化させて壁一面に塗りたくられた、少女の父親の、死体とも言えない残骸が広がっていた。

彼女の体は、魔術師としてあまりに有能過ぎたらしい。

「くそ!! くそ!! くそがア!!!」

話によれば、少女の父親は彼女の事を、『魔術師になるために産まれて来たようだ』と

称していたという。

それほどのレベルで、彼女は肉体的に、魔術との相性が良かったらしい。
だから、

「それだけの理由で……!!」

なのに、

「そんな理由で娘を実験台にしたのか!? 実の父親が！ 直接その手で!!」

少女の体を、余す所なく検査した。

もちろん正式な医療機関など頼めないし、頼りにならない。青年は独学で得た医療知識を用い、独自で設えた医療器具で、独力で少女の体を手術した。

そして、自身が会得した医療技術が、実は数百年先を行くオーバーテクノロジーであった事など最後まで気付かず、青年は一つの結論を得た。

彼女はもう助からない。

後は死を待つのみ体だった。

人体実験。

少女の通っていた魔術学校は、秘密裏にそんな事が行われていた。

普通に、常識的に考えれば……成功するはずもない、実験とも呼べないほど乱雑な実験。

しかし、魔術師共は本気だったのだろう。

本気で馬鹿だったのだろう。

科学に親しみが無い故に科学的な思考ができず、正しい準備のもとで実験をする事もできず、ともすれば幼い子供だつて上手くいくはずがないと分かるような事でさえ、奴らは気付けなかった。こんな馬鹿みたいな実験で、本気で上手くいくと思っていた。

その証拠に。

青年が魔術学校から奪ってきた実験資料には、馬鹿正直に、こんな風を書いてあった。

実験は『失敗』 被験体の崩壊が開始

原因：不明

新たな実験体の用意が必要

言葉も出なかった。

失望を通り越して絶望した。

こんな訳の分からない奴らが、こんな訳の分からない技術が。魔術が。

こうしてこの世に台頭しているという事実にもはや吐き気すら覚えた。

「ふざけるな……！」

二本の足で立つ力も、出せない。

「ふざけるなあ……っ!!」

膝を折り、机に寄り掛かるみたいに、青年はその場に崩れ落ちて涙を流した。自分がこの世界で最も愛した女性を実験動物にした、魔術師への憎悪と共に。

「ボクの絵、描いてくれない……………」

「……………」

ベッドの上で寝たきりの、痩せ細った女性のその言葉に、男は口を閉ざした。
あれから二年。よくもった方だ。

本当だったらあの時、少女は一週間足らずで体が完全に崩壊し、ただの肉塊となって死ぬはずだったのだ。それをここまで蘇らせた。男の手腕あつての事だ。

いいや、もしかしたらこれは。

ただ単に、彼女を苦しめる期間を延ばしただけかもしれない。

「……………絵筆など、もうしばらく握っていない」

「でも描けるでしょ？ キミなら」

「描く気が起きればな」

「んはは……………三日前もそう言ってたよ。覚えてる？」

「覚えとらん。不必要な事は忘れた方が脳にも良い」

「とか言っちゃって、ボクが三ヶ月も前に言った事は覚えてるクセに」

「……………なんだそれは。そんな事あつたかな、忘れた」

嘘つき、と彼女は小さく笑う。

笑ってはいるけれど……その笑みには力がなかった。
昔ならもつと、暴れるように笑っていたのだろうか。

でも、もう、その影もない。

少女だったあの頃の姿など、影も形もない。

「でも、結局あの頃……ボクの絵、最後まで描けなかったじゃん」

「馬鹿を言え。何枚も描かされた」

「ずっと小さい頃の話じゃん。魔術学校に行つてからは全然描いてないよ」

「……そんな下らん事をよく覚えてしているものだ。わたしの話はまるで覚えとらんクセに」

「だってキミの話、難しいんだもん」

「貴様が低能なだけだ」

言い合つて、罵り合つて、でも、喧嘩なんかできそうもない。彼女の体は、骨が透けて見えるんじゃないかと思えるぐらいに細くなつてしまつている。

口だけしか、動かない。

「……絵、描いてくれない？ ボクの、今の姿を」

「ふん、そんな痩せ細つた無様な姿をか？ 笑わせるな、そんなもの描く価値も」

「誤魔化さないで」

痩せた女性の、弱り切った生き物の、まるで沈む寸前の夕日のように輝く瞳に。
男はやはり、何も言えなかった。

男の頭脳と技術をもつてしても、彼女の体を元に戻す事はできなかった。

彼女の肉体を複製し、それを移植する事も考えたが、彼女の体はもはやその程度で治療できる段階を超えていた。

何をしても、彼女の肉体の崩壊を止める事はできなかった。

だから男は、彼女を『あのグチャグチャの体』のまま延命させる事しかできなかった。元に戻せない。あの頃のようにには戻れない。時間は先にしか進まない。このまま腐るように死んでいくしかない。

そんな地獄を味わうくらいなら。

味わわせるくらいなら。

せめて。

筆を持つ。木の板に絵具を出していく。台を立て、キャンバスを立て、そこに筆を押し当てる。

目の前には、椅子に座った一人の女。

椅子に『座る』というよりも、人形のように椅子に『置かれた』女。

もう自分一人の力では立つ事もできない、痩せ細った一人の女。

「……なんだ、すごく上手じゃん」

「描き始めたばかりで何を言っているのだ」

「だって手の動き、あの頃と全然変わっていない」

男の手は滑らかにキャンバスの上を走り、静かにモデルの輪郭をなぞっていく。

「……ね」

「モデルは黙っている」

「いいもん、騒いじゃうから」

「ボクのこと、殺してくれる？」

*
*
*

絶叫があつた。

この世を壊し尽くさんばかりに放たれた咆哮には、計り知れない絶望が詰め込まれて
いた。

絶叫しながら男は、床に倒れた女性にまたがつて、その首を両手で力いっぱい握り潰
していた。

最後の願いだった。男の手で殺されたいと、彼女は言った。男の手の平の温もりを感
じながら、男の顔を見ながら、ゆっくり死にたいと言つていた。

何も言えなかつた。

その願いを否定できなかつた。その望みを拒絶できなかつた。

結局最後まで、男は彼女に、何一つ大事なものを伝えられなかつた。

もう息をしていない女を見て。

自分の手で殺した女を見て。

だけど。

本当の始まりはどこにあった？

魔術という文明、そしてその文明を支える何もかもを否定すると固く誓ったその決意は、どこからやって来たのか。

自然科学。この世界を満たす奇跡。

そこに美を見出したのは、そこに男が手を伸ばしたのは。

その本当の出発点は、どこだった？

「ね、どうして空って青いのかな」

ある日、一人の少女が、一人の少年に、そんな風に尋ねたのだ。

別に、大して意味のある質問じゃなかった。

暇で暇で仕方なくて、気持ちを紛らわせるためだけに口をついた質問だった。

だけど少年にとっては。
それが全ての始まりだった。

09【決着】

復讐心は変わらない。

今さら何を思い出したところで、奴らへの憎しみは終わらない。

でも、始まりはどこだった？

そもそも自分は、どうして魔術を恨んだ？

何をしたくて、何を変えたくて、何を許せなくて、復讐の道を突き進んだ？

何のために。

誰のために。

科学者の男は、ゆっくりと顔を上げる。

目の前に、一人の少年が立っていた。

「……へえ」

その少年は笑っていた。

復讐の標的——その頂点に立つ化物は、笑っていた。

「なんだよ、やりやあでキンじゃねえか」

訳の分からない事を言つて、少年は快活に笑う。

しかしそこには、嘲弄の意味もなければ、見下すような色もない。

……どうしてそんなに、楽しそうに笑えるのだろう。

不思議で仕方がない。こんなに不条理な世界で、こんなに理不尽な世界で、こんなに穢れた世界で、こんなに許せない事が多い世界で、

どうしたらそんな風に、気持ち良く笑えるんだ。

「ようやく本気になったかよ、お前」

「……馬鹿にするな。わたしは初めから本気だ」

「違いよ。誤魔化すな。分かつてんだろ」

何もかもを見透かすようにそう言つて、少年はさらに笑みを深めていく。

楽しむような笑みではなくなった。

極上の餌を見つけた肉食獣のような、都合の良いオモチャを見つけた幼い子供のよう

な、純粹過ぎるが故に残酷性を帯びた、絶対的強者の笑み。

「で？ 教えろよ」

少年は言う。

頂点は問う。

「どうして空は青いんだ？」

それは、とある一人の少年が、生まれて初めて自然科学を手にした命題。

でも本当は、自然科学だとか、世界だとか、そんなものどうでもよく。

ただ単に、愛する誰かを喜ばせたかっただけの、不器用過ぎる一つの答え。

だから、その問いに。

科学者の男は。

「貴様なんぞに答えてやるものか」

明確に拒絶した。

その答えを、こいつに答えるわけにはいかない。

誰に答えようとも、こいつにだけは。

この少年にだけは。

「その答えは、どの教本にも載っていない。わたしがあの女のために調べ、導き出した結

論だ。貴様のような知能も感性も乏しい猿に教えてなるものか」

誰の手にも触れさせない。誰の目にも触れさせない。

だってこれは、彼女だけに捧げるはずの、精一杯の心の形。

自分の中の大切な『何か』。

ようやく分かった。今やつと理解した。いや、思い出した。

世界を愛したきっかけを。自然科学を愛した始まりを。魔術師を憎んだ理由を。その全てを。

自分が、何をしたかったのかを。

自分が『誰』なのかを。

「わたしは……」

男は静かに、

「貴様らが憎い」

口を開く。

「わたしから全てを奪った貴様ら魔術師が、心の底から憎くて仕方がない。叩き潰さなければ気が済まない！ 否定しなければ気持ち収まらない！ 貴様ら魔術師がわたしから奪った分を！ 貴様らからも奪ってやらなければ!! この心は!! 怒りは!! 永遠に静まらない!!」

震える体で、力の入らない足で、それでも男は地面を踏む。

無様でも無残でもいい。

立ち上がらなければいけないのだ。

「もう二度と!! 貴様らに屈するものか!!」

全身をズタズタに引き裂かれ、科学兵器も全て破損し、もはや攻撃を仕掛ける事も、攻撃を防ぐ事もできなくなった自分自身を、それでも男は立ち上がらせる。

ズン、という音が聞こえた。

男の両足が、大地を捉えた音だ。

「これはわたしの復讐だ! これはわたしの憎悪だ! これは! わたしがわたしに課した! わたしだけの『道』だ!!」

鼓動が聞こえる。

自分はまだ生きている。

こんなところで終われない。

死んでしまった者の分まで、殺してしまった者の分まで、生き抜かなければならない。

「貴様はその礎だ!! アーサー!!」

純粹な復讐心と共に、科学者の男が再び立ち上がる。

最大最悪の敵に、立ち向かう。

「奇跡に満ちた世界を蝕む病原菌が!! わたしがこの手で駆逐してやる!!」
「いいぜ、受けて立つ」

返事は早かった。

少年は笑って、男の殺意を真正面から受け止める。

その瞬間だった。

ドツツツと。

辺り一帯の空気が明らかに物理的に重量を増した。

果たして、男は気付けたか。

全力を出しつつかある少年の『威圧感』だけで力学的な法則が一切合切すべて狂い、この惑星から放たれる万有引力の威力が一気に一・五倍も膨れ上がったという事実に。

しかし、それでも男は倒れない。

そんな細事など、意識にも入らない。

「楽しもおぜ、誠心誠意」

「貴様と一緒にするな。虫唾が走る」

「強がんな。お前もわかつてるクセに」

少年のその言葉を、科学者の男は「ふん」と鼻を鳴らし、戯言だと一蹴する。

みしみしと全身から怪しい音を立て、さらに多くの鮮血を垂れ流しながらも男は立ち上がる。

立ち上がり、そして、懐に手を突っ込んだ。

取り出したのは、一本の絵筆。

特に意味など無いはずなのに、なぜか必ず、お守りのように毎日衣服の中に忍ばせていた、つまらないガラクタ。

何年ぶりの感触だろう。最後にこれを握ったのはいつだったか。

……そうだ、思い出した。

痩せ細ったアイツの絵を、描いた時以来か。

「来やがれ最強、俺が相手してやんよ」

「ほごぐな猿が」

その筆一本で、何ができるといふのだろう。

科学兵器のスイッチでもない。起動を合図する何かでもない。それ単体では武器にも兵器にもならない。しかし男の手元には、もうそれしか残っていなかった。

そして、それだけ残っていれば十分だ。

なにせ男には、圧倒的な頭脳がある。

絵筆一本あれば、どうにでも世界を覆せる。

「行くぞ、魔術師」

男は、あの日のように。

キャンバスに筆を立てるように。

その向こうに、あの日、そんな事を尋ねた少女の姿を思い浮かべながら。

筆の先を、少年に向ける。

そして、

「わたしは……レオナルド」

科学者の男は。

いや。

「わたしの名はレオナルド・ダ・ヴィンチ!! 貴様を殺す科学者だ!!」
「俺の名前はアーサー・ペンドラゴン。神を殺した魔術師だ」

レオナルド・ダ・ヴィンチは、大きな一歩を踏み出した。

その直後、神話的な破壊が吹き荒れた。結果なんて、最初から分かっていた。

結末なんて、最初から知っていた。

それでもここに、一つの決着がついた。

どうしようもないほどに覆す隙の無い、世界最強の決着が。

10 【世界を愛した者達へ】

探す。

探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す
 探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す
 探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す探す
 探す探す探す探す探す。

「お」

—— 見つけた。

待ちに待った『それ』の気配に、アーサーは思わず笑う。そして『それ』が埋まつて
 いるであろう地面の上で、さてどれくらいの深さだろうかと足の裏でトントンと地面を
 叩いてみる。

簡単に見つかるとは思っていなかったが、それにしても長かった。

かれこれ五時間は掛かった。

あちこち色々な場所を歩き回り、森を切り開き、山を平らに均し、川を干上がらせ、

徐々に探索範囲を広げていって……ようやく『探し物』が見つかった。

しかし、まさか『こんな所』にあったとは。

「つくづく失敗だ。自分から『楽園』を出てつまうとは」

言いながら、アーサーは足の裏で叩いた地面の反響音に聞き耳を立てる。

それは、物理的に観測しようとしても決して捉え切れないほど小さな音。

そんな音響を、しつかり鮮明に聞き取って、

「よし、やった」

狙いを定め、凄惨に笑う。

パチン！ と軽く指を鳴らす。

直後の出来事だった。

大地を真つ二つに叩き割るような轟音が炸裂した。

そしてその通り、大地が真つ二つに裂けた。

アーサーの目の前に断崖絶壁が現れる。

直径一キロメートルにも渡って強引にこじ開けられた地面は、恐怖を煽るような地響きを上げながら割れ目を拡大させていく。

もちろん自然現象ではない。アーサーの魔術だった。

「地面をこじ開けるつてのあ、俺には無かつた発想だ。なるほど。大金探して上ばかり
見てるから、足元の小銭に気が付けねえ」

ゴゴゴゴゴゴ……という大地を揺るがす音が響く。

アーサーの足元から——いや、足元のさらにもっと奥深くから。

「やっぱ道つてのは一人で歩いてても無意味だな。誰かがいねえと前に進めねえ」
そう考えれば、ある意味今回は『成功』だったのかもしれない。

魔術師になって、世界最強になって、神様を殺してから。

初めて、楽しかったかもしれない。

「さて」

足元の下から伝わる震動を全身で捉えつつ、

「今日は盛大にお祝いだ」

次の瞬間。

ドオツツツ!!!!!! と。

猛烈な勢いで地面の底から何かが噴き出した。

凄まじい屹立があつた。

天と地を繋ぐ大樹の幹のようにも見えた。

空高くまで突き上がるその柱は、地底深くから次々と止まる事なく溢れ続ける。それは遙か上空で傘のように広がって、そのまま全方位に大量の体積を撒き散らしていく。

その光景には、思わずアーサーも「おお!？」と声を上げて目を輝かせた。
生まれて初めて見た。

天、然、で、湧、き、出、る、温、泉、な、ん、て、

「いっつっ」

上から降り注ぐ膨大な量の水を真正面に見据えながら、

「やつほ————い!! 風呂だああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

少年は喜びのままに大声で叫ぶ。

その直後、アーサーは怒涛の如く押し寄せる大波に呆気なく呑み込まれた。

伝説の龍・グレイブルドラゴンの住処だった、二つの国をまたぐ大山脈。

そして今は、山脈の影も形も残らない平野と化した跡地。

そこから溢れ出る熱水の柱。

大地の切れ目から噴き出す水の柱は、外気に触れた瞬間に白い蒸気と化して世界を覆う。地下深くで熱された源泉は、場合によっては最高温度一〇〇度を超える。

そんな地獄の水の中を、

「おおおおおおおおおおああああああ……沁みんなあオイ……」

今にも溶けそうになっているアーサーが、呑気に流されていた。

声にならない快感の声はオッサンそのもの。器用に体をプカプカ浮かせ、少年はお湯の流れに身を任せる。

「あー効くなあー……。酒、肉、女、風呂、ベッド……まずは風呂、ゲットだ」

これに酒と肉を喰らいながら、両脇にマブい女でも抱えりや最高だ——とかなんとか、世迷い言を垂れながら目を開く。

五時間もこれを探し回ったせいとか、見ればとつくに夕日の時分。一面赤く染まった空が視界いっぱい広がっていた。ほんのりうっすら、夜になったら輝くであろう星の影

も見え始める。今夜はいつにも増して星空が美しく見える事だろう。

「はあ……いいなあ……」

こんなに幸せな気分はいつ以来だろう。特にここ最近は何れも失敗続きで、すっかり心が荒んでしまっていた。

でも……今となつてはそんな事も馬鹿らしく思える。

見ろ。この最高の風呂を。

これを成功と呼ぶなかつたら、この世に成功なんてただの一つも存在しない。

「最高に、楽しいゲームだった」

そう言つて、静かに目を閉じる。

幸せな気分と記憶に沈みながら、アーサーはゆつくりと体を漂わせる。

全身に余すところなく深い傷を刻み付けられた、その体を。

この時期、この惑星から見える星は全部で約三五〇万。

そのうち公的に名を付けられた星は精々数十個。その他は全て、男が勝手に名前を付けた。

しかし……それでもまだ全てじゃない。

今ある科学力を用いても、観測できるのはそれだけしかない。

男の理論が正しければ、惑星の外には、宇宙には、この世界には、一〇を何乗すればいいのかも分からないほどの星がひしめき合っている。そんな中の、たった三五〇万。なんて小さい。

自分は、自分のいるこの大地は、なんて小さく、なんて寂しい。

それに比べ、見ろ、あの広大な宇宙を。無限に広がる空間の奥行きを。支配できる未来など微塵も思い描けないほどに大き過ぎる、あの暗闇を。

小さい。

あれだけ執心した科学も、あれだけ憎んだ魔術も。

どうしようもなく、小さい。

「……ふん」

下らん感傷だ。科学者の男はそう切り捨てる。

ただ不思議と、悪い気はしなかった。

久しぶりの気分だった。何かに怒る事は何度もあったし、憎悪を募らせる事も数え切れないほどあった。でも、これは本当に久しぶりだ。ため息が出そうになるくらい、何かが下らなく感じるなんて。

この感情は、なんとという名前だったつけ。

——知らぬわ、そんなもの。

レオナルド・ダ・ヴィンチは地面に仰向けになつたまま、夕暮れの空を見上げていた。

太陽の傾きから察するに、あれから五時間くらい気を失っていたのか。

なんとも許し難い失敗だ。無駄な時間を過ごしてしまった。

五時間もあれば、次の科学兵器の案を三〇〇〇個は思い付けたというのに。

自分の事とはいえ、軽く怒りを覚えるほどの失敗だ。

「——ちっ」

目だけを動かし、力の入らない体を視界の端に捉えるレオナルド。

己の体を見て、「やはりそうか」と舌打ちをする。

ボロボロだった。

両腕は滅茶苦茶に折れ曲がり、大きく割れた腹からはいくつもの内臓が飛び出て、両足は丸めた紙クズをもう一度広げたみたいにくちゃぐちゃに平べったくなっている。

人間として機能できる最低限の形すら保っていない、その体。

にも拘らず、レオナルドは生きている。

本当なら死んでもおかしくない状態で、彼は当たり前のように息をしている。

原因と結果の結びつきに重きを置く『科学』からは、遠くかけ離れているように思える現象。

ならば、魔術？ それもあり得ない。

だからこれは——立派な『科学』。

「……実に下らん。よりにもよってこのタイミングで成就するか」

骨も神経も破壊されているはずの手には、それでもしつかりと一本の絵筆が握られていた。

男はそれを……一体どうやったのか、クイ、と少しだけ動かす。

次の瞬間だった。

時、間、が、巻、き、戻、る。

そうとしか表現できなかった。本当はもっと論理的な因果に基づいた現象なのだろうが、それを科学的な言葉にする手段が無かった。

それこそまさに時間を逆再生しているようだった。

複雑に折れ曲がった腕が、体から零れ落ちた内臓が、グチャグチャに潰された両足が、引き裂かれたゴミクズみたいな全身が、波の満ち引きの過程を早回しで見ているかのようなスピードで、元の形状を取り戻していく。

五秒も経たずに、男の体は五体満足に修復されていた。

いや、まだだ。

それだけじゃない。

「ふん」

実につまらなそうに、男は健全になった腕で大きく絵筆を振った。

まるで、見えない虚空のキャンバスに絵でも描くように。

直後だった。

意味不明な『何か』が起きた。

今度は男そのものの時間が巻き戻り始めた。

老いた男——その顔から、シワがどんどん消えていく。

蓄えた髭が徐々に顎の中へ引っ込んでいく。衰えた体のたるみは次第に引き締まり、年相応に歪んだ肌は張り艶を手にしていく。

意味が分からなかった。

何も分からなくとも、現実が現実だった。

「なにが世界最強だ。手に入れてしまえば下らんものだ」

簡単な一言があった。

糸に吊るされた人形のように、何の弾みもつけず男の体が独りでに立ち上がる。

そして、またしても男は絵筆を振るう。

自分の思い描く風景を、夜空というキャンバスに描くみたいに。

その時だった。

ザアアアアアアアア!! というさざ波のような音と共に、周囲の砂が勝手に舞い上がり、一斉に男の体へ纏わりつく。

よほど激しい攻撃を受けたのだろう。男の着ていた衣服は塵も残さず掻き消え、彼は完全無欠に素っ裸であった。

そんな彼を取り囲むように……どういふ原理で何が起きているのか、大量の砂が、まるで生物のように渦を巻く。

「やはり若い方が効果を發揮しやすい。脳機能も若返っているからか？ ……結論に至るには証拠が足りんな。検証の余地ありとしておこう」

男は絵筆を振るう。

もはや因果関係なんてぶつちぎっていた。

砂は、男の体に密着したかと思うと、一瞬にしてその色を変えた。

薄い茶色のような色から、瞬く間に黒へ。

変化したのは色だけではない。物質としての性質すらも。

男の体を包み込んだのは、もはや砂ではなかった。

それは紛れもない、黒く染まった『衣服』だ。

「道は一人では歩めんと言っただけ」

男が呟く。

違う。

今や彼は、『男』と言うよりも、

「ならば存分に歩かせてもらおうか。貴様の屍で築いた道をな」

黒一色の服で身を包んだ『少年』が、眉間に深いシワを刻みながらそう言った。

レオナルド・ダ・ヴィンチ。

魔術の対極。科学を極めた世界最強。

そんな人間が今、まさに真の意味での『対極』に足を踏み入れた。

何をしたのか分からなかった。一切の原理が不明だった。

時間そのものを巻き戻すようなその現象。果たしてそれは、どんな原因を突き詰めた

末の結果なのか。それを理解できる者が、この少年以外にこの世にいたのか。

因果。原因と結果。

その全てが理解不能。

すなわち『正体不明』。

かつて、神を殺した世界最強の魔術師が辿り着いた領域。

……アーサーとの最後の激突の時。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、最強の魔術師に成す術なく叩きのめされただけだったのか。

いや、彼は戦っていた。

絵筆一本を片手に、あの世界最強の魔術師へ追い縋ったのだ。彼には絵筆以外にもう一つ、最大の武器がある。

その卓越した頭脳。

真の天才とは、成長力も、吸収力も、発展力も、応用力も、全てが規格外の者の事を言う。

アーサーという最大規模の怪物と渡り合いながら、それでもレオナルドは思考し、理論を組み立て、絵筆一本から超常的な科学を身に付けた。

学習する教材などいくらでもあった。

アーサーの放つ魔術。そこから溢れる正体不明の攻撃。

だが正体不明と割り切るのは凡俗のやる事だ。

正体不明を、解析する。

ダメージの拡散具合は己の体で。

衝撃波は筆の柄で。

舞い散る粉塵の動きは絵筆をなぞるように想像しながら。

体の中に蓄積された痛みや傷の共通性を空中に筆でメモを取りながら。

魔術のタイミングや合図は五感を使い。

その現象が起きる前と起きた後の些細な違いをメモを見ながら。

空間の歪みは筆を使って即席で地面に数式を並べながら。

既存の数式で説明できない時は、独自の数字を開発した。

既存の文字で説明できない時は、独自の言語を生み出した。

既存の思考回路で考察できない時は、独自の思考回路を仮定した。

既存の精神構造で想像できない時は、独自の精神構造を想像して当て嵌めた。

そうやって、アーサーを相手に、耐え忍び、取り込み、学習し、そして手に入れた力

が

「先生!!」

その時だった。

大きな声が聞こえた。

レオナルドが声のした方を振り返ると、遙か遠くから、十人以上もの白衣を着た集団がコチラに向かって駆け寄ってきているのが見えた。

「先生！……無事でしたか！」

自分の組織した自然科学協会のメンバーだったと、レオナルドは遅れて気付く。

その中にいた、もやしのようなヒヨロ長の男が、少年へと時間を巻き戻した男に近寄ると、

「あ……あれ？」

一瞬、眉をひそめる。

「どうした。何を訝しんでいる」

「え、……いや……あの……」

ヒヨロ長の男は、いったい何が起きているのか分からないようだった。

目の前の少年を穴が開くほどじっと見つめ、やはり何も理解できなかったのか、不意に視線を逸らして、周りにいる他の科学者たちにも視線を配る。

しかし他の奴らもヒヨロ長の男の似たり寄ったりな反応だ。自分達が先生だと思つて駆け寄った男がまったく見覚えのない少年だったと知って、事態を呑み込めずに互い

に顔を見合わせている。

そもそも。

どうして自分達が、遠目とは言えこの少年を先生の男だと勘違いしてしまったのか、その理由も分からずに。

「……………えーつと……………」

迷った末に、ヒヨロ長の男は口を開く。

「ねえきみ、この辺に、ちよつと年を取った男の人、見てたりしないかな？」

「……………は？」

「すごく怖そうな顔をしてる人なんだけど……………あれー、おかしいな。絶対にこの辺りにいるはずなのに……………」

挙句の果てに……………答えが目の前にいるというのに周囲をキョロキョロ見渡し始めるヒヨロ長の男。

あまりに憐れ過ぎる己の部下達の姿に、レオナルドも頭を抱えそうになる。

シワの濃い眉間にさらにシワを寄せ、目頭を押さえ、「はあ……………」と重苦しいため息。そして。

彼は静かに、息を吸って、

「いの——」

思いつきり、解き放つ。

「愚か者がアア!!!」

もはや衝撃波が出るんじゃないかと思えるほどの怒号だった。

鼓膜を突き破るような突然の声。そして隠しても隠し切れない悪魔的な威圧感。それを真正面から浴びたヒヨロ長の男は、目の前の少年がレオナルド本人である事にも気が付かないまま「いひ!」と情けない声を上げ、思わず尻餅をつく。

レオナルドは、そんな男に絵筆の毛先を突き付けて、

「貴様あ!! そんなザマでよくもまあわたしの前にこのこの姿を現わせたものだ!!」
当然、ヒヨロ長の男は困惑の極みだった。

何が起こっているのか分からない様子で、表情を「？」で埋め尽くして行く。
それもそのはず。

なにせ全く見知らぬ少年から、慣れ親しんだ怒声を浴びせられているのだから。

「外から見える現実に囚われるな!! 万物の魂を! 自然科学の本質を見極めろと何度

言えば理解できるのだ！ アンドレア!!」

「ひっ！ な……なんで僕の名前……!!」

「まだ分からぬかあ!!」

視線だけで人を射殺してしまいそうな目がキラリと凶悪に光る。

それに完全に怯えたらしいヒョロ長の男、アンドレアは、尻餅をついたまま無意識に後ずさる。

「魔術の腕もない分際で魔術の世界に飛び込み！ 何も学べず挫折と墮落を繰り返していたゴミクズのような貴様を拾ってやったのはどこの誰だと思っている!! その根性を一から叩き直してやったのは!! 貴様の人生を救ってやったのは!! どこの誰か!!

言ってみろオオ!!」

「はっ、はいいいいいい！ 我らが師！ レオナルド先生です!!」

「貴様はあ!!」

「ひっ!」

絵に描いたような悪魔の形相のまま、レオナルドは、今度はアンドレアの隣にいた若い女性にも怒鳴り散らす。

「言え!! 奴隷市場に売られていた貴様を買ってやったのは!! 盗むか殺すか体売るかしか能の無かった貴様に道を授けたのは誰か!! 貴様はわたしに返しても返し切れ

ん恩があるはずだ!! 貴様の命を救ったのは!! 貴様の頼みを聞いてやったのは!

どこぞの悪徳富豪に買われた貴様の友を救ってやったのは!! 貴様の街の人身売買組織を丸ごとすべて叩き潰してやったのは!! 一体全体どこの誰だ!! 言ってみろ!!」

「れ、レオナルド・ダ・ヴィンチ先生です!!」

「そうだ!! ……なあ!？」

「バツ! と。」

別の方にも絵筆を向ける。

「忠告するぞ……まさか貴様らも答えられんわけはあるまい」

「っ!？」

「うっ!」

「あ、え……!」

答えられなければどうなるか分かってるな? ……みたいな。

正気を失った殺人鬼などより恐ろしく見開かれる少年の瞳に、その眼光に、睨まれた三人の男女は三者三葉の呻き。

そこには、周りの集団と比べて、肌の黒い男女がいた。

「この世からあらゆる差別を排除せんと!! 自らわたしの許を尋ねて来たのは貴様らだ!! それを受け入れたのは!! 貴様らを縛る町も国もすべて灰も残らず消し飛ばし!!

貴様らに自由の道を与えたのはどの誰か!! その口で答えてみる!!」

「レオナルド・ダ・ヴィンチ先生です!!!」

「そうだ!! 分かったか貴様ら!! 答えろ!! 答えられねば全員!! 今すぐこの場で叩き潰されると思え!! 言え!! わたしは誰だ!!」

——レオナルド・ダ・ヴィンチ先生です
!!!!!!!

もはや九割がた、その顔面の恐ろしさと狂氣的な脅しに屈した形で、未だに状況が呑み込めていない表情の白衣の集団が一斉に少年の名を口にする。

ようやく得られた正解に、それでもレオナルドは口をひん曲げた。

本当に、どうもこいつも。

コチラから問いかけなければ答えも見つけられないのか。

「なんとという体たらくだ! 万物の真理を見極めるはずの科学者が先入観を植え付けられ! その奥にある絶対の真実に目を向ける事も叶わんとは!! 手塩に掛けて育てて来たと思つたが……ふん!! どうやら失敗だったようだ!! また一から育て直しだ!!」

それでも、『見捨てる』や『見放す』という選択肢が最初から頭のない辺りが、レオナルド・ダ・ヴィンチという人間の生き様なのか。

「自ら問いを生み出す事もできん凡俗極まるアンドレアよ、ならばわたしの問いに答え
てみる」

「は、はい！」

「まずは立てええええ!!!」

「はいいいいいいい!!!」

尻餅をついたヒョロ長の男は、叫ばれるままにピーン！と直立。

並みの兵士よりも洗練された姿勢を体現してみせる。

「貴様らが生きている事などつくに想定済みだ！ 問題は『天の梯子』だ！ あれはど
うなっている！」

「は、はい！ 我々がアーサーの攻撃を受けた直後に、カルドキアの外壁もろとも蒸発し
てしまったと思われませう！ はい！」

尋ねはしたが、一応は想定内の答えだった。

その破片だけでも残っていれば利用価値はあると思ったが……しかし無いものは仕
方ない。また一から作り直すか、もしくは別の兵器を開発するしかない。

「ふん、ならばいい。コチラも地殻兵器、重力兵器、化学兵器の全てを失った。また一か
らやり直しだ」

「い、一から……ですか」

「なぜ絶望している、アンドレア。我々科学者にとっては日常茶飯事のはずだ」
結果の観測。原因の解明。

その因果関係を何度も試行し、実験と検証を繰り返し、数え切れない失敗を重ねて前進し、最後に一粒の成功を掴み取る。そしてその成功が、さらなる課題をもたらず。

ゴールなどない。常に進み続けなければならない『道』。

自然科学とは、本来そういうものだ。

「ただ……この言い回しは不服の極みだが、まさに不幸中の幸いだ。わたしはわたしで新たな『科学』を手に入れた。どうやら、前進するものはあつたらしい」

とても下らんものだったがな、と。

つまらなそうに言つて、レオナルドは絵筆を振るう。

その直後だ。

正体不明の『何か』が起きた。

大地が、土が、砂が、空気が、空気中に漂う分子が、空間が、重力が、この世界のありとあらゆる『存在』が、その性質を瞬く間に変えていった。

たとえるならそれは、あらゆる物質を一度粒子レベルで分解し、自分好みに再構成す

る行為。

その現象を、『粒子』なんて下らない単位ではなく。

『概念』レベルで実現する。

ここまで来れば、正体不明というより意味不明だった。

「おつ、うお!？」

「きゃあ!？」

あちこちから驚愕の声や悲鳴が上がる。

この程度で何を騒いでいるのかと、レオナルドは不愉快そうに顔をしかめる。

時間、が、巻、き、戻、る。

何もなかった大地が捲れ上がり、複雑な凹凸を形作っていく。

ズアア!! と生物のように巻き上げられた砂嵐が概念レベルでその性質を変化させ、

レンガや金属に姿を変えていく。

何もない虚空に突然、ボボボボボボボボボボボボボボボボボボ!! と木の板や

石畳が生み出されていく。

それらが、まるで立体パズルのように組み上げられていく。

レオナルドの手に入れた、世界最強の科学。

その光景を目にした科学者たちは、まるで神話の中に描かれる世界創造の瞬間に立ち会っているような錯覚に襲われていた。

砂の塊が、瑞々しい果物に変質する。

捲れ上がった地面が、複雑な構造を持つ建築物へと姿を変える。

ジワリと空間に浮かび上がって来るように、何もない場所から『巨大な外壁』が出現する。

そして、気が付いた頃には。

消滅したはずの要塞都市カルドキアが、元の姿を取り戻していた。

「……………」
啞然があつた。

沈黙があつた。

寸分の狂いもなく再現された大都市のど真ん中に佇む科学者たちは、目の前で何が起きたのかも分からないみたいに口を「あ」の形に開けたまま、呆然と突っ立っていた。だつて意味が分からない。

何も無かつた空間から、突然一つの都市が出来上がってしまったのだ。

それもこんなに早く。あつさり。

何をしたのかも、どんな原理を用いたのかも理解できない謎の現象。

解明の糸口すら見えない、真正正銘の『正体不明』。

科学と言われても魔術と言われても、どっちを言われても納得できないような次元。それほどの事象を……絵筆一本、振るっただけで？

こんなの、黙り込む以外に何をしろと？

「ふん」

思考停止に陥る科学者の中でただ一人、黒づくめの少年だけは、つまらなそうに鼻を鳴らす。

「可能なのは精々、単純構造物の生成と概念操作、加えて、現存する物質・物体の時間干渉的な復元のみか。……下らん、手にしてみればこんなものか」

無から有を生み出す力。

アーサーとは正反対の方向性を見出した『正体不明』。

奴を『究極の破壊』と定義するならば、その対極。

『究極の創造』。

それこそまさに、世界を形作ったと神話で語られる『神』の領域。

「都市一つを創り出すだけで全力とは……。未熟も甚だしい、これでは奴の足元にも及

ぶまこ」

アーサーは、カルドキアを丸ごと破壊してなお余裕があった。小さい子供の遊びに付き合っている大人のような気楽さがあった。

まずはそのレベルにまでこの技術を鍛え上げなければ、再戦など夢のまた夢だ。

たった一人で不満を抱えながら、これほどの世界に足を踏み入れてなお、レオナルドは不満そうに眉間にシワを寄せる。

試しに、もう一度だけ筆を振るう。

今度は都市を創造するのではない。そんな簡単なもの、今となつてはいくらでも生み出せる。

しかし、問題なのは。

「……………」

筆を振るった瞬間、またしても『正体不明』が起きた。

空間が捻じれ、砂が巻き上がり、物質が変化し、空気中の粒子も強引に掻き混ぜられ、無から有を作り上げる。

ガチャガチャガチャガチャ!! と、今度は硬い音が聞こえた。

そうして、虚空から生み出された物を見る。

そこには、

「……………やはり失敗か」

光学兵器『天の梯子』が立っていた。

人間大の鏡を連想させる姿。光を集束させる結晶を何百も敷き詰めて製造した、対アーサーの決戦兵器。聖なる太陽の光を絶大な攻撃に変える、ある意味では天罰が下るような不敬の代物。

———の、失敗作があった。

綺麗な楕円ではなく、子供の落書きのように歪な円形。

そこに敷き詰められている結晶も、まるで何の光も取り込まないような粗悪品。ほとんどただの岩石だ。

実際に『天の梯子』に使われていたのは、全て特殊な環境下でしか生成されない希少な結晶だ。当然、自然科学の神秘がふんだんに盛り込まれている。

「あれほど複雑な物体はまだ生み出せんか。……まあいい、これからだ」
むしろ、この程度で創造できてしまった方が興奮めだ。

この世界の神秘は、こんな付け焼刃で再現できるほど甘くない。

「さあ行くぞ貴様ら。立ち止まっている暇はない。こうしている内にも魔術の手は世界中に拡散されている。それを根こそぎ叩き潰し、否定してやる。いいな」

まずはそこからだ。男の人生はそこから始まっている。

だから今日も、その繰り返しだ。

いつも通りの繰り返し。

そして何度も繰り返す事で前に進み、常識を覆すのが自然科学の醍醐味だ。
立ち止まっている場合じゃない。

進み続けなければならない。

なのに、

「……………」

「おい、何をしている」

レオナルドがふと後ろを振り返ると。

そこには、彼の後ろを付いて行こうともせず、その場に棒立ちのまま動けずにいる、科学者の集団があった。

「……………」

アンドレアが口を開く。

「大変失礼ながら、申し上げたい事が……………あるのですが……………」

「なんだ。言ってみろ」

「……………あの……………わ、」

言いつらそうな顔で、恐る恐る、

「我々の力など……………不要、なのでは」

「——なに？」

「もう我々には、先生がたつた今何をされたのかまるで理解ができません。これが……その……本当に科学なのかどうかすら、えつと……微塵も分からないのです。未だに、ちよつと……あ、……その、困惑、というか……はい」

レオナルドは、彼が何を言いたいのか分からない顔で、

「何が言いたい。要件は簡潔に述べろ」

「これほど、その、我々とレオナルド先生に差が……はい、差があつて、先生と、私達に……あの……必要なのでしょうか」

「何がだ。ハッキリ言え」

「私達が」

その答えに、

「今、レオナルド先生には……レオナルド先生の下で研究を重ねても、なんと、言いますか……」

「……………」

「何一つ、お役に立てないのでは、ないかと……私達が……」

レオナルドは、アンドレアのその言葉に、むしろ衝撃を受けていた。

衝撃的に、失望していた。

本当にコイツらは……一体どこで育成を失敗したのだろう。シワを刻み過ぎて疲れ
てきた眉間を指先で揉みほぐす。

「そこからか……？ 貴様らのような考える脳のない奴等には、そこから話さねばなら
んのか？」

この愚者共は本当に分からないのか？

本当に、こんな簡単な事も？

「——わたしはいずれ、奴と同じ場所に辿り着く」

レオナルドの言葉に、皆が顔を上げてしっかり耳に入れる。

そういう風に教育している。

「^{アーサー}奴と同じ領域だ。奴を殺すには、奴と同じ土俵に立たねばならん。それは理解してい
るな」

「はい」

「そうなれば貴様らなんぞ雑兵にも満たぬぞ。貴様らの歩幅も、歩む速度も、もはや地を
這うアりに等しいからだ。役に立つだど？ 笑わせるつもりか凡愚共が。貴様らがわ
たしの役に立った事など一度たりともありはしない。貴様らの『役』なんぞ、微塵も期
待していない」

「……はい」

だから。

レオナルドは、まるで容赦をせずに、断言する。

「貴様らに期待しているのは『役』ではない。わたしの『後押し』だ」

その言葉に。

今度は、科学者たちが衝撃を受ける番だった。

「アリの歩幅、アリの一步、ひどく小さくつまらん。だがそれが必要なのだ」

絵筆の先を、己の部下たちに突き付けながら。

彼らを睨むその凶悪な瞳に、溢れんばかりの光を宿しながら。

「同じ場所、同じ領域、同じ歩幅、同じ速度を手に入れた者が並び立ったなら、後の一押しはそのアリの一步だ。どれだけ小さかろうが、どれだけ微々たるものであるが、同列に並び立った者が勝つにはアリ一步分の前進が必要なのだ。誤差の範囲だろうが何だろうが関係ない。一步でも一ミリでも前に出た者が勝ちだ」

言う。

言い切る。

「何を言っているのか分かるか、凡俗共。——その一步が貴様らだ」

この世に、無駄なものなどありはしない。

すべてが歯車のように噛み合い、影響し合つて成り立っている。

存在の小ささ、大きさ——そんなもの、なんだという。

森羅万象が等しく世界を回す歯車であるなら、そこには貧富も大小もない。

たった一人の魔術師が、広大な青空を黒く染め上げる事もあれば。

青空という広大な景色が、たった一人の少年の人生を変える事もある。

「役に立たないだと？ それがどうした。貴様らがわたしの役に立とうが立つまいが関係あるものか！ この世界の奇跡は！ 常に！ こうして！ 誰の都合も問わずに回っているというのに！」

だから、役に立つかどうかなど関係ない。

誰かの歯車になれるかどうか、そんなもの関係ない。

だって、すべてが等しく奇跡なのだ。

奇跡の歯車なのだ。

「今はこんな説教をする時間すらも惜しい！ 何としてでも！ 一歩でも奴より先を行くのだ！」

レオナルドはそれだけ叫び、踵を返す。

もはや、彼らが付いて来るかどうか、疑う余地も無かった。

「あ、あの……！」

「話を聞いていなかっただのかアンドレア！ 立ち止まっている時間すら惜しいと言ったはずだ！」

「失礼しました！ いえ、しかしその……あ、それでは……我々は」

言いにくそうに。

そして、言つて欲しそうに。

「我々はまだ、先生に、ついでに行つてもよろしいのでしょうか！」

「進歩のない愚か者が！ とつくに結論が出たものをいつまでそう問い続けるつもりだ！」

もはやレオナルドは振り向かない。

前だけを見て、叫んだ。

「わたしについて来い、世界を愛する科学者共！！ 頂点の景色を見せてやる！！」

当たり前のような宣言があつた。

その言葉に、はい!!!! という大きな返事があつた。

よく訓練された兵隊のように、少年を先頭にズラリと巨大な列ができる。

しかし彼らは兵士ではない。彼らは『科学者』と呼ばれる、世界の奇跡を愛し、そして一人の男に救われた者達であつた。

その先頭にいるのは、一人の最強。

世界にひしめく奇跡を愛し、魔術を憎んだ一人の少年。

「待っている、アーサー・ペンドラゴン」

少年は。

レオナルド・ダ・ヴィンチは。

「貴様は、わたし達が殺してやる!!」

ここに一人、新たな世界最強が誕生した。

その胸に、強大な憎悪を燃え上がらせ、己の身をも燃やし尽くすほどの怒りを秘めた……しかしそれと同じくらい、世界を愛し、奇跡を愛し、人を愛した少年。

そんな最強が、一本の絵筆を片手に。

誰よりも大きく、何よりも力強く。

世界を揺さ振るような一歩を踏み出す。

一人の世界最強の物語が、今、ようやく動き出す。

11 【普通の幸せ】

多分それが、普通の幸せだった。

田舎の貧しい農家に生まれ、農民として生活して。

狭い世界で満足して、外の世界なんて見ようとも思わなくて。

毎日毎日同じ事を繰り返して、その日を生きるだけで精一杯で。

そして、そんな事をしている人生に何の疑問も持たず……最後は誰にも知られずに、ひっそり勝手に一生を終える。

退屈な人生だろうか。

でも、幸せだったのは確かなのだ。

お母さんがいて、お父さんがいて、お兄ちゃんがいて、お姉ちゃんがいて。

知り合いのオジサンがいて、いつもお菓子を分けてくれるオバさんがいて、よくうちに迷い込む野良猫がいて。

そういう何気ない毎日が、自分にとっては普通の幸せだった。

お母さんはいつも、美味しいご飯を作ってくれて。
お父さんはいつも、厳しくも優しく躡けてくれて。

お兄ちゃんやお姉ちゃんとはいつも、遊んで笑って同じご飯を食べて、そして時々思いつ切り喧嘩をして……でもやっぱり遊んで、同じご飯を食べて。

オジさんはいつも、楽しそうに笑いかけてくれて。

オバさんはいつも、自分たちが楽しそうにしている事を喜んでくれて。
時々迷い込む野良猫はいつも、構って欲しそうにすり寄って来て。

そういう日常を繰り返す事が、何よりかけがえのない普通の幸せだった。
恵まれてはいなかった。

自分の体はいつも泥まみれだったし、お腹いっぱいにご飯を食べた事もない。家はとも狭かったし、冬は凍り付くほど寒かった。

でも、自分の境遇を嫌だと思ふ事もなかった。

ここが普通の幸せだったから。普通の幸せがあるのなら、それでよかったから。
お母さんと。お父さんと。お兄ちゃんと。お姉ちゃんと。オジさんと。オバさんと。

野良猫と。

笑って、喜んで、楽しめれば、それでよかった。

特別なものなんていらぬ。

今が今のままで続いてくれれば、それが幸せだったのだ。

たつたそれだけが、ずっとずっと、続いてくれれば。

ずっと。

いつまでも。

いつかこの体が、死んで腐つて土に還るまで、ずっと、いつまでも。

続いて欲しかっただけだった。

お母さんが、そこら辺のゴキブリやらムカデやら蜘蛛やら動物の死骸やら腐った野菜のクズやら川に溜まった泥やらを掻き混ぜたグチャグチャしたご飯を作ってくれて。

お父さんが、叩いて殴つて蹴つて焼いて刺して抉つて潰して捻じつて捲つて剥いで抜いて裂いて割つて劈つて弄んで罵つて躡けてくれて。

お兄ちゃんとお姉ちゃんと、狭くて暗い部屋の中で、叫んで、喚いて、少ないご飯を奪い合うために殺し合つて、引き千切り合つて、ご飯が足りない時は相手を食べ合つて。

キラキラした服を着たオジさんが、自分たちが殺し合ってるのを見て楽しそうに笑って

綺麗なドレスを着たオバさんが、家から持ってきた生ゴミを食べさせてくれて。

お腹を空かせた大きな魔獣が、自分達を食べるために襲い掛かって来て。

笑って、喜んで、楽しめれば、それでよかったのだ。

そんな生活が。

そんな時間が。

そんな普通の幸せが。

ずっと。

ずっとずっとずっと。

ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっと

続いてくれれば、それでよかった。

だから。

*
*
*

親も、駄々をこねたら何でも言う事を聞いてくれる父親も、自分が望んだ事はなんでもやってくれる執事も。

来ない。いない。

誰も。

何も。

「いい……いい……いい……いい……いい……!!」

これだけ涙を流しても、これだけ血を流しても、今ここには、自分一人。

自分は、どうしようもなく一人。

何もできない自分が、たった一人。

そんな絶望的な状況の中。

さらなる絶望が、森の奥から迫り来る。

「オジさんどおしたの？」

幼い子供の声だった。

無垢で無邪気で、純粋な声。

こんな深い森の中から響くには、あまりに異質過ぎるほどの。

だから、なのか。

だけど、なのか。

「ひ」

小太りの男には。

その声が、自分の命を喰りに来る悪魔の鳴き声に聞こえていた。

「オジさん？　ないてるの？　どおして？　いたい？」

森の奥。

魔術が飛んで来た方角から、『誰か』が近付いて来る。

ベチャベチャと、ぬかるんだ泥の中を、小さい足でゆつくりと。

「……だめだよ。だめ……ないたらね、たのしくないから」

暗闇の奥から、『声の主』が現れる。

男の視界に、『悪魔』の姿が映る。

「おかあさんね、おとうさんもね、みんな、うごかなくなっちゃった。だからね、でね、もつとあそぼっていったのに、ねちやつたんだもん。おきてつてしたのに、おきなくて……。おにいちゃんと、おねえちゃんも、どっかいつちやつてね……。だから……。つま

んないの」

それは、五、六歳程度の幼い少年だった。

骨に皮が張り付いているだけの痩せ細った全身と、顔から爪先までの全てを染める黒い血の跡さえなければ、ただの子供に見えた。

「オバさんもね、どっかいつちやった」

髪は地面に届くくらいに伸びていて、服は服の体を成さないほどにボロボロで。

手足の先は、爪も皮膚も剥がれ落ちて中身が剥き出しになって。

「オバさんもね、なんかいなくなっちゃったの。だから、もうオジさんしかいなくて」

全身に、叩かれた痕が、殴られた痕が、蹴られた痕が、焼かれた痕が、刺された痕が、抉られた痕が、潰された痕が、捻じられた痕が、捲られた痕が、剥がれた痕が、抜かれた痕が、裂かれた痕が、割られた痕が、くつきりと残る。

「オジさん、あそんで」

そんな……幼い子供が。

そんな、小さい男の子が。

全長五メートルもある大型魔獣の、真つ二つに引き裂かれた上半身だけを掴んで、ズルズル引き摺りながら現れた。

魔術協会が行っていた、人工的に世界最強の魔術師を作り上げる事を目的とした『人体実験』。

彼らは『蟲毒』と呼んでいた。

その辺の町から攫つて来た生後間もない赤子を、六年に渡つて洗脳教育と魔術教育を施し、ある時期に狭い監獄の中で子供達を殺し合わせ、最後に残つた一人を最強とする。

それを三〇セット。

そして各セットで生き残つた最強の三〇人をさらに殺し合わせ、最終的に残つた一人が、世界最強たりうる能力を發揮できるのか。それを確かめるための実験。

——絶対の安心と安全を謳っていた実験だった。

入念に行われる洗脳と、決して壊れない魔術結界を張つた独房での殺し合い。子供達には殺し合いをしている自覚は無い。それどころか、自分達の境遇すらも正しく認識できていない。

彼らには、『自分たちはとある農家の子供で、毎日畑を耕して暮らしている』という洗脳を施している。

から」

全身を傷で覆う少年は、人形のように大事に握っていたはずの魔獣の死体を、いい加減な調子でその辺に放り捨てた。

もう動かなくなった『野良猫』には、一切の興味も無い。
今は、もっと。

目の前に。

「オジさん。……オジさん」

面白いものがある。

「わらって?」

悪魔は、

「よろこんでる?」

少年は、

「たのしい?」

何百人という子供の魔術師達の殺し合い。

そんな地獄の中で、たった一人の頂点となった少年は。

「ぼくはたのしいよ」

この世の全てを燃やし尽くすような赤い瞳を輝かせて、楽しそうに笑っていた。

*
*
*

「あれ」

若い少年は一人、

「……あれ？」

森を丸ごと一つ消し飛ばした爆心地で、地面の染みとなって跡形もなくなったオジさんの顔を思い浮かべながら、小さく呟いた。

12 【最強になった者達へ】

種を撒こう。

種を撒いて、土を盛って、水をやって育てよう。

野菜はそうやって育てるのだ。

お父さんが教えてくれた。種を撒いて、土をかぶせて、水をやれば、いつか野菜がニョキニョキと、畑いっぱい顔を出すらしい。

だからたくさん種を撒いて、たくさん水を飲ませて、いっぱい野菜を育てよう。

したら自分も野菜をいっぱい食べて、元気になれる。

元気になってまた遊べる。

だから、種を撒こう。

「まいたら、また、でてきてくれる？」

種を撒けば、何度でも、何度でも、会いに来てくれるのだろうか。

遊んで壊しちやっても、食べて消しちやっても、種さえ撒けば、また、いつか、土の中から顔を出して、自分の前に現れてくれるのだろうか。

もしそうだったら……どんなに楽しいだろう。

壊しても、壊しても、壊しても、壊しても、壊しても、壊しても。

食べても、食べても、食べても、食べても、食べても、食べても。

土に埋めて、水をやつて、食べ物をあげれば、また一緒に――

「ほんと、あそんでくれる？」

失敗しても大丈夫。

だって、またやり直せばいいのだから。

オモチャが動かなくなっただって大丈夫。

だって、地面に埋めればまた生えてくるのだから。

何度失敗したって大丈夫。何回壊したって大丈夫。

お父さんが教えてくれた。

動かなくなっただお兄ちゃんやお姉ちゃんを地面に埋めながら、お父さんが教えてくれた。

動かなくなっただ人達も、地面に埋めて、水をあげれば、野菜のように何度でも、会いに来てくれるのだ。

ご飯を作ってくれなくなっただお母さんも。寝かせてくれなくなっただお父さんも。遊ん

でくれなくなつたお兄ちゃんも。喧嘩できなくなつたお姉ちゃんも。消えたオバさんも。地面の染みになつていなくなつたオジさんも。二つに割れた野良猫も。

優しく地面に埋めて、水とご飯をあげれば、また一緒に遊んでくれるはずだ。

だから今日も少年は、自由気ままに世界を歩く。

……たまたま通りかかった町で、危うく馬車に轢かれそうになつた。驚いて馬車を粉々にして、その勢いのまま町一つを住人ごと粉々にしてしまつた。

でも大丈夫。バラバラの肉片を、一つ残らず丁寧に地面に埋めれば、また生えてくるだろう。

……騒ぎを聞きつけた『勇者一行』と名乗る人達が襲い掛かつて来た。すごく強くて、すごく楽しくて、いっぱい遊んでいたらつい『勇者』達グチャグチャの肉団子に固めてしまつた。

でも大丈夫。種にしては大き過ぎるから、近くの山を一つ切り崩して、その下に埋めよう。

……山一つを崩した事で、住処を奪われた魔獣の大群が押し寄せて来た。我を忘れてじゃれついていたら、いつの間にか血と肉だけがそこら中に広がっていた。

でも大丈夫。地盤ごと大地をひっくり返して、血も肉も地中に埋めれば、もつともつとたくさんの魔獣達が生えてくるはずだから。

だから、大丈夫。

遊んで欲しくて街中の子供達を呼んで集めて生きたまま全員の全身を引き千切つても。

襲つて来た『勇者』や『騎士』や『剣聖』や『召喚士』を爆ぜ飛ばしても。

小石に躓いて転んで痛かったから、癩癩を起こして王都を押し潰しても。

人間の体に興味が湧いて、立ち寄った村の人達皆を綺麗に骨と肉に解体しても。

海に向こう側に行きたかったから、海を地面で埋め立てても。

暑い国に来たから、人も動物も魔獣も巻き込んで全土を凍り付かせても。

雲を食べてみたかったから、山や大地を何重にも重ねて天まで届く階段を作り、その

過程でいくつかの町や村を住民ごと潰してしまつても。

大丈夫。

皆、しっかりと地面に埋めて、水をあげて、肥料をあげればまた生まれってくる。

そしてらもう一度、遊んでくれる。何回だつて遊んでくれる。

お母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも、オジさんも、オバさんも、皆

しっかりと地面に埋めて、水をあげた。

お母さん達だって、もう一度遊んでくれるはずだ。
もっともつと遊んでくれるはずだ。

笑おう。

喜ぼう。

楽しもう。

そうしていつかまた。

もう一度、一緒に。

皆で。

「最強になつたくらいで幸せになれる訳がねえと思わねエか？」

背後から聞こえて来た『誰か』の声に、思わず少年は顔を上げた。

おそらくその時代で、最も栄えていたはずの大都市。

しかし今では見る影もなく、建築物は薙ぎ倒され、大地は捲れ上がり、炎が揺らめき、そして死んだ肉片と、黒く乾いた血の海がどこまでも広がる地獄と化した、その凄惨な景色の中。

殺した人間の死肉を、少年が、全て手作業で地面に埋めていた時の事だった。

「最強になつた事もねえ奴らが、こぞツて勝手にはやし立てて、勝手に夢を見てやがる。……なれる訳がねえ、最強になつたツて、幸せになんか。なあ？」

凶暴に響く、荒々しい口調。

しかし意外にも、その声の正体は華奢な『少女』だった。

全体的に線が細い身体付きと、それを覆い隠すような黒いマント。

ツバがやけに大きく、上に尖つた特徴的な黒い帽子をかぶり、その中から銀色に輝く長い髪が膝下まで流れる。

決して目を見張るような姿ではなかつたはずなのに。

なぜだか少年は、その少女から視線を外す事ができなかつた。

「どうだい少年」

黒いマントを羽織り、黒い帽子をかぶる少女は、

「アンタは幸せか？」

何を恐れる様子もなく、少年へと歩み寄る。

幾千億の肉片と、一面の血の海を、少女は敬意を込めて踏みつけながら。

「アタシにゃあ、ひどくつまんなそうに見えッけど」

少年の目の前に立った少女は、しゃがんで彼と目線を合わせる。

そうやって……少女はちよつとだけ、楽しそうに笑うと、

「で、何してんだアンタ」

黒い帽子のツバの奥から。

全てを呑み込むような青い瞳を輝かせて、そう尋ねた。

「……………」

尋ねられて、問われて。

少年は。

「……………うめてるの」

不思議と、その質問に素直に答えていた。

目の前の少女は、一体誰なのか。何者なのか。どこから来たのか。なんでここにいる

のか。

そういう当たり前の疑問は、なぜか浮かんでこなかった。

「じめんにね、うめるの」

「何を」

「たね」

種エ？ と不思議そうに首を傾げる少女に、少年は小さく頷く。

「おとうさんがいつてたの。たねをじめんにうめると、たくさんやさいができるんだつて」

グチャグチャになった、元々は体のどの部位だったのかもよく分からなくなった肉塊を、少年は手作業で掘った穴の中に放り込みながら、

「だから、みんなうめるの」

「埋めてどうする」

「うめるとね、たぶん、またでてくるから」

「誰が」

「みんなが」

穴を埋めて、パンパン、と上から土を叩く。

「みんなが、もつといっぱい、やさいみたいにね。いっぱいじめんからでてくるの。そし

「たらまたね、あそんでくれるの」

子供じみた発想だった。

しかし、その子供じみた発想によって引き起こされる事態は地獄に等しい。

「おかあさんもね、おとうさんも、おにいちゃんも、おねえちゃんも、オジさんも、オバさんも、ねこも、みんななくなっちゃったから」

「……………」

「ぼくとあそぶとね、みんなどつかいって、きえちやうの。でも、ぼく、またあそびたくて。だからこれ、うめるの。うめたらまたあそべるもん。またあそんでくれるんだよ」

だから、ずっと歩き続けた。

また遊んでくれる人が現れるまで、いつか地面の中から消えてしまった人達が再び顔を出してくれるまで、いつまでだって歩き続けた。

振り返りもしなかった。

新しいお母さんと、新しいお父さんと、新しい兄弟と、新しいオジさんと、新しいオバさんと、新しい猫に会いたくて。

新しい村に、新しい町に、新しい都市に、新しい国に、足を運んで。

そこで出会う人達と、遊びたくて。

遊んで欲しくて、進み続けた。

いつか世界の端に辿り着いたら、もう一回、来た道に戻るのだ。

その頃にはとつくに、消えた人達が地面からニヨキニヨキ生えてくるだろう。そうしたらまた遊んでくれるに違いない。そう信じて、ずっとずっと前に進み続けて来た。

遊んで壊れちゃったら、地面に埋めて水をやれば、また生えて来る。

ずっと遊んでいられる。ずっと遊んでくれる。

笑って、喜んで、楽しんで、幸せになれる。

だから。

「だからうめるの」

こうすればまた、遊んでくれるから。

また、遊びたいから。

——そう答える少年に、

「.....」

黒い帽子の少女は、何を思っていたのだろう。

あまりに純粋で、それゆえに悍ましい。幼い子供の無垢さと無邪気さで、町も国も滅ぼす力を振るう悪魔の言葉。

それを聞いた少女は、

「じゃあアンタ」

楽しそうに笑っていた。

「出て来なかっただらどうすんだよ」

「……………え？」

少女から放たれた予想外の言葉に、思わず少年は訊き返していた。

それも構わずに、少女は続ける。

「国を三つ。都市は一五、そこそこの町を数百。小せエ村までは分かんねえな。山も海も吹き飛ばしてっから、知らねえうちに魔獣だッて何百何千逝ッてんだろ」

「……………？」

「アンタが壊したもんだ」

しッかり見てたぜ？ 面白そうだッたからな、と。

少女は、意味不明な事を言いながら、

「たツくさん遊んだなア。いッぱい遊んでもらったなア。…………でも、遊んでると壊れちまう」

「うん」

「つまんねエし退屈だろ。もツと遊びてエだろ。もツと遊んで欲しいだろ」

「……………うん」

「でも良かッたじゃねエか。いッぱい遊んで壊しちまッても、地面に埋めりゃあニヨキ

「ニヨキ生えてくんだろ？」

「うん」

「それがぜエーんぶ嘘だツたらどオだよ」

彼女はやっぱり、笑っていた。

「地面に埋めて、水やツて肥料やツて、それでも実は新しいお父さんもお母さんも出て来ねエなら……アンタ、どう思う」

「……………」

考えた事もなかった可能性に、少年の口は堅く結ばれる。

——全部、嘘だったら？

壊れたものを地面に埋めても、また新しくなつて生えて来ないとしたら？

一度壊れてしまったものが、もう二度とも戻つて来ないのだとしたら？

「……………うそ？」

「そうだ」

「……………いなくなつても、また、あそんで——」

「くれねエとしたら？」

「だって、おとうさんいつてたよ？ たねをうめたら、みんながね、いつばいでくるつて」

「そうじゃなかつたらアンタはどうする。壊れたモンは、壊したモンは、何度埋めようが水をやろうが、もう二度と会えねエとしたら」

「……………」

「もう二度と、遊んでももらえねエとしたら？」

それは。

もしもそうだとしたら、自分は――

「……………」

どう思うだろう……………なんて、もはや考えるまでもなかつた。

そもそも彼がひたすら前へ前へと歩き続けて来たのは、『それ』を味わいたくなかつたからだ。

遊びたくても遊べない。遊んで欲しくても遊んでくれない。

そんなの。

「……………つまんない」

つまらなくて、面白くなくて、楽しくなくて……………退屈じゃないか。

遊びたくてたまらないのに、遊んで欲しくてたまらないのに。

こーやって、何度も遊んで、何度も壊して、そのたびに遊んでくれるものが消えていつて、消えたものは二度と帰らず、二度と戻って来ず、二度と遊んでくれず。

そうやって、永遠に減っていくだけなのだとしたら。
そんなの、つまらないじゃないか。

「……つまんねエか」

少年の答えに、少女の笑みがさらに深まる。

「悲しいでも何でもなく、つまんねエツてか」

くくく、と少女は小さく肩を震わせて笑う。

多分その答えが決定的だった。

少女は何かに突き動かされるように立ち上がると、全てを呑み込む青の瞳で少年を上から見下ろし、

「はんッ、上等だ!」

豪快に、痛快に、愉快に笑った。

「アンタ、名前は?」

「なまえ……?」

「名前だよ、あんだろ何か。……ねエのか?　じゃあアタシが付けてやるけど」

言われて少年は、記憶の中を探す。

あの頃——お母さん達と過ごしていたあの頃。

自分は、なんと呼ばれていたっけ。

「……アーサー」

「ん？」

「ぼくのなまえ……おとうさんがつけてくれたの。アーサー」

「アーサー……アーサーだな。よく分からねエがいい名だ、気に入った。気に入ったついでにアタシの名前も覚えろ」

否応なしだった。

勝手に相手の名前を訊き、勝手に気に入り、そして勝手に命令を下した少女は、もはや相手が断る隙も与えず、

「マーリンだ」

自分の名を告げる。

「マーリン・ペンドラゴン。……どうだ、カッケエ名前してんだろ」

「……………」

「特にペンドラゴンって部分だな、ここが超絶シビれるわけよ。さらにそんな中でも『ドラゴン』って響き、これが良い。アタシのとびっきりお気に入りの名前だ。気に入り過ぎて魔獣の一種に同じ名前付けちゃった」

「……………」

聞いてもいないのに勝手にペラペラと喋り始める少女に、少年は小さく首を傾げてい

た。

それを見て、マーリンと名乗る少女は「かーっ！」と変な声で唸る。「ガキにやあこのカツコ良さが分かんねえか！」と。

「ま、どうでもいい。これから嫌でも知る事になる」

そう言うときマーリンは、自分がかぶっていたツバの大きな黒の帽子を脱いで、

「わ……っ」

アーサーの頭にかぶせてやる。

しかし幼い少年には大き過ぎたらしい。帽子に目を塞がれてしまった少年は、ちよつとだけ驚いたような声を上げた。

帽子を少し上げて、少女の顔を見上げる。

彼女は……マーリンは、やっぱり笑っていた。

「アタシについて来い、アーサー」

大地に太い根を張る大樹よりもお力強く、言う。

「アンタに魔術を教えてやる」

おそらく……が、運命の始発点。

「今のアンタも十分強エが、まだ真の強さにや届いてねエ。強エだけの半人前だ。可能性だつて十二分だ。アンタはもつと強くなる」

「……………つよく?」

「そうだ、強く。…………『強くなる』ツてのが分かんねえか? 簡単に言やアそーだなア

…………もツともーツと『楽しくなる』ツてこツた」

マーリンの適当な言葉に、アーサーは目を見開いた。

楽しくなる。もつと、もーつと、楽しくなる。

その心惹かれる響きに、アーサーは宝物を見つけたみたいに目を輝かせる。

「はんツ、それでいい」

マーリンは、アーサーのその瞳に、何かを認める。

何を認めたのかは、彼女以外の誰にも分からない。

それは、彼女の中にしかない絶対の価値基準。

「おし、そうと決まれば善は急げだ。行くぞアーサー、さツそく修行開始だ」

「え?」

「え? もクソもねエ。アンタはアタシについて来る。アタシはアンタを連れて行く。

これは決定事項だ」

一度決めた事は、絶対に覆さない。

相手が誰だろうが関係ない。自分の決めた事を無理やり押し通し、実現させる。仮に拒絶されても関係ない。その時は力づくで従わせる。

そういう『強さ』が、少女の声から滲むように伝わってくる。

「……どこにいくの？」

「どこでもいい。どオセこんな狭エ世界だ、どこにいたって同じだ」

「……………」

その時、アーサーは初めて、当たり前前の疑問が湧いた。

「おねえさん、どこから来たの？」

「ん」

問われたマーリンは、人差し指を上に向ける。

白い雲が一つも見えない、青一色の快晴の空を。

「……とりさんなの？」

「鳥じゃねエ、魔術師だ。強くなり過ぎて今じゃ『神様』なんて呼ばれてる」

空を見上げて、マーリンはつまらなそうにため息を吐く。

ただのため息だったはずなのに、その一息には、天を引きずり下ろすほどの重圧と深淵が含まれているような気がした。

「一人で勝手に魔術を作って、一人で勝手に魔術を極めて、一人で勝手に最強になって、一人で勝手に神様になつてみたが……手にしてみりゃあつまねエゴミクスだった」

彼女が何を話しているのかは、アーサーにはよく分からなかった。

マーリンだって、別に分からせる気は無かったのだろうが。

「喜怒哀楽も、栄枯盛衰も、最初の二〇〇〇年で味わい切った。つまんねエから魔術の『種』を世界中にばら撒いて、アタシを楽しませてくれる魔術師が生まれねエかと期待したが、結果は五〇〇年の待ちぼうけだ」

勝手に語るマーリンの声は、地を這うように退屈に響く。

「生きるのにも飽きたが、生憎強くなり過ぎて死ぬ事もできねエ。殺してくれそうなモンを探し回って五〇〇年。……二〇〇〇年目でようやくだ」

青空を向く少女の瞳が、不意に下がる。
「アンタを見つけた」

少年を見下ろす少女の青い瞳と、少女を見上げる少年の赤い瞳が、真正面からかち合った。

「やッぱ一人は駄目だな。道ツてのア誰かと一緒に歩かねエと意味がねエ」

それだけ言うと、マーリンはそれ以上、アーサーを急かしはしなかった。

まるでついて来るのが当然のように、彼女は少年の事など見向きもせず踵を返し、どことも分らない場所に向かって歩き出す。

「……………」

そしてアーサーも、今さら躊躇う事はなかった。

どうせ、いつかはこの街も地面に埋めて、別の場所へ向かうつもりだったのだ。彼からすれば、ちよつとした指標が出来たようなものだった。

こちらを振り返りもせず先へ進むマーリンの背中を、彼は何の迷いもなくついて行く。

彼女の隣を、寄り添うように歩いて行く。

「……ねえ」

「あん？」

アーサーは、少女の顔を見て、

「おねえさんは、ぼくとあそんでくれるの？」

「ああ、遊んでやる」

答えは早かった。

その答えには、何の迷いもなかった。

「アタシを殺せるぐらい強くなったら、目いっぱい遊んでやらア」

「ほんと？ やくそくだよ？」

「任せろ。アタシは約束を破った事がねえ。誰とも約束なんかした事ねエからな」

少女と少年が、血と肉の海を歩いて行く。

神となった魔術師と、いずれ神を殺す魔術師が、狭くてつまらない世界を、たった二人で歩いていく。

神を殺した世界最強の魔術師の物語は、ここから始まる。

13 【世界の楽しみ方】

——世界最強になって、幸せになれたか？

いつかどこかで、そんな事を訊かれた気がする。

今となっては、誰に訊かれたのかも、どうしてそんな事を訊かれたのかも……そもそも本当にそんな事を訊かれたのかも全く覚えていないほど、ひどくつまらない問い。

だが、少なくとも。

その問いに対する答えは、アーサーの中で、とつくの昔に決まっていた。

世界最強になって、幸せになれたか？

答えは『否』だ。

世界最強なんて、クソほども面白くなかった。

求めたものを手に入れなければ気が済まない。手にしたものを極めなければ気が晴れない。いつも突っ走り、道を踏み、前へ前へと進み続けなければ気が狂う。

そんな毎日を送っていた。送っていたから、『こう』なった。
その結果がこれだ。

歩き始めたと思つた道は、思いの外に短く、狭く。

突き進んだ果てにあつたのは、退屈と、ため息と、失望ばかり。

何が幸せだ。

歩き尽くして手にしたものは、こんなものだ。

つまらない。心の底からつまらない。

こんな世界など。こんな最強など。こんな頂点など。こんな孤独など。

何も……何一つ——

「はンツ!! くっだらねえ!!!」

それでも。

アーサーは、心の底から叫んでいた。

「退屈? ため息? 失望? バアアアアアアアアアアアアアアアアカ!!
世界の片隅を

歩き尽くした程度で偉そうに吼えやがるぜ!!　んだよ、まだまだ面白え事でいっぱいじゃねえか!　この世界は!!」

世界で最も高いと言われる巨大山脈——雲すら突き抜けた頂上に立つ少年は、眼下の世界を睥睨し、そんな風に叫ぶ。

痛感した。身に染みた。思い知った。

このどうしようもない心の昂りが、この世界も捨てたもんじゃないと証明している。

「なにが世界最強だおこがましい!　まだまだ俺の知らねえ最強共が!　俺の知らねえところで!　今日ものんびり息をしてやがる!」

なんて狭い世界で生きていたのだろう。まだ見ぬ高みがどこかにあるかもしれないというのに、自ら視野を狭めてしまっていたのだ。

掴んだはずの頂点が、霞んで見える。

そんなものを大事に抱えていた事が恥ずかしくなるくらいの何かが、この世界に眠っている。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ……よおし覚えた」

物理的な頂上に立ちただかる少年は、狂気的な笑みを浮かべてそう呟く。

「まずは一つ。……まだ、一つ」

ワクワクとドキドキが止まらない。

未知なる最強が、まだ見ぬ最強達が、今もどこかにゴロゴロ転がっているかもしれないと思うと興奮が止まらない。

「思ったより広いじゃねえかよ、この世界も」

いつまでも、世界最強なんて狭い鳥かごに収まっていたは、何も面白くない。頂点なんてつまらない枠組みに囚われていては、得られるものも得られない。

冒険しよう。

旅に出よう。

広い世界を見て回り、知らない世界をとことん知り尽くそう。

それこそが、世界の楽しみ方だったはずだ。

もちろんそれも理由の一つではあるのだが、今はもつと、別の理由がある。

それは――

「よーし叫べ叫べ。一緒に盛り上がるおや」

――吹き飛ばされている最中に、まるで散歩気分で空中を歩いて来た一人の少年が、思いつ切り首根つこを引つ掴んできたからだ。

少年の体と共に、新聞屋の男の体も宙ぶらりんになる。

いいや、彼だけではない。

同じ新聞屋の本部にいた同業者たちも、巻き添えを喰らった周りの建物の中にいた住民たちも、皆一様に自分と同じく空中で静止し、訳の分からない表情を浮かべていた。

あまりに不可解なその状況が、どうしようもない恐怖として心のすべてを蝕んでいく。

「どおよ、上から見る下界の景色は。良い眺めだろ。記事にしてもいいぜ」
自分の真正面から飛んで来るその声に。

その少年の……全てを焼き尽くすような赤い瞳に。

「ひっ」

男の喉が、引き攣る。

しかしそんな男の様子に興味がないのか、少年は深く大きく笑みを浮かべて、
「お前、新聞屋だろ。ちよつと頼みがあんだわ」

「ひい！ ひつ……な、なん、なにが……!？」

「だあかあらあ、頼みがあるつつつてんだろ。聞いてンのか？」

「わわ、わたし……なに……！ これ、何が、なななな、なに、起きて——」
「……はあ」

深いため息をついた少年は。

怯えてしまった新聞屋の男をぐいっとさらに引き寄せて。

「聞け!!! ああ!?!」

その爆発みないな怒声に、新聞屋の男はもはや悲鳴を上げる事もできなかつた。
喉の奥で「っ!!」と息を詰まらせ、危うく窒息しかける。

「……よし良い子だ」

男が黙つたのを、少年は勝手に肯定と見なした。

一度見なしたのなら、絶対に覆させない。覆す暇もなくなつたみかける。

「頼みがあんだよ。お前らに書いて欲しいモンがある」

「か、かかっ……書いて……？」

「おう。文章のプロであるお前らにな」

その短いやり取りで、もう上下関係は決まっていた。

新聞屋の男は、今さら細かい商談なんてする気もなかった。

「……なにを……か、書けば、あの……よろしいでしょうか……」
従うしかない。

男のそんな諦念を察したのか、少年はそれ以上圧を掛ける事もなく、

『招待状』を送りてえ」

自然な風に、用件を伝える。

「この世界の全人類にだ」

「ぜ、全人類!?!」

男の驚愕の声に、少年はまたしても「おう」と短く答える。

「簡単な仕事だ。俺が伝えてえ事を、なんか良いーい感じの文章にまとめてくれりやあ
それでいい。ぶつちやけ内容はもうできてんだが、綺麗な文章にまとめるってのがなあ
……そういう細けえ仕事はプロに任せるに限る」

「いやー！ いやいやいやいやー！」

男は無意識に首を横に振っていた。

この少年を相手に『否定する』という事自体が恐ろしかったが、しかし少年が言っている事は、恐怖を度外視しても否定せざるを得ない無理難題だった。

「全人類になんて！　いくらなんでもそんな……！　か、紙も人手も！」

「問題ねえ」

どうしようもない物理的な問題を、それでも少年は力技で押し通す。

「ズウィールつつう魔獣がいる。もも肉がクソ美味えデツカイ四足獣だ。あいつあ生命力が強えんで、死にさえしなけりやぶった斬った所からボコボコ体が再生する。たしか皮質も良かった。加工すりゃあ羊皮紙の代わりにでもなんだろ」

「ず……ズウィール……」

少年の話を聞いて、男は呻く。その魔獣の名前に聞き覚えがあったからだ。

聞き覚えはあったが、だけど、その魔獣は確か……。

「……文明崩壊クラスの、特級厄災指定魔獣……ですよ？」

「関係ねえ。前に食った事がある」

一言で断ずる。

「ちようど人手にも当てがある。お前はただ書きゃあいい。それ以外のモンは俺がなんとかしてやる。……返事は？」

ああああ!!!!!!
「」

街を押し流すような黄色い絶叫が、びりびりと空気を震わせていた。

興奮しているような、発情しているような、胸を高鳴らせているような……とにかく千差万別にテンションをぶち上がらせた『女性の声』が、津波のように街中を埋め尽くしたのだ。

声に形と色が付いていたら、今頃ピンク色でハート型の爆発が街を覆っていたかもしれない。

そんな音源の、目の前に立たされて。

「……………」
新聞屋の男は、何が何だか分からないまま口を開けて絶句するしかなかった。

ちよつと待つてると言われたから大人しく待つていたが、やつて来たのは想像の五〇

〇倍はトチ狂った混沌だった。

……とりあえず、全く情報が整理し切れないので、目の前の光景をそのまま言葉にする。

全長二〇〇メートルの巨大な四足魔獣を肩に担いだアーサーが、軽く一〇〇は超える全裸の女達と、首輪を付けられた五〇人前後の男達を引きつれて来た。

意味も訳も分からなかった。

このまま目を回して倒れてやろうかとも思った。

しかし、そんな事は許されない。

そんな事を許す暇もなく、アーサーの瞳が真つすぐに射抜いて来る。

「お、待、た、せー。準備に手間取っちゃった」

具体的に何をどう手間取ったのかも分からないような大軍勢を引きつれて、当のアーサーは散歩気分だった。その声にも、その表情にも、何一つ深刻な様子がない。

そんな彼の腕や服を、周りの女達はこそぞって自分の方に引つ張りながら、

「嫌ですわアーサー様！ 私たちも待たせないでくださいまし！」

「抜け駆けは駄目よ！ 次は私の番なんだからね！」

「アーサー様！ もう我慢できないんです！ お願い！ 早く！ 早くう！」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア！」

「これ以上お預けしないでください！ 頭がおかしくなっちゃう！」

……なんだこれ。

アーサーが連れ歩いているというよりも、女性達の方からアーサーに群がっている。それもすごい気迫で。今にも彼の四肢を引き千切って食べてしまおうんじゃないかと思

イツと。

次の瞬間、ズズウウウウウウウウン!!!! という凄まじい揺れが街を震わす。
「死んでねえ、ボコボコにして気絶させた。で、こつちが聖女だか何だか知らねえ女共」
sonde、と。

片手に巻き付けた鉄の鎖をぐいと引つ張つて、首輪を付けた男達を示しながら、
「こつちが騎士連合だか何だかと、勇者と愉快的仲間達だ。全員俺がボコつた連中だ。
俺の言う事ならよおーく聞いてくれる」

アーサーが怒鳴るように「なあ!？」と首輪を付けた男達に問い詰めると、首輪軍団は
一斉に体をビクウ! と引きつらせ、「ひっ」と恐怖の呻きを上げる。

「ズウィールは死なねえ程度に皮を剥げ。紙の材料だ。魔装騎士の『魔装術』は魔力を物
理的な形にできる。紙が足りねえならコイツらの魔力使つて複製しろ。勇者つてのあ
冒険者なんだから体力あるよなあ、こき使つていいぞー。へばつたら聖女共の『聖導魔
法』で回復でもして働かせろ。ンで一週間で仕事を終わらせろ。それ以上は待てねえ。
待たせたらこの国ごと消す」

鉄の鎖を、アーサーはいい加減にその辺に放り投げて、

「……で、どうだ? お前の言う『紙と人手』だ」

笑顔のまま、アーサーは新聞屋の男に詰め寄つて。

一言。

「文句は？」

直後だった。

新聞屋の男は、おそらく人類最速の動きで首を横に振ってみせた。

なんなら雄叫びの主は恐怖のあまりにゲロを吐いた。

しかし、嘔吐する元気があるだけまだマシだ。

『他の連中』は、嘔吐などする余裕もないらしい。

「あ？ …… ンだよお前ら、こんなジメジメした所に閉じこもりやがって」

空気の悪さに思わず咳き込みながら、

「今日は天気が良いんだぜ？ お外で遊ばねえと体に悪いじゃねえか」

そう言つて、アーサーは舞い上がる埃を払うように、手を適当にパタパタしてみせた。

直後だった。

洞穴がまるっと消し飛んだ。

驚きの声すら無かった。

強烈、という表現すら生温い速度と圧力。それがアーサーを爆心地に凄まじい勢いで炸裂し、衝撃波を全方位へ撒き散らした。もはや洞穴はおろか、見渡す限りの範囲にある山々までまとめて大雑把に吹き飛ばされていく。

「けむい」

声と同時に、ゴツ！！！！
という正体不明の烈風が渦を巻く。大爆発による粉塵やら土煙

やらが、その一瞬で空気に溶けて消えていく。

見晴らしが良くなった景色に、アーサーもやつとりリラックス。「んー！」と背を伸ばし、太陽の光を存分に浴び、

「やっぱこうでなくちやなあ。見えるもんも見えねえンじゃ面白くねえ」
最強で、最悪の魔術師は。

ジメジメした洞穴から、日の下に無理やり引き摺り出された『そいつら』に向かって、「お前らもそう思わねえか？ え？」

凶悪に、極悪に。
楽しそうに笑う。

目の前で呆然としている、数十体の『グレイブルドラゴン』の群れに向かって。

『』

『オオオオオオオオボロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロ』

『ロロロロ』

あ!!」

「おーい」

『あはは……死んだ……はははは……』

『……きゆう』

今さら真面な恐怖が追いついたらしい。

ドラゴン共は、自分達の新たな住居が突如として爆散し、しかも爆散させた犯人がかつて自分達を絶滅寸前まで追い込んだ魔術師だと認識すると、一気にパニックに陥つた。

叫ぶ者。逃げようとする者。絶望する者。吐く者。諦める者。気絶する者。全てが等しく一斉に炸裂する。

そんな混乱と混沌を傍目に、

「……はあーあ……ダメだこりゃ」

アーサーの声は、あくまでつまらなそうに零れ落ちる。

彼としては別に、「殺し損ねた生き残りも根絶やしにしてやろう!」とか思つて来たわけではない。ただちよつと『お手伝い』を頼みに来たただけだ。それがまさか、こんな騒ぎになろうとは。

元々は、二つの国を跨ぐほどの大山脈を住処にしていたグレイブルドラゴン。しかし

その大半をアーサーに殺されてしまって以降、彼らはすっかり身を潜め、下界に姿を現わさなくなっていた。

まあ随分と大人しくなったもんだと思っていたら、何の事はない。ただあの大量殺戮がトラウマになり、洞穴に隠れ住むほど腑抜けになってしまったという事だった。

「あーつまんな」

空を飛ばないドラゴンに、一体何の価値があるう。

雄々しくないドラゴンに、一体何の魅力があるう。

ドラゴン特有の『存在力』を追ってここまでやって来たが……徒労だったらしい。ここまで興が削がれてしまえば、もはや『手伝い』を頼む気も、根絶やしにしてやる気力も湧かない。

期待外れもいいところだ。

少年はさつき踵を返し、その場から立ち去ろうとした。

その時だった。

『わー！ おそらおつきー！』

アーサーの足が止まる。

思わず振り向く。

ぎやーぎやーうるさい悲鳴の合間に、今、明らかに、全く毛色の異なる声が混じって
いたのが分かったのだ。

今のは……子供の声だ。

立ち去ろうとした足が、再びドラゴン達の方を向く。

騒がしい奴らを全員無視して素通りし、アーサーは一直線に声の主まで歩み寄る。

慌てふためいて右往左往するドラゴンの群れの中に、一匹だけ、じつと大空を眺めて
いる個体がいた。

全長は五メートルを超える。人間と比べれば明らかに巨大で、肉体だけなら雄々しく
見える。

だけど、アーサーは雰囲気だけで理解した。

この個体だけ、精神が異様に『幼い』。

「おいチビ」

『?』

声をかけられ、幼いドラゴンは後ろを振り向いた。『チビ』というのが自分の事を指し
ていると理解できている時点で、コイツが子供である事は確定していた。

ドラゴンの瞳と、アーサーの瞳ががち合う。

やはり、子供の瞳だ。

まだこの世界を知らない、幼く無邪気な透き通った瞳。

それが分かると、アーサーはあえて腰を落としてから幼いドラゴンを見上げる。

「……お前、空を見んのは初めてか？」

『ううん、みたことあるよ。でもね、ママがね、あまりね』

『おう』

『あのね、お外はあぶないからつて言うの。でね、あんまり外であそばせてくれないんだよ』

「あー、そうかそうかー。そりゃあヒデエ母ちゃんだなあ」

子供は外で遊ばねえとなあ、と相槌を打つ少年に、幼いドラゴンは『ちがうよ！』と即座に切り返した。

『ママね！ でもね！ いっぱい遊んでくれるの！』

「ほーん……いっぱい遊んでくれるか」

『うん！』

「……つまんなくねえか？」

『つまんなくないよ！ 遊んでくれるもん！』

「そうか……はは、そうかそうか。そりゃーいい母ちゃんだ」

何かを納得したみたいに何度も頷いて、また幼いドラゴンと目を合わせる。

そして、納得したアーサーは、

「なあチビ」

問う。

「もーつと遊びてえか？」

『うん！』

悩む時間など無かった。

幼さゆえの思い切りの良さか。気持ちがいいほどの断言に、思わずアーサーも笑っていた。

「おし！ よおく言った！ やっぱガキってのはこうでなくちゃな！」

『いへへへー』

幼いドラゴンは自分からアーサーに頭を差し出し、彼はそれを慣れた手つきで撫でてやる。

こうして会うのは初めてのはずなのに、不自然なほど自然なやり取りだった。

その時だった。横合いから、切羽詰まった悲鳴のような声が飛んで来た。

幼いドラゴンの母親だった。

『やつ、やめて！ お願い！ その子には手を出さないで！』

「ああ？ 出すわけねえだろガキなンギに」

つまらなそうに吐き捨てる。

「それに聞いたろ？ このチビはもーっと遊んでえとよ」

アーサーは幼いドラゴンの言葉を、何よりも強く心に刻む。

満足に遊べない苦しさは、よく知っている。

「おし、遊んでえなら遊ばせてやる。なあチビ、もっとおつきー空が見てえか？」

『え？』

少年の提案に、幼いドラゴンは首を傾げる。

『……もっとおつきい、そら？』

「ああ」

肯定するアーサー。

それを見て……何を思ったのか。幼いドラゴンはもう一度、自分の真上にある大空を

見上げて、

『……これより？』

「おうよ」

『……あるの？』

「ある。俺が見せてやる」

気持ちがいいほどの断言があった。

神を殺した最強の魔術師。言った言葉は誰にも覆させない。

そして、決して覆さない。

『見たい！』

逡巡すらも馬鹿馬鹿しかった。

幼い声は、自分の欲求に一直線だった。

『もつとおつきーおそらー！ 見たい！ ママといっしょに、もつともーつと、とんでみた

いー！』

「よく言った」

ここに二人の子供がいた。

一人は、まだ見ぬ最強を求めて。

もう一人は、まだ見ぬ大空を求めて。

どこまでも自分の欲求に忠実な子供が二人、自然と約束を結んでいた。

「……つつーわけだ」

アーサーはその赤い視線を、幼いドラゴンから、周囲へと向け直して、

「小せえガキが大空に羽ばたきたいつつつてるのに、まさかお前らが飛ばねえわけにや

あいかねえよなあ」

気付けば騒ぎは収まっていた。

その代わりに、得も言われぬ緊張感が辺り一帯を駆け巡っていた。

何か、押しではならないスイッチを押ししてしまったような。踏み入ってはならない領域に足を踏み入れてしまったような。

そんな、痺れるような緊張感が。

「ついて来い」

伝説のドラゴン達に。

世界最強が告げる。

「お前らに、この世界を見せてやる」

終章【前略、神を殺した世界最強の魔術師が営む冒険者パーティーはいかがですか】

私は『最強』を探しています。

味方として貢献したい者でも構いません。敵として打倒した者でも構いません。

私は、私を満足させ得る『最強』を探しています。

私は『冒険』を求めています。

強き獣を屠る旅でも構いません。金銀財宝を手にする旅でも構いません。

私は、私を満足させ得る『冒険』を求めています。

この世界に息を潜める最強たちへ。

この世界にため息をつく冒険者たちへ。

ここに、ゲームの開催を宣言します。

ルールは単純明快です。

私と、心躍る戦闘を繰り広げましょう。

私を楽しませる事ができれば合格、できなければ失格の、簡単なゲームです。

合格者には二つの権利が与えられます。

一つは、私が結成する冒険者パーティへの加入する権利。

もう一つは、私と本気で殺し合う権利。

どちらを選ぶかは自由です。どちらとも選んでも構いません。

私は最強を探しています。

私は冒険を求めています。

私は、私と共に旅をしたい最強を、私と共に殺し合いたい最強を探しています。

私は、血肉湧き踊る冒険を、己の命など簡単に投げうてる冒険を求めています。

我こそはと名乗りを上げる者は、二ヶ月後の満月の夜、要塞都市カルドキアにお集まりください。

皆さんのご参加、楽しみにお待ちしております。

「つまんねー!」

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!! もももも申し訳ございませええええええええええええええええええええええええええええん!!」

出来上がった文章を聞いてのアーサーの第一声に、新聞屋の男は平伏するしかなかった。

建て直した新聞屋の本部。その一室に、街に住む富豪の家から盗んで来た高級なベッドをど真ん中に置いて、右手にブドウ色のワイン、左手にズウィールの体から引き千切ったもも肉を持ち……しまいには両脇に八人の女性を侍らせた状態で、ベッドに寝そべりながらアーサーは、

「まー俺が考えた内容よりあ良くなつたか。……にしたつて面白くねえよなー!」

べつに責めてるわけではないのに、新聞屋の男はほとんど地面に寝そべるようにひれ伏して「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!」しか言えなくなっていた。

ちなみに、少年の両脇では八人の全裸の女性がハアハアビクビク。

「はふ、あふう……アーサー様あ、もつと、もつとお……」

「んっ……あ」

「しゅごい……こんなの初めて……」

何が『もつと』で何が『初めて』なのかは分からないが、とにかく『もつと』で、とにかく『初めて』なのだった。

しかし、もつと初めてなのはアーサーの方だ。

なにぶん、『招待状』なんて書いた事は一度もない。それで変に格好の悪い内容の『招待状』をばら撒いてみる。恥ずかしいにも程がある。

こういうのは初めが肝心だ。

しよっぱなから躓いて、舐められてはいけない。

「パツとしねえよなあ。もつとこう、ぼーん！ みたいなインパクト……」

片手でワインを豪快に飲み干し、片手で肉にかぶりつき、女を侍らせて一服。

頭の中でアイデアをこねくり回し、今までこんなに頭を使ったのは初めてじゃないかと思うくらい知恵を振り絞って、

「……んー！」

がぼっ！ とベッドから起き上がる。

名案が浮かんだ。

「おい」

「は、はい！」

「その『招待状』、最初に一文だけ付け足せ」

これで全ての準備は整った。

整ったのなら、後は、やるべき事をやるだけだ。

一直線に、上へ。

貫くように、真つすぐ。

強い光を放つ両眼を見開いて、その巨体は全身をくねらせて翼を振り下ろす。

空気を叩く爆音が響いた。

自分の吐いた息すら追い越すように、宙を駆け抜けるスピードはますます上がっていく。

「よっ」

踊り上がったその巨躯が、雲の波へと突き刺さる。真つ白に濁る空気をかき分けて、世界を真つ二つに引き裂かんばかりに突き進む。

限界を設けるな。自分で自分の全力を決めるな。

まだいける。まだまだ突き進める。こんな所で満足なんかできるはずがない。見たいものは、この上にあるのだ。

大きいと思っていた青空よりも、さらに大きな青空が。

この雲さえ突き抜けた先の、遙か彼方の天高くに。

「よし」

空気を叩け。風を生め。重力を振り切れ。自由を謳え。

その翼で、その爪で、その体で、その想いで。

天空を支配するドラゴン。その名に恥じぬ雄々しさと猛々しさでもって、稲妻すらも追いつけない速度と勢いで。

「よし!!」

直後だった。

突き抜けた。

「……よし。目、開けろ」

自分の背中に乗る少年の言葉に、幼いドラゴンは恐る恐る、静かに目を開く。

瞼の隙間から入り込む光を、眼球全体を受け止める。

そして見渡す。

『うわあ』

素直に出た言葉がそれだった。

そして、それでいいとアーサーは思う。

取り繕った感想なんて何も面白くない。自分が感じた心の形を、感じたままに吐き出すその言葉にこそ、意味があり、風情があり、色が宿るのだ。

「どうだ」

雲海を突き抜けた先。

そこに待ち構えていた光景。

「何が見える」

『……そらだ』

青があつた。見上げて初めて見える青じやない。前を見ても、後ろを見ても、右を見ても左を見ても、どこを見渡しても見渡し切れない青があつた。

青の中に、自分がいた。

『あれ？ くもは？』

「雲？ そんなものとつくに突っ切つちまったじゃねえか」

アーサーが首をトントンと叩く合図で、幼いドラゴンは初めて下を見た。

視界一面に、雲の平原が広がる。

白い波が自分の足の下を音もなく流れる。今まで自分の頭の上にあつたはずのものが、今、自分の下を優雅に流れる。

『……すごい……』

ゆつくりと顔を上げる。

太陽の光を、たった一人で浴びる。

遮るものはない。縛るものもない。ここは薄暗い洞窟なんかじゃない。

ここには、この場所には、いつか心行くまで飛んで行きたいと願つて願つて願ひ続けた青空があつた。

青空しかなかつた。

青空だけが自分を包んでいた。

その中に、自分が一匹。

見渡す限りの青空を、飛んでも飛んでも終わる事のない永遠の青空を、自分だけが全

!? なにこれ! すごいんだよ! ねっ、あおいの! あっちまで! ずっと!」
「見た事ねえか?」

『ない! ぜんぜん! あははははははは!』

青い空の真ん中で——いいや、もはや真ん中も端もない。永遠だ。無限なのだ。どこまで行っても尽きる事のない自由の空で、幼いドラゴンは体をくねらせて宙を泳ぐ。

その背中に座るのは、世界最強の魔術師。

彼は幼いドラゴンとはまったく違う、別の感動を覚えていた。

「ああ……いいな……。いつになっても、ここはいい」

思い切り息を吸う。

ひんやり冷たい空気が、体の奥深くまで染み込んで行く。

誰もいない世界。何も無い世界。自分だけの空間。一人だけの頂点。

吸い慣れた空気だった。

……だけど、

「ここもいいが……でも、足りねえよな」

そうだ、足りない。

何もかもの上に立ったこの充足感だけじゃあ、到底満足なんかできそうもない。

進まなければ。

前に進み、歩き続け、目の前に多い塞ぐ障害物をぶつ壊さなきゃ気が済まない。でも、気付けばこの手に掴んでいた世界最強の称号。

目の前に現れる障害は、いつからか退屈なだけの石ころに変わっていた。だからって、歩みを止められるほど自分は高尚じゃない。

進みたくて進みたくてたまらないのだ。

歩きたくて歩きたくてたまらないのだ。

昇りたくて昇りたくてたまらないのだ。

永遠に進み続け、歩み続け、昇り続けなければ、気が済まないのだ。

『すごいや……すごいくて、すごいくてね！ おつきくて！ あおくて！ ひろくて！
ね、あとね！ えっと、えっとね……！』

どうやら、すでに知ってる言葉は使い尽くしてしまっただらう。

この感情をどう表せばいいかわからず、幼いドラゴンは言葉に詰まると、

「楽しい、か？」

『たのしい？』

己の背中に乗るアサラーの言葉を、幼いドラゴンは自分の口で繰り返す。

その言葉を、胸の中で、何度も何度も反芻させて――

『……うん、たのしい』

自分の言葉にする。

自分の感情にする。

『たのしい！ たのしいよ！』

「そうだ！ それでいい！ それがいい！」

幼いドラゴンと、背中に乗るアーサーが、同じ方角を向く。

向く方向なんて最初から決まっている。

前だ。

「でもまだまだこんなもんじゃ満足できねえだろ！」

いつだって、どこでだって。

前へ前へと進まなければ、つまらない。

「突っ走れ！ どこまでも！ お前の気の済むまで！！ 永遠に！！」

『うん！』

ドツ!!! という爆音が天空を席卷した。

巨大な翼を思い切り叩いた幼いドラゴンの巨体は、もはやソニックブームすら叩き出す

ような速度で宙を突き抜ける。

その勢いで、風を割り、雲を割り、大気を割り、世界を割る。

それほどのトップスピードで、青い世界を堪能する。

「……それでいい。こんな所で終われねえだろ」

その超スピードの巨体の上に、アーサーは二本の足だけで立ち上がる。

視線の下……雲の下の世界を睥睨する。

こいつ以外のグレイブルドラゴン達と、奴隷にした元聖女と戦士連合の雑魚共、そして落ちぶれた勇者一行の奴らには、世界中にあの『招待状』をばら撒くように言っていた。

今頃あいつらは雲の下で、せっせと世界中を飛び回り、あの紙つぺらを有象無象に届けているのだろう。

それを想像しながらも、アーサーはやはり、目の前の景色に釘付けだ。

誰もいない空。邪魔するものがない世界。

そして、そんな景色を邪魔してくれるような、そんな景色など見劣りさせてくれるような、こんな景色を誇らしげに楽しんでいた事が馬鹿らしく感じてしまうほどの『最強』達が、この世界のどこかにいる。

それが、楽しみで、楽しくて。

ドキドキで、ワクワクで。

面白くって仕方がない。

「行くぜ、最強共」

誰もいない青空で、ただ一人。

前にも横にも後ろにも誰もいない、圧倒的な頂点で、ただ一人。

「思う存分喰らい尽くしてやんよ」

世界最強の少年は。

誰にも聞かれない声を紡いだ。

「俺の名前はアーサー・ペンドラゴン!! 神を殺した魔術師だ!!」

叫びは、空気を揺さ振る。

雲を引き裂き、山を震わせ、視界にも入らない地上を縦に横に揺り動かす。

「まだまだ楽しんでねえ!! まだまだ諦めてねえ!! もつと笑わせろ!! もつともつと喜ばせろ!! もつともつともつと!! 俺を心底楽しませろ!!」

足りない。満ち足りない。飽き足らない。食い足りない。

飢えて飢えて仕方がない。

一度求めたものは、手に入れなきや気が済まない。

「俺を退屈させんなや!! まだまだまだまだ、これからだろおが!!」

進もう。

まだまだ先がある。

神を殺した世界最強の魔術師、アーサー・ペンドラゴン。

そんな少年が、叫ぶ。

「さあて!! ゲームスタートだ最強共!!!」

これは、一人の世界最強の物語。

たった一人の世界最強が、世界を喰らい尽くす物語。

そして。

そんなどうしようもない頂点のもとに集まった、さらなる最強達の物語。
孤独だった世界最強が、世界最強の仲間と、世界最強の宿敵を得る物語。

そんな凶悪な産声が、今。

盛大に、この世界を揺さ振った。

*
*
*

最強達が動き出す。

——ある所では。

絵筆を片手に現実そのものを塗り替える世界最強の科学者が、魔術という文明全てに狂気的な復讐心を燃やしながら。

——ある所では。

強力な「ステータス」を付与されて異世界から召喚された世界最強の剣聖が、その圧倒的な力で数々の強敵を薙ぎ払い、少女達のハーレムを築きながら。

——ある所では。

二〇〇〇年前に自分で自分を封印し、二〇〇〇年後に人間として転生した世界最強の元魔王が、現代最高峰の魔術学園で無双しながら。

——ある所では。

数十年も薬草採集を続けていたがゆえに自然と最強レベルの魔術を会得していた世界最強の雑用係が、国の外れにある村でスローライフを送りながら。

——ある所では。

存在するだけで人間を殺してしまう世界最強の呪術師が、自分を殺してくれる誰かを

求めて旅を続けながら。

——ある所では。

何度も過酷な試練を乗り越え、たゆまぬ努力を重ね続け、ついにSSSランク冒険者となった世界最強の元最弱が、世界中のダンジョン踏破を夢見ながら。

——ある所では。

言葉一つで全てを騙す世界最強の詐欺師が、今日も国一つをたつたの三〇分で陥落させながら。

——ある所では。

遊戯感覚で異世界人を召喚しては世界を混乱に陥れようとする世界最強の邪教魔導士が、誰にも認識できない暗闇の中で絶望的な笑みを浮かべながら。

——ある所では。

この世の全てを知覚できる世界最強の大賢者が、人知れず動き出す最強達を水晶玉で覗き見て、一人部屋の中でほくそ笑みながら。

未知なる世界最強が。まだ見ぬ世界最強が。密かに世界を揺さ振り続ける世界最強達が。

神を殺した世界最強の魔術師の絶叫に、突き動かされるかのように。一斉に、動き出す。

その日、一つの『招待状』が全世界にばら撒かれた。

全ての大陸、全ての国、全ての街、全ての村、全ての地上に住む人々へ。

全人類の頭上から。

全人類に向けた『招待状』が。

羊皮紙という形で、ハラリハラリと降り注いだ。

誰もがその『招待状』を手に取って、誰もがその『招待状』に目を通した。
反応は千差万別だった。

恐怖する者。

絶望する者。

歓喜する者。

憤慨する者。

悲壮に暮れる者。

不安に駆られる者。

溢れる興奮に身を任せる者。

熱い闘争心を燃やす者。

その『招待状』を握り潰す者。

その『招待状』を胸に抱く者。

その『招待状』を、恐ろしさのあまり破り捨ててしまう者。

その『招待状』にさしたる興味も示さず、すぐに放り投げてしまう者。

人々がそれぞれの反応を示した『招待状』。

しかしその羊皮紙に書かれていたのは、全て同じ内容だったという。

その『招待状』は、こんな書き出しで始まっていた。

前略、神を殺した世界最強の魔術師が営む冒険者パーティはいかがですか

エピソード2

序章【新天地へようこそ】

新天地へようこそ、選ばれし勇者の皆様。

突然の出来事に困惑している事と思いますが、いえしかし、慌てふためく必要はございません。不肖このワタクシが、一から説明申し上げますゆえ。

さて、チュートリアルを始めましょう。

まずもって皆様、『異世界』という言葉をご存じでしょうか。
ええ、その通りです。

皆様の住んでいらした世界とは何もかもが異なる世界。

ファンタジックでドラマチック、魔法に呪術に魔神に亜人、何でもありのご都合主義。

召喚されれば無条件に最強チート能力を獲得し、俺TUEEが堪能できると話題沸騰

の、現在一番ホットな一大事業でございます。

異世界召喚の歴史は一度語り始めると尽きる事がありませんので割愛させていただきますが、それはそれは、長く壮大な道のりがあったのでございます。

選ばれし勇者の皆様であれば、すぐにお分かりいただけますね？

……はい？ 勇者とは誰の事か？

なるほど、確かにその疑問はもつともでございます。

そしてその答えこそ、今から申し上げます本題と深く関わってくるのです。

あなた方も一度は夢見るはずですよ。違う世界へ足を踏み入れたいと。まだ見ぬ新天地を大いに羽ばたいて行きたいと。

さあ、歓喜の声を上げましょう！

あなた方は選ばれたのです！

多くの人間達の中から、あなた方は『異世界の勇者』として生まれ変わるチャンスを手に入れたのです！

喜ばしいではありませんか！ 悦ばしいではありませんか！

毎日が退屈に塗り潰された世界から脱却し、新たな世界へ足を踏み入れるなど、そう

容易く実現し得るものではございません。しかし、それを実現いたしました。

選ばれた皆様の判断基準は至極単純。

皆様が籍を置く進学校『奈心中学校』なこちゅうがっこうの第三学年、総勢一二九名が、異世界召喚の切符を手に入れた勇者様です。

ええ、ええ。

その感激の声こそ、ワタクシが求めていたものでございます。

今まで苦しんでおられた事でしょう。

狭い鳥かごの中で、昼となく夜となく発展のない日々を無益に浪費する毎日は、さぞや苦痛であつたことでしょう。

ですが、ご安心ください。

今日からあなた方は、全てが興奮に満ちた異世界で、勇者として生きてゆくのです。

皆様の利き腕に、それぞれ異なった文様が刻まれていますね？

それは、あなた方の世界で言うところの『バーコード』と似た役割を果たしております。その文様自体に意味があるのではなく、その文様に内包された『情報』に意味があ

るのでございます。

我々はこれを、『ステータス』と呼んでいます。

さあ、その利き腕の文様に、己の血液を付着させてみてください。一滴で十分です。で……ええそうです。神々しい光と共に、数値と文字が空間に浮かび上がるはず。

それが勇者の皆様の「ステータス」でございます。

どうですか？ お気に召したでしょうか？

それでは少しばかり、『ステータス』の説明を行わせていただきます。

まずは『パラメータ』。

筋力、耐久力、俊敏力、魔力など、あなた方の内に秘めたる不可視の能力を数値化し、目に見える形で管理する機能でございます。当然、鍛えれば鍛えるほど上昇し、さらなる高みを目指す事も可能です。

続いて『スキル』。

これには二通りの種類がございます。

それが、『マルチスキル』と『ユニークスキル』です。

『マルチスキル』は、全ての人間が持ち得るスキルです。

ある一定条件をクリアする事で取得が可能となり、なおかつ所持容量に限りがございます。大量のスキルを会得するもよし、限られたスキルを研ぎ澄ますもよし、お望みのままにご使用ください。

そしてこちらが大本命、『ユニークスキル』。

その名の通り、個人にしか持つ事を許されない、自分だけの『力』。

個人の個人による個人のための『力』。

『ユニークスキル』は一人につき一つまでとなっており、効能自体は限られたものですが、『マルチスキル』と上手く組み合わせる事で、より大きな力を発揮するでしょう。あなた方は選ばれし者。

当然ながら、平凡の人間には到底手に入れる事ができない、世の理を超越した最強の【ユニークスキル】を差し上げております。

失礼、前置きが長くなりました。

勇者の皆様も、新天地への期待に胸を躍らせ、待ち切れなくなっている事でしょう。

ご安心ください。もはやワタクシの説明すべきものは残っておりません。後の事は全て、ご自分の目と鼻と口、そして全身の全感覚で、ご堪能ください。

それでは、ここから先は皆様の人生です。

元の世界に未練はありませんね？ ……はい。潔くて素敵です、勇者の皆様。どうか、喜びに満ち溢れた生を、謳歌してくださいまし。

ワタクシは陰ながら、皆様の偉大なるご活躍を拝見しておりますので。

それでは始めましょう。

夢と希望が紡ぎ出す、理想の異世界生活を。

01 【ごくごく普通の、どこにでもいるような】

—— ハーレムは好きかって？

好きに決まってるだろ。

男なら誰しも一度は夢を見る。

可愛い女。綺麗な女。エロい女とスケベな女。ガキみてえな女も良いし、ババアみてえな女も良いな。それにデツケエ女もチツセエ女も、中ぐらいの女も良い。

とつかえひつかえの侍らせ放題。囲ませ放題の抱き放題。

かーっ！ そそるじゃねえの！

それでこそ生きる楽しみってもんだよなあ！

—— 不純じゃねえか、だど？

なに言ってるんだお前。

女が好きだつうこの純粹極まる男心の、一体どこに不純があるんだよ。

むしろ、一途な奴の方が不純と言える。

一人の女を目いっぱい愛するつてのは、言葉にしてみりや御大層かもしれねえが、しかし言い換えりやあそれつて、その一人以外を愛する事を諦めた怠惰な野郎つて事だ。

人を愛する努力を捨てるなんざ、これ以上の不純はねえ。

それに比べ、ハーレムつてのあどうだ。

両手いっぱい女を、両手いっぱい愛してやるつてんだ。

一途なンかより、よっぽど純粹だと思わねえか？

—— 屁理屈だ？ 屁理屈で結構。

せつかくの人生だ。夢を見たつて許されんだろ。

現実しか見れねえ人生に、ロマンなんてありやしねえ。

—— …… あ？ 俺？

溢れんばかりの聖女共を毎日とつかえひつかえだ。いいだろ？

おかげで毎日極楽気分だが、だからつつつて現状維持はつまらねえ。それこそ怠惰の代名詞だ。

進める道があんならよ、進まねえなんざあり得ねえ。

まだ抱いてねえ女がいるってんなら、抱かねえわけにはいかねえよな。

一度求めちまつたら、手に入れなきや気が済まねえ俺だ。

いつか必ず、何としてでも、この手で最高のハーレムを築いてやるさ。

まずはこの惑星の女を全員抱くところから始めようと思う。

小さな事からコツコツとだな。

俺のハーレムに入りてえ女、絶賛募集中だぜ。

常に有能な魔術師を輩出してきた家系に生まれた事が、その少女にとって最大の不幸だった。

その少女は『欠陥品』だった。

魔術の才能に恵まれなかった、という話じゃない。

彼女の場合は、才能以前の問題だった。

魔術師にとっての生命線、『魔力回路』。

それが、生まれながらに機能不全を起こしていた。

原因は不明。外的要因ではない。遺伝子の異常で奇形児が産まれてしまうのと同じ、人の手ではどうする事もできない話。

だが、少女の家系に連なる魔術師達は、そんな彼女を良しとしなかった。

強引な魔力回路の構築。その目的のためだけに、一体どれほど恐ろしい技術が注ぎ込まれたのかは、少女本人と、この計画に携わった者しか知らない。

ただ、少女にとっては生き地獄だった。

生きたまま体中をいじくり回され。知らない人間の思うがままに、耐えがたい苦痛を与えられ。無理やり肉体に穴を開けられ、切り開かれ、中身を入れ替えられ、埋め込まれ。そして失敗すればまるで八つ当たりのように殴られ、焼かれ、砕かれ。休む暇もなく、体を壊され続けて——

多分、もうすぐ死んでしまう。少女はそう思った。

自分の中にある魂の火が、度重なる消耗で薄らいでいくのが分かったのだ。

そんなある日の事。

いつものように、薄暗い独房の中に投げ捨てられていた時の出来事だった。

頑丈に施錠されていたはずの独房の扉が、独りでに開いた。

まるで、「早くここから逃げろ」と言わんばかりに。

開いた扉の奥からは、眩しい光が差し込んでいた。

それは単なる偶然なのか。それとも第三者の手によつて引き起こされたものか。

そんな事を考えている暇もなかった。

少女は考えるまでもなく、ボロボロの体を引きずっていた。
この独房から出るために。こんな地獄から逃げ出すために。
自分自身を救うために。

そして――

——早く……早く逃げなきや。

息を弾ませながら、少女は真夜中の路地裏を走り続けていた。

身に纏うのは一枚のポロ布。その隙間から、幼い身体に刻まれた大量の傷痕が顔を覗かせる。

引き裂かれた痕、砕かれた痕、抉られた痕、焼かれた痕、殴られた痕。継ぎ接ぎされた色の違う肌。乱雑過ぎる縫い目。焼けただれて剥がれ落ちた肌。もはや内側の筋肉まで見えてしまっている深い切断面。

過去に付けられたものから、まだ血を滲ませるものまで。

いつそ嫌悪感を覚えるほどの凄惨な姿の少女が、血塗れの素足を必死に動かす。

「はっ、はっ……っく、ふ……っ」

——逃げなくちや。もつと早く、もつと遠くに。

もうどれだけ走り続けたのだろう。息がもたない。肺が痛む。両足だって、今にも粉々に崩れてしまいそうだった。

死に物狂いの逃走。

そして、その果てに。

「あ……………」

勘だけを頼りに、適当に目についた路地裏の角を曲がった時だった。

少女の足が止まる。

「うそ……………」

逃げる事をやめるのは、彼女にとってそのまま死を意味する。

だからこそ、目の前に突き付けられた現実には、少女は心の底から絶望した。

行き止まり。

レンガで出来た大きな壁が、少女の眼前に立ちはだかっていた。

何もかもが不運だった。そもそも少女が立ち入ったその路地裏は、街に出た犯罪者を追い立てて捕まえやすくするために、都市ぐるみで建設された人工的な袋小路だったのだ。

そうとは知らずに足を踏み入れた時点で、全てが終わっていた。

今さら後戻りなんてできない。

追手は、そんな甘えを許さない。

「そんな……っ」

嘆いている暇さえ無かった。

立ち竦む少女——そんな彼女の背後で突然、カツ、という謎の光が瞬いた。全ては一瞬だった。

ズドアツツツ！！！！
と、空間そのものが謎の大爆発を起こした。

気付いた時には、見渡す限りの風景が吹き飛んでいた。

石や木材で出来た建築物、路地裏に廃棄されていた木箱やゴミクズ、そういう形ある全てが一瞬で木端微塵に消し飛んだ。そこから発生した衝撃波が、凄まじい速度で地表を舐める。それだけで周辺数百メートルの建築物が吹き飛んだ。街中のガラスというガラスに亀裂が走った。

もはや、少女一人の体なんて。

その場に踏みとどまる事もできなかった。

「はっ！」

爆風を叩き付けられた少女は、地面の上を何度もバウンドしながら一〇〇メートル以上も転がっていく。路地裏に散乱する瓦礫やゴミで体中を削られながら、横に縦に回転

して吹っ飛んでいく。

爆風が収まり、少女の体も止まった頃には、その体からは尋常じゃない量の血が流れていた。

「……ぼぼっ！ あ、が……っ」

血を吐いて、血を流して……それでも少女は立ち上がろうと必死にもがく。

傷や痛みなんて気にしてられない。早く逃げなければ、また捕まってしまう。

しかし体が言う事を聞いてくれなかった。むしろ立ち上がろうと思えば思うほど、どんどん体から力が抜けて行ってしまう。

そんな絶望的な状況の中、さらなる絶望が少女に迫る。

「お迎えにあがりましたよ、アリス様」

声は、爆心地から。

瓦礫の山と化した街の一角で、粉塵を引き裂きながら声の主が現れた。

黒いタキシードを着用した男だった。頭にはシルクハット。首には蝶ネクタイ。胸ポケットには白いハンカチ。地面を踏みしめるのは黒い革靴。紳士的な姿勢格好ではあるものの、その二メートル以上もある高身長が、嫌な威圧感を放っている。

少女は、その男に見覚えがあった。

彼女の家に代々仕える、『番犬』と呼ばれる従者の魔術師だった。

つまり、追いつかれた。

その事実気付いた直後、アリスと呼ばれた少女はどうしようもない恐怖に襲われた。

「い、や……」

少女の生存本能が勝手に動いた。

立ち上がれないまま、彼女は地を這うようにその男から逃げようとしたのだ。

だが、何もかもが遅過ぎた。

「申し上げましたよ。お迎えにあがりましたと」

声が響いた。

アリスの頭上から。

「っ!!」

直後、ゴグンツ!! と脳を揺さ振る衝撃が少女を襲う。

タキシードの大男が、少女の細い首を片手で締め上げ、そのまま持ち上げていた。

「あぐ——く、」

「抵抗はおすすめしません。大事な素体に傷が付いてはいけませんので」

少女本人ではなく、少女の体にしか視点が置かれていないその言い草。

彼女の意思などどうでもよく、あくまで魔術師としての肉体だけが重要だという大前提。

そして、体を大事にしなげればと言う割に、まるで壊れかけの家具を捨てるか修理するかを悩むような雑な扱い。

その言葉一つ一つが。この挙動一つ一つが。

アリスの目には、ただの恐怖にしか映らない。

「……す……、……て」

小さな声で。

「た、す……け——て」

潰れた声で、アリスは助けを求める。

とにかく「死にたくない」という一心だった。魔術なんて知らない。名声なんかいらぬ。家門になんて興味が無い。ただただ死にたくない。本当にそれだけだった。

そんな声に対してだ。

タキシードの男は少女の声に対して、極めて単純な返答をした。

「何をおっしやっているのか理解しかねます」

タキシードの男は、一切の悪意もなく首を傾げ、純粹に疑問の声を上げていた。当たり前前の感性さえ、その男には理解できない。

元より、理解する機能を持ち合わせてはいない。

「さてアリス様、門限が近付いてまいりました」

「——っ!?!」

その言葉が合図だった。

ザツ!! と。タキシードの男の背後に、何十人もの黒い影が姿を現わした。

それら全員、彼女を連れ戻すために放たれた『番犬』達。

たとえ何か奇跡が起きて、目の前の男から逃れられたとしても、他の『番犬』達がそれ以上の逃亡を許さない。

……もう、逃げられない。

「ご安心ください、痛みはございません。少しばかり眠っていただくだけでございます。一私わたくし共はただの『番犬』、アリス様にご足労をかけるような真似はいたしません。目が覚めれば元の独房でございますので、気を揉む事なく、ゆっくりお休みなさつ

てください」

何もかも、どうしようもなかった。

その『独房へ戻る』という事自体が少女の恐怖なのだと、微塵も気付けない男も含めて。

「……いや……」

また戻る？ あの地獄に？

それは……それだけは、何があっても絶対に嫌だ。

再びあの地獄を味わってしまったえば、もう後戻りはできない。二度と抗う事ができなくなる。心が壊れてしまう。そして壊されたら全てがおしまいだ。

死んでしまう。

体も、心も。自分の全てが。

そう分かっているからこそ。

—— 助けて。

アリスは願う事しかできなかった。

己の非力を呪いながら、悔やみながら、それでも奇跡を待つしかなかった。

—— 助けて。

どこの誰でも良い。

魔術師でも、そうじゃなくてもいい。神でも天使でも、悪魔でもいい。だから。

だから……。

「たすけて……！」

「了解」

あるはずのない声が届いた。

タキシードの男が、得体の知れない魔術をアリスに掛けようとした、その三秒手前の事だった。

ゴツツツツと。

横合いから『何か』が放たれ、全ての光と音が消滅した。

まるで周囲一帯の空気がまとめて大爆発を起こしたようだった。

絶大な速度と圧力。その攻撃の正体がたった一発の『斬撃』であると、一体誰が気付けたか。

下から上へと振り上げられた剣の軌道をなぞるように、縦に伸びる衝撃波が一直線上の全てを音速の三倍で薙ぎ払う。元より瓦礫の山と変貌していた路地裏は、今度の一撃で真正正銘の更地と化した。想像を絶する爆風が凶悪な空気抵抗を作り出し、剥き出しにされた地面がオレンジ色に赤熱していく。

余波が収まるまで、たっぷり一〇秒も要した。

気付けばタキシードの男は、アリスの至近から強引に腕ぎ取られるような形で吹き飛んでいた。

斬撃そのものではなく、そこから発生した余波の直撃を受けて。

「やれやれ……ちよつとやり過ぎちやったかな」

あまりに呆気なく、軽い声だった。

少なくとも、街の一角を粉々に薙ぎ払った者が発する声音ではなかった。

覆い被さるような余波も静まり、アリスはゆっくりと瞼を上げる。

そこに。

一人の少年が、右手に一本の『黒い剣』を構えて立っていた。

いつからそこに立っていたのか、アリスは全く気付けなかった。

唐突だったのだ、あまりにも。高速で近づいて来たというより、何の変哲もない景色の中からいきなり浮かび上がって来たかのような出現だった。

見た事もないデザインの衣装を着たその少年は、アリスに背中を向けるような形で立つ。

……いや、正確には『背を向けている』と言うより。

まるで、何者かから少女を守ろうとしているみたい……。

「うーん、ダメだ。まだ『ユニークスキル』の加減が分からない。こんなに力が強くても困るんだけどなあ」

「あ……」

「んっ」

困惑したような声を聞いて、その少年はようやく背後のアリスに気付いたようだった。

剣を持った少年は、しばらくアリスを見つめる。

そして、何かを悟ったみたいに目を細める。

「……やれやれ。詳しい事情はよく分からないけど、僕が何をすべきかはなんとなく分かったよ」

少年は改めて、少女に言葉をかける。

「色々訊きたい事があるだろうし、僕も君に訊きたい事がたくさんある。だけどその前に、やらなきゃいけない事があるみたいだね。……ねえ君」

おそらくこれが。

後に大きく世界の運命を変える事になる、最初の『出会い』だった。

「さつきも言ったけど、僕には詳しい事情が分からない。今がどういう状況なのかも、君がどういう状況なのかも。ただ、君は今、誰かに助けを求める。それだけは分かる。……一つ質問したい」

少年は問う。

何かの始まりのように、問う。

「僕は、君を助けてもいいのかい？」

単純で、簡潔で、純粹な、その問い。

だけどそこに込められた意味は、どんなものよりも重く少女の心にのしかかる。

人生の岐路。運命の分かれ道。

その最たる選択が、今、目の前に突き付けられた。

だけど、

「……たす、けて……」

悩む必要は無かった。

「たすけて……！」

答えなんかとつくに決まっている。

だって自分は、そのために逃げ出して来たのだから。

「生きたい……死にたくない……っ」

アリスは答える。

「わたしを、たすけて……！」

その答えを聞いて。

その言葉を聞いて。

右手に剣を構える少年は、静かに、誰にも気付かないほどゆっくりと、その剣を握る
右手に力を込めて、

「……了解」

再び少女に背を向ける。

直後だった。

力任せに元に戻しながら、

「――邪魔が、入りました」

正常な機能を取り戻した声で、言う。

それが合図だった。

月明かりが全てを照らす。

タキシードの男の頭部に、螺旋状に渦を巻く猫のような耳が生えていた。

そして彼の背後に並ぶ影達も、揃いも揃って異形の姿。

白い兎のような体毛を生やす赤い瞳の女。ネズミのような歯が顔中から生えている男。寄り集まって人間のシルエツトを形成している芋虫の群れ。全身がトランプで出来た人造人間。

「臨戦態勢に入ります。番犬コード：ハートのエース、通称『チエシヤ猫』。一時的な支配権を要請。要請受理を確認」

タキシードの男は。

鋭い牙で埋め尽くされた口を、大きく開けて告げる。

「――我ら、ハーグリーブス家直属従者部隊『番犬部隊』ワンダーランド。アリス様の回収任務遂行のため、これより、有害因子の殲滅作業に移ります」

「まったく、ロボットみたいな人達だね」

少年が何気なく呟いたその感想は、偶然にも正解だった。彼らは全員、魔力を動力源に稼働するだけの人造人間魔術師だった。

明確な意思も、複雑な思考も無く、ただ『魔力の提供者』の指示に従うだけの自律型戦闘人形。

それが、『番犬部隊』と呼ばれる魔術師達の正体だった。

……などという、細かい事情も知らないまま。

「やれやれ」

少年はため息をついて、首を横に振る。

「厄介事は嫌だけど……助けを求める人を見捨てるなんて、もつと嫌だからね」

数十人もの人造人間達から、爆発的な殺意を向けられてなお。

少年の口調は、あくまで軽い。

「君、なるべく僕の近くにいてよ。離れるとむしろ巻き込んだじゃうから」

「え、あ……」

ようやく今になって、アリスの脳裏に当たり前の疑問が湧いた。

呆然と少年の背中を見上げながら、少女は弱々しい声で問う。

「あ……あなた、は……？」

「別に、誰ってわけでもないよ」

その問いに対する少年の答えは、ひどく簡単だった。
剣を握り、目を細め、目の前の敵に強大な殺気をぶつけながら――

「僕の名前はササキコジロウ佐々木小次郎」

ごくごく普通の。

平凡で平均的な。

ありふれた少年は。

名乗る。

「どこにでもいるような、ただの異世界人さ」

直後だった。

少女の命を脅かす『悪者』達に。

異世界からやって来た世界最強が、正義の刃を振りかざす。

02 【旅は道連れ世は情け】

「隙ありイイイイイイイイイイヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」
 ナイフ片手に背後から襲い掛かって来た暗殺者を適当に蹴り飛ばしたら、面白おかし
 い絶叫と共に近くの山を二、三個ぶち抜きながら吹き飛んで行った。

「憐れなり、我欲を捨てられぬ迷い人よ。力に固執するが故に苦しむのだ。その苦難と
 苦悶に満ちた人生、せめて私の手で終わらせてやバツツツ!!!」

突然よく分からない説教を垂れ始めた自称無欲な僧侶のハゲ頭を引っぱりたいたら、馬
 鹿みたいな勢いで地中に突っ込み、キラリと光る頭頂部だけが地面からひよっこり生え
 ていた。

ちされた。

「この地より遙か南……国を二つほど跨いだ先の大草原。そこにヌシの傷を癒す永遠の楽園があるじゃろう。誰の邪魔も入らず、誰の干渉も受けぬ、ヌシだけの聖域が。ヌシの終つひの住処すみかとなる、永久の極楽が！……そういうわけじゃからその……早いところこの街を出て行ってくれると非常に助か」

普通にムカついたので、占い師のジジイごとその街の半分を吹き飛ばした。

「で？」

旅は道連れ世は情け。

旅をするときに連れがいると心強いように、世の中を渡っていくには人情をもって仲良くやっていくことが大切だ……という意味らしい。

言われてみれば、確かにその通りかもしれない。嫌と言うほど実感がある。
一人だけの旅路なんて。

どうしようもなくつまらないし、下らなかつた。

「どこまで歩きやあいいーンだ？　これ」

自分の歩む道には、自分一人しかいなかった。

別にそれを苦しいと思つた事はないし、そんな現状を自分から積極的に変えていこうと思つた事も特にない。

でもなんとなく、満たされない気持ちがあつたのも事実だった。

「おー」

歩き続けて、およそ三〇日。

占い師のジジイが教えてくれた通り、ずっと南へと足を進めて、国を超え、海を干上がらせ、山を丸ごと消し飛ばして、一直線に進み続けてようやくだ。ようやく『目的の場所』に辿り着いた。

占い師曰く、永遠の楽園。

野花の咲く小さな丘を登り、その向こう側へと視線を投げた少年は、

「……………ははー」

思わず笑っていた。

目の前に広がるどうしようもない『絶景』に、目がやられるかと思つた。

見渡す限りの大草原だった。

地平線の向こうまで、鮮やかな緑が大地を覆っている。

物音一つしない。動物一匹見当たらない。どれだけ歩いて果てには辿り着けないような永遠の緑が、アーサーの目の前に広がっていた。

そよ風が吹く。

それだけで景色が大きく揺らいだ。

ザア!! と。海の波なんかよりも大きく、それでいて滑らかに。風に煽られた緑の大海原が優しく豪快に波打つのをアーサーは見た。

白い雲の泳ぐ晴天。太陽は今日もご機嫌。照らし出される緑の大海原は、いつそ太陽の光を反射して、キラキラと煌めいているようにすら感じた。

荒れた大地、焦げた大地、血まみれで赤黒く染まった大地なら飽きるほど見てきたが、こんな景色はおそらく今日が初めてだ。

こんなつまらない世界に生まれ落ちてから。

多分これが、初めて見た『絶景』だ。

「つつーわけで。これでしたらく放浪しなくても済むし、お前の役目は終わりつてわけだ」

草原の景色を視界に入れつつ、アーサーは言う。

独り言？ いいや違う。

これは明確に……『相手』に向かって話している。

——「旅は道連れ世は情け」。

この旅は、アーサーの一人旅ではなかった。

少年は右手に握り締めた『それ』を、顔の真ん前まで持つて来て。

言う。

「ここまでの道案内、心から礼を言うぜ。喜べ『蛇頭』」

「ひっ、ひii!？」

悲鳴があつた。

もちろんアーサーの声ではない。

アーサー以外は誰も立っていないはずの草原に、アーサー以外の何者かがいた。『それ』は女性だった。

しかし普通の女性じゃない。

もつと言うなら、人間ですらない。

数百数千数万という毒蛇が群がって出来た頭髪。肉食獣のように凶暴な牙。そして、太陽の光すら呑み込まんばかりに輝く宝石の目。その瞳には、見た者全てを石に変える能力があると言う。

メドゥーサと呼ばれる、正真正銘の怪物がいた。

正確には、その頭部だけが。

「お前の案内無しじゃ辿り着けなかったぜ。いやー助かった。おかげで大成功、文句なしだ」

「ひっ」

数千数万の蛇で出来た髪を片手で掴み上げながら、アーサーはメドゥーサの瞳なんか

掻き消すような眼光で、その顔面だけの怪物をゼロ距離で睨む。

出会いは本当に偶然だった。

占い師の言う通り南へ向かっている最中、偶然通りかかった森の中で、この蛇頭の怪物と鉢合わせたのだ。本来ならそのまま殺しているはずだったが、珍しく意思疎通できる魔獣で、しかも（脅迫して）聞けば、アーサーの目的地を知っていると云う。

というわけで、もれなくお持ち帰り。

首から下を消し飛ばして、頭だけをブラブラ引つ下げて道案内をさせながら、アーサーはここまで辿り着いたのだった。

「旅は道連れ世は情けとはよく言ったもんだぜ。この言葉を考えた奴に賞を送りてえ気分だ」

「なん……なんで!?!」

「なんで? 発明家には賞を贈るもんだろうが」

「ち、違う! 違うわよお!! どうしてアンタ——ツ!!」

首だけになったメドゥーサ。

宝石のように輝いているはずの瞳は、今や驚愕と恐怖に塗り潰され、穢れ、濁り、元の様相すら分からなくなっていた。

その理由はただ一つ。

「なんでアンタツ、アタシの目を見ても動けるのよお!」

メドゥーサの瞳。

見た者全てを石に変えるというその眼光。

そして今、アーサーは頭部だけになったメドゥーサと正面から顔を突き合わせている。能力通りなら今頃、彼の体は石と化していなければおかしいのだ。

では、なぜ彼は動いている?

メドゥーサの能力が効いていない? ……いいや、しっかりと効いている。

ではどうして?!

答えは簡単。

「ゴチャゴチャ喚くなや、体が石になったぐれえで」

アーサーの全身は、本当に石と化していた。

体のどこにも色彩がない。皮膚も服も関係なく全身が灰色に染まり、ザラザラした表面へと変質してしまっている。顔の凹凸だって、彫刻のように滑らかに表現されている。

彼は石になっていた。

言葉通り、ただの石に。

そしてその上で……石になった上で動いているのだ。

「石だろうが植物だろうが関係ねえ。足い動かせば歩けるし、手え動かせば物も持てるだろお前。そんなだけだ、そんなだけ」

常識でも語るような口調でアーサーは言う。

石になったはずの口を、強引に動かしながら。

普通は石や植物になったらそもそも足も手も動かさない——などという当たり前の常識は、彼には通用しない。

石になろうが植物になろうが、アーサーが『そうしよう』と思えば『そうなる』。

もはや、そういう次元の話。

「ば……化物ツ、アンタ化物よお!!」

「くはは! いいな! そういうジョークは好きだぜ俺あ!」

本物の化物から『化物』だと言われるその皮肉さに、アーサーは愉快そうに笑っていた。

ギギギギギギギ……ツ!! と。

固い石の音を鳴らしながら、それでも滑らかに、肉汁でも滴るように笑う。

「と……」

「ひっ!？」

アーサーの瞳が光った。

石になったはずの瞳が、宝石以上の輝きを放つ。

「俺、今、マジで気分がいいんだわ。お前のおかげで最高にハイだ」

「は……はひ」

緊張のせいで、思うように表情を動かせなくなるメドゥーサ。

「だからお前には褒美をやるうと思ってるんだ」

「なに……今度は何するつもりよ！ 嫌！ 褒美なんていらナイ！」

「しけた事言うなや。褒めてンだろ。喜べ」

「いいからさっさと殺してよお！ こ、こんなナリで！ こんな体にされて！ 恥を晒

すくらいならさっさと死んだ方が一〇〇倍マシよ！」

「まあまあ落ち着けて。落ち着いてるお前は綺麗だったぜ？ お淑やかで。ここ数日

ずーっと一緒だったもんなあ。よく知ってるよ、お前の事」

「ひい!？」

もう心が耐え切れなかった。

「やめて！ もうやめてえ！ アンタの声なんかもう聴きたくないのお!!」

……一体、数日間の旅の中で、彼女はアーサーからどんな仕打ちを受け続けてきたの

か。

首だけになったメドウーサ。

そんな惨めな化物が、少年の声を聞いているだけで恐怖を爆発させていた。

「そう言うなよ。楽しい旅だったじゃねえか」

「やだ、もうやだあ……！」

「化物の首で遊ぶのあ初めてだったからな。加減ミスってぶん投げちまったのはマジで悪かった。どうだ？ 楽しかったか？ 大気圏。燃え尽きて落ちて来たお前の顔を修復すんのも大変だったんだぜ？」

頭だけになり、抵抗もできず、

「崖から放り落とされたのも悪かったわ。お前の悲鳴ってこう……いい感じだからさあ、ちよくちよく聴きたくなるんだよ」

何度も何度も弄ばれ、遊ばれ、嘲笑われ、

「俺はちよおとおおとおおとおおおおおおおおぜつ楽しかったぜ、お前との旅。黙って話も聞いてくれるわ椅子になってくれるわテーブルになってくれるわムカついた時は殴らせてくれるわ、マジで最高だった。うん、お前も俺のハーレムに認定だ。いい記念になったな」

尊厳も何もかもを踏み躪られ、

簡単に壊れた。

「やだ！ やめてっ、許して！ お願い！ お願いだから！」

「いいぜ、お願いなら何でも聞いてやる。なんつったって俺は気分がいい。そら、どこに飛ばして欲しい。言ってみろ」

「違う！ 殺して！ お願いだから殺して！ こんな無様な姿になつてまで生きたいなんて思わないわよ!! だって、こっつ、こんな……！ 頭だけで！ 何もできずに！ 道端で惨めに朽ち果てるぐらいなら今すぐ死んだ方がマシよ!!」

「知らねえよそんなン。死に方ぐらいお前が勝手に決めろ。てめえの人生を俺に押し付けんな、めんどくせえ」

どうしようもないほどに、メドゥーサの言葉なんて届いていなかった。

自分一人。

アーサーの頭の中にあるものは、徹底的に自分一人。

「よかつたな、今からお前は自由だ。素敵な場所で素敵に生きて死ぬよ」

「と、飛ばした先が海とか川ならどうするつもりなの!?! アタシ溺れて苦しみながら死ぬだけじゃない!!」

「だあかあらあ、知らねえつつの。死にたがつてんだから丁度いいじゃねえか」

「……た、助けて!! 助けて誰かああああああああああああああああああ!!」

絶叫を置き去りにするような速度を叩き出し、蛇の頭部は衝撃波すら放ちながら逆向きの流星と化した。

情け容赦ない投擲。方角も目的地も定めず、いい加減に投げ飛ばした怪物の頭は、一瞬のうちに空の彼方へと消えてしまった。

遙か向こう……空に浮かぶ白い雲が突然、ポツ!! と大きな穴を開ける。

しかし次の瞬間には、アーサーは自分が放り投げた頭の事などすっかり忘れてしまった。

数日間も共に旅をしたというのに。

あれだけ褒美だの何だの言っていたのに。

彼にとつては、自分以外の森羅万象などその程度。

そこに一つの命があろうとも、過ぎてしまえばどうでもいい。

「ふああああああ……。あー眠い……」

スウ、と波が引いていくみたいに、アーサーの石化が解けていく。

しかし、もとより石化していても思うように体を動かせたのだ。今さら石化が解かれようが解かれなろうが、アーサーには何の関係もない。

関係がないなら、どうでもいい。

「とりや」

体を大の字にして、緑の大海原に身を投げる。

数枚の草の破片が宙へ舞い、ハラハラとアーサーの上から降って来る。

大自然のベッドに、大自然の布団。

「ああ……いいなあ、これ」

それも晴天という天蓋付き。

なんてこった。豪華にもほどがある。

太陽の光を全身で受け止めて、心地良いベッドに身を沈ませて、アーサーは大きくゆっくり息をつく。

「……最高のベッド、ゲットだ」

地平線の向こう側まで続く、一面緑の大草原。

その中で仰向けになり、静かに目を閉じる世界最強。

あらゆる生き物から拒絶され、あらゆる場所から追放され、永遠に一人のまま道を歩むしかなくなつた最強人生。

だけど、こんなにも最高のベッドが手に入ったのだから、案外、己の人生も悪いものじゃないのかもしれないと少年は思う。

静かに、目を閉じる。

長い旅の果ての楽園。

そこで少年は、束の間の癒しに心を投げた。
ちよつとだけ……眠ろう。

この時、アーサーはまだ知らなかった。

結局その一〇分後、まるで「アナタを狙って来ました」と言わんばかりのダイレクト
さで、空から巨大隕石が降って来る事を。

そして、それが自分に直撃する事を。

というか自分だけじゃなく、巨大隕石が地上に衝突したせいで、大草原が丸ごと焦土
と化してしまう事を。

最高のベッドが、一瞬で奪われるという事を。

今日も今日とて、いつも通り。

世界最強の魔術師は、ようやく辿り着いた寢床からも追放されるのだった。

03【判決】

事態はおそらく、『本人』が思っている以上に深刻だった。

*
*
*

「.....」
「.....。.....」
「.....」
「.....」
「.....」

.....
重苦しい沈黙があつた。

とある国の、とある街の、とある建物の、とある講堂にて。

一般市民には知らされる事のない重要な『会議』が、一般市民には知らされる事もなく、密かに開催されていた。

定期的に開かれる『国際会議』。

世界中に存在する『魔術協会』『政府』『司法組織』。この三組織に属する各国の代表者が一堂に集い、今後の世界の行き先や、交流関係……そして、どこの国がどこの国と手を組み、どこの国を貶めるかを水面下で決定し合う、世界で最も剣呑な会議。もとより権力者達に仲間意識など存在しない。

彼らの頭にあるのは、誰が利用でき、誰が敵になり得るかという簡単な二択。だからこそその、この雰囲気。

疑心と敵意と策略だけしか存在しない独特の空気が、その講堂を満たしていた。ただ、今回に関して言えば。

いつもよりは少しばかり、皆の心は一つにまとまっていた。

「誰でもいい。誰か『奴』の暴走を止められる者はおらんのか」

『魔術協会』代表者のうちの一人が、静寂を打ち破ってそんな風に言った。

それが合図だと言わんばかりに、今まで沈黙を保っていた各国各組織の代表者達も堰を切ったように喋り出す。

「どんな魔術師でも太刀打ち不可能なんですよ？ 一体どうしろと」

「しかしこのまま放っておくわけにもいくまい」

「要塞都市カルドキアも『奴』のせいで大打撃だ。一度は消滅したと言うじゃないか」

「素朴な疑問なんだが、『奴』の行動原理はなんだ。まるで予想がつかん」

「『奴』とて人間じゃ。その日その瞬間の気分で動いても不思議じゃなからう」

「しかも最強ですからね。誰も道を阻めない」

「カルドキアに関しては、その後謎の復活を遂げたそうだが……まさかこれも『奴』の仕

業か？」

「そうに決まっている」

「破壊するのは納得じゃが、創り直したのは何故かね」

「気紛れだろう、そんなもの」

「破壊も創造も、生かすも殺すも気分次第……これじゃあまるで神様だ」

「神なんぞよりタチが悪い。アレは下手に人間界に干渉しては来んかったが、『奴』は問

答無用で大暴れだ」

「神も神で拍子抜けだ、あんな『化物』に殺されおつて。おかげで宗教組織も減少の一途だ。重要な資金源だというのに」

「そのうち『奴』を神として崇め始める馬鹿共が出てくるやもしれん」

「もう出てきておりますよ。『奴』の暴虐武人な振る舞いに感銘を受けたならず者達が、各地で破壊活動を繰り返しているとか」

頭が痛くなるような話だった。

誰かがため息を吐き、目頭を押さえて「どうにもならん」と呟いたのがきつかけで、他の代表者達もそれにズルズル引っ張られるように、椅子の背もたれに全身を預けたり、こめかみを揉みほぐしたりと、皆一様に困り果てた仕草をする。

今まで持ち前の権力と威厳であらゆる物事を上手いように回してきた彼らからすれば、この状況はまさに屈辱の一言だ。

アーサー・ペンドラゴン。神を殺した世界最強の魔術師。

たった一人の魔術師を相手に、どうしてこうも頭を抱えなければならぬ。

「……結局、進展は無しか」

魔術協会代表者の一人。

黒い外套に身を包んだ老人は、そんな風に口を開く。

「昨日から同じ議論を続けて、未だに解決策の一つも出て来んとは」

「それを仰るなら、魔術協会殿、あなた方が誰よりも適任ではありませんか」

魔術協会の発言に反応したのは、『政府』関係者の一人だった。

「この世界の最大戦力である魔術師を一手に束ねておられるのは、あなた方魔術協会でしょう。これほどの適任者はおりませんまい」

「ならば貴様らこそ、即刻我々に『魔術兵器』使用の全権を委ねたまえよ。世界政府だか何だか知らんが、我々の魔術でこしらえた兵器の権限をなぜ貴様らが持っている。傲慢が過ぎるのではないのかね」

「力の一極集中を避けるため、『魔術兵器』の使用権限だけは我々に委ねてもいいと仰ったのは、あなた方魔術協会ではないですか」

「知らん。いつの話だ」

「あなたの先代からの契約だ」

「それこそ私の知った事ではない。それは先代が勝手に結んだ契約だ。私とはなんら関係がない」

「なんと……傲慢が過ぎるのは一体どちらだ」

「下民に首を垂れるだけの無能が。いつから我々にそんな態度を取れるようになった」

今日の会議は珍しく、皆が一つの議題について話し合える場のはずだった。

にも拘らず、やっている事はいつも通り、責任と罵倒の押し付け合い。

共通の敵をもつてすら、一つになる事が叶わないのか。

「口喧嘩なら別のところでやっていただきたいものだ」

そんな老人二人の口喧嘩に、周りはそのそろそろ本格的に呆れてきたらしい。

「昨日からずっとそうだったじゃないか。言い争うだけ争って結局何も進まなかったのだぞ」

「もう喧嘩の仲裁は懲り懲りだからな」

どこの国のどこの組織の代表かも分からない二、三人から、野次のような声が飛んだ。

ほとんど名指して諫められ、政府代表者の老人はため息と共に椅子に身を沈ませる。

一方の魔術協会代表の老人はイラつき任せに馬鹿でかい舌打ちを鳴らして、「黙っておればよいものを、能無しが」——わざと聞こえるように呟いた独り言も、周囲は完全に聞かなかつたフリをする。

「しかしまあ、このまま会議を続けたとて、解決策など出るかどうか」

「出るかどうかより、出さねばならんじやろう。奴が事を起こせばいちいち被害が甚大じゃ」

「でもここまで来たたら天災ですよ。防ぎようがない」

「だから言っている！ 我々に『魔術兵器』を返還しさえすれば容易く奴を片付けられるとー！」

「兵器が増えたところで何ができるといふのだ」

「そもそも魔術の最強相手に魔術で挑むなんて無謀過ぎます。海に涙を垂らすようなものですよ、魔術以外の方法を模索しないと。……そういえば、一時期騒いでいた『自然科学』とか言う連中はどうだったんですか」

「カルドキアの一件以来、忽然と姿を消しおったわ」

「もとより世迷い言を垂れる異常者共だ。放っておけ」

議論は空回りを続けていた。

言葉を交わしはするものの、実際には物事が一步も前に進んでいない。

それはこの場にいる誰もが理解していた。

理解していながらも、この現状を打開できる案が浮かばなかった。

アーサー・ペンドラゴンという脅威の排除。

いつそ荒唐無稽にすら思えるその命題。

しかし、だからといって後回しにできるほど、奴のもたらす被害は小さくない。

むしろ今すぐ解決策を見出さなければ、この先どんどんとネズミ算式に被害が膨れ上がっていくだろうと予想される最重要項目。

どれだけ悩もうが、迷おうが、いつかは決断を出さねばならない。

「……誰かおらんのか。奴を止められる者は」

黒い外套を着た魔術協会代表の老人が、最初と同じ言葉を吐いた。

「……ただ、それに答えられる者は一人もいなかった。」

「……我こそはと名乗りを上げる者も。」

「……ここは皆で協力しようと、当たり前前の提案をする者さえも。」

「……ただの、一人も——」

「……おや？　不思議なものです。世界最強の抹殺というこの上ない名誉を手に入れるチャンスなのに、どなたも立候補されないとは」

「……その時だった。」

「……誰かが、口を開いた。」

「……ならばその大役、ワタクシが引き受けましょう」

「……静寂を引き裂くように、一つの声が飛んだ。」

講堂に集っていた代表者達が、一斉に声の主へと視線を向ける。

先程まで言い争っていた老人とは別の、魔術協会代表者の一人だった。

年齢はおそらく三〇代に入ったばかり。代表者達の中では一番若い。

腰まで伸びた白髪に、暗闇の中でも光りそうな青の瞳。スラリと伸びた肢体を包む衣装には、清楚ながらも猛々しい刺繍が施されている。

貴族と呼ぶには爽やか過ぎて、権力者と呼ぶには若過ぎる。

そんな印象の男だった。

「……なんだと？」

訝しむように眉をひそめたのは、黒い外套を着た老人だった。

彼は明らかに見下した目つきで、声を上げた男を睨み、

「貴様を買って出るだと？ 奴の始末を？」

「ええ、どなたもやりたがらないようなので。……ご不満でも？」

「若造が。ぬかしよる」

まず最初に否定から入った。

「貴様のような若輩者に何ができる。この機に乗じて名を上げようという薄汚い魂胆が見え透いておるわ」

「長老様は相変わらずお厳しい。誰も声を上げないなら上げないで文句を言い、上げた

ら上げたで文句を言いなさる。困ったものです」

「……誰に口を利いているのか分かつているのか？」

「残念ながら完全に。……結局は失敗した際の責任の追及を恐れて身動きの取れなくなった憐れな老いぼれと認識しています」

「貴様ア……ッ！」

「ほお、凶星と見える」

老人からの恨みがましい視線など右から左へ受け流し、男は静かに席から立ち上がる。

そして薄く笑みを浮かべ、講堂に集まった老いぼれ共を軽く見渡すと、

「承知しました、ならばこう致しましょう！」

そう言つて、大きく一回手を叩く。

男の声だけが、講堂中に響き渡る。

「これからワタクシは、魔術協会代表者の一人としてではなく、ワタクシ個人として動きましょう。誰の指示も仰ぎません。誰かに責任をなすり付ける事も致しません。ワタクシ個人が、ワタクシの意思で、ワタクシの責任で、ワタクシが勝手に、アーサー・ペンドラゴンの排除を買つて出ましよう。……いかがですか？ これなら文句はありませんまい」

演説じみた言葉の最後に、男は嘲るような表情で老人の方を見やる。

「さあ、怒りをお鎮め下さい長老様。あなた様は何を案ずる必要もなく、暖かい部屋で紅茶でも飲みながら、くつろいでいればよろしいのです。……何もできぬ赤子のように、ぬくぬくと、惨めに、ベッドの上にも寝そべりながら」

「なん、」

「ああ！ 喜ばしいではないですか！ 悦ばしいではないですか！」

相手を小馬鹿にするピエロのように、大袈裟に拍手をしてケタケタ笑う男。

その態度に、老人は頭の血管が切れるかと思つた。

「こ、のつ……貴様あ!! 黙つていればつけ上がりおつて——」

「できるのかね？」

その時だった。

激昂する老人の声など丸ごと無視するように、別の声が飛んだ。

今度はそちらの方に、全員の注目が集まる。

魔術協会でも、政府でもなく、『司法組織』代表者の一人だった。

老人、とまではいかなくとも、顔に分かりやすくシワが出始める年齢の男。

そんな彼は、名乗りを上げた魔術協会の男に、力のない声で問う。

「きみ個人でと言つたね。……できるのかね」

「ご安心ください」

対する男は軽薄そうに笑って答えた。

「皆様様には一切のご迷惑をおかけしませんので。たとえアーサー・ペンドラゴンの始末に失敗し、大損壊を被ろうとも、その責任は全て、このワタクシが」

「そういう話は後でしよう」

はつきりと言う。

この場には不釣り合いなほど落ち着いた声音に、講堂がシンと静まり返る。

「迷惑、被害、責任……それはまた別の話だ、するとしても今ではない。……大役を買って出ると言ったね、きみが」

「ええ」

「きみの意思で」

「はい」

「きみの力で」

「そうですとも」

「任せてもいいのかね」

最初の質問に戻って来た。

「情けない事に、我々は奴に抗う術を持たない。魔術も兵器もおそらく奴には通じない

だろう。そして決死の特攻をかけるほど、我々も失うものが無いわけではない。色々と持ち過ぎた。……大人しく屈服する他にはないと思っていた。だがそんな折にきみの宣言があつた」

司法組織代表の男は。

この時初めて、魔術協会代表の男に目を向けた。

「任せてもいいのかね？ きみに、アーサー・ペンドラゴンの始末を」

その瞳が、一直線に飛ぶ。

萎縮などしなかつた。

司法組織の男の瞳に見据えられた、魔術協会代表の男。……彼は嘲るようでも、馬鹿にするようでもない、本当の笑みを浮かべながら、

「全て、ワタクシにお任せを」

そう答えた。

その答えで全てが決まつた。

最初から、決まっていたようなものだった。

しばしの沈黙があつた。

異議申し立ての時間のつもりだった。

しかし、誰も何も言わなかつた。

たとえ異を唱えたところで、代案を提示できる者もいなかつた。

この沈黙が、この会議の終点だった。

「……………頼む」

司法組織代表の男は、終わりの合図のようにそう呟いた。

とある国の、とある街の、とある建物の、とある講堂。
誰にも知られない会議の中で、一つの『判決』が下った。